

競走会

連合会・競走会篇

群馬県競走会

競願で一時は暗礁にも

中央でモーターボート競走法案の国会通過促進に必死の努力がなされていた昭和26年当時、群馬県ではすでに同年1月の時点で、県内における競艇開催についての話合いがもたれている。競馬関係者である東京都の荒居養洲氏(元競走会専務理事)が、連合会囑託として席を置いており、たまたま笹川良一氏よりその示唆を受けたことから、親交のあった桐生市の田中義賢氏(前競走会理事)へと話を結んだものであった。

強い関心をもった田中氏は笹川氏を訪れ、そこで群馬県内における競艇事業創設についての推進方を依頼されるところとなる。これより田中、荒居両氏は協義を重ね、結果として当初太田市において運動を開始。約3ヵ月にわたっ

て折衝を続けるが理解を得るに至らず、その運動の方向を桐生市へと転換するのである。

桐生市ではまず競走場候補地として阿左美沼をあげ、同所で遊園地事業を経営する織田博氏を擁してその事業経営に関係のある野間恒次氏を会長に、織田氏を副会長に推していよいよ群馬県モーターボート競走会設立の企図はなる。競走会創立仮事務所を野間商店内においての本格的活動が開始され、許可申請書提出準備はもちろん広く会員の募集にも着手するのである。一方、施設設置については、桐生市が財政上の困難をきわめていたこともあり、競走会有志は市と特殊な契約を締結し施設会社を設立すべく奔走するが、努力の甲斐なくついに実現をみるには至らなかった。しかしこれはその後、笹川良一全連会長の尽力によって、福井県の酒井建設(株)酒井利雄氏の協力を得ることができ、ようやく施設着工の運びとなる。



▲競走会事務所(初開催時)



▲競走会事務所(昭和57年)

さて、中央では難産の結果ついにモーターボート競走法が誕生、これを追うように群馬県競走会設立準備は活発化し、会員も60余名を得て、昭和26年7月23日には創立総会を開催。定款を承認すると共に役員を選任、設立許可申請に必要な一切の書類を整えて26年8月21日、前原桐生市長、伊能群馬県知事、関東海運局長を経由し、時の運輸大臣のもとへと進達された。

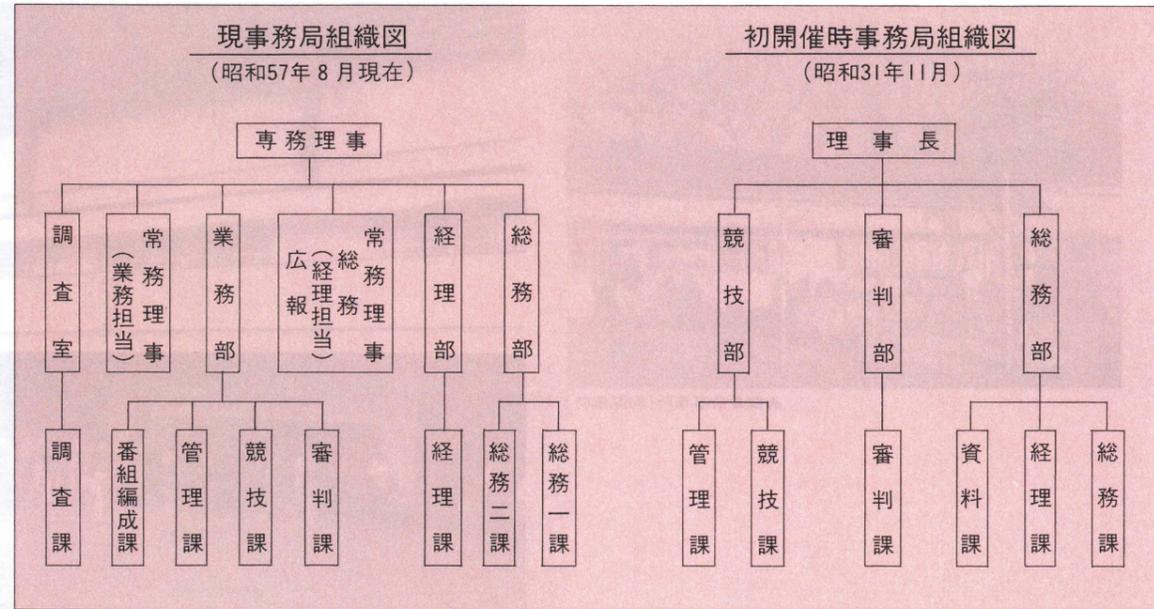
しかしその後、当時自民党の小峰柳多代議員(群馬出身)より榛名湖を開催地とする競走会設立の許可申請が競願され、一時は暗礁に乗り上げたかたちとなってしまふ。だが競走会役員必死の努力と、笹川全モ連会長を始めとする大勢の方々のご尽力もあって、吉田内閣改造後の村上運輸大臣により、昭和27年3月20日認可されることとなり、難産の末ながらここに群馬県モーターボート競走会の誕生をみるのである。

文化都市の自負を背景に

競走会設立認可に続く次の問題は施行権の獲得であるが当時の世相はギャブルスポーツに対しことのほか厳しいものがあつた。文化都市を自負する桐生市においてはましてやの観もあり、その開催については賛否両論がごうごうとして新聞紙上を騒がせていた。

しかし桐生市の財政は、15,000万円の市税滞納を抱えて四苦八苦の状態であり、これを解消するには税外収入の道をひらくことが第一の条件でもあつたのである。そこで関係者、市民の理解を求めるとに努力した結果、世論も次第に施行へと移行し、昭和29年9月13日には施行権指定の申請を行うに至る。そして翌30年3月18日、ついに認可。

この間競走会は資金が枯渇するが、何とか苦難の運動を続け、昭和31年11月8日、いよいよ待望の初開催を迎えることとなつたのである。



歴代会長

代	会長名	任期
初	野間恒次	26.7 ~ 29.7
	 [略歴] ●大正11年株式会社野間商店専務取締役就任 ●昭和25年群馬県桐生市体育協会理事就任	
2	笹川了平	29.7 ~ 56.8
	 [略歴] ●菊水、箕面学園、信用金庫理事長、箕面公平委員、高野山枢議、(株)大阪日日新聞社主、航空公害防止協会理事、紺綬褒賞受賞、自治、法務、運輸大臣表彰	
3	笹川 堯	57.5 ~ 現在
	 [略歴] ●世界モーターボート連盟副会長、モーターボート協会副会長、B&G財団理事、笹川記念保健協力財団理事、全日本空手道連盟理事、東京都空手道連盟会長	

歴代役員

代	副会長名	任期
初	織田 博	26.7. ~ 31.12.
//	新井 幸長	26.7. ~ 27.5.
2・4	野間 恒次	29.7. ~ 32.12.
3	海野 幸世	31.12. ~ 31.12.
4	田辺 英之輔	32.12. ~ 33.5.
5・6	野間 仁一	33.5. ~ 35.5. 45.5. ~ 47.7.
7	橋場 利蔵	51.5. ~ 56.3.
代	理事長名	任期
初	早川 政雄	31.8. ~ 31.12.
代	専務理事名	任期
初	早川 政雄	27.5. ~ 31.8.
2	田辺 英之輔	31.12. ~ 32.12.
3	野間 仁一	35.5. ~ 45.5.
4	荒居 養州	47.5. ~ 51.5.
5	上田 芳道	51.5. ~ 現在

競走会構成員数の推移

項目	年度	初開催時						
		30	35	40	45	50	55	57
会 員	114	114	110	110	111	108	104	107
役 (常勤、非常勤)	15	15	15	11	12	14	13	12
職 (含、嘱託)	25		25	25	29	24	36	34
臨時従業員 (アルバイト)	39		39	33	31	40	30	31
登録審判員	2		4(5)	7(9)	8(12)	7(11)	7(10)	7(10)
公認登録検査員	1		6	6(8)	8(9)	6(7)	9(10)	9(10)

(注)各年度とも4月1日現在の集計、但し57年度は当表作成時(57年10月現在)備考()内数字は資格者実数

年 表			
年月日	事 柄	年月日	事 柄
26. 7. 23	競走会創立総会開催、野間恒次氏会長就任	43. 5. 23	若松競走場で死亡した半田選手の合同葬
27. 3. 20	群馬県モーターボート競走会設立認可	43. 6. 13	第14回関東地区モーターボート選手権競走
27. 5. 16	競走会第一回通常総会開催	45. 7. 15	メインスタンド第1期工事完成
28. 6. 20	第1回モーターボート試走会(阿左美沼)	45. 8. 19	モーターボート走行式自動同時発艇装置のテスト開始(終了48年12月撤去)
29. 7. 28	競走会臨時総会開催、笹川了平氏会長就任	45. 12. 17	FRPボートにて全レース実施
30. 3. 18	桐生市の施行指定認可	46. 6. 15	メインスタンド第2期工事完成
30. 3. 28	運輸大臣から競走場建設許可	46. 8. 12	第17回モーターボート記念特別競走開催
31. 10. 2	競走会職員採用試験実施	47. 6. 29	第18回関東地区モーターボート選手権競走
31. 11. 7	桐生競走場登録	47. 8. 12	第1回納涼まつり開催(49年まで毎年)
31. 11. 8	初開催(2106000円 5,090名)	48. 8. 15	警察官派出所新築完成
32. 3. 15	笠懸村の施行指定認可	49. 3. 26	昭和47年度舟券売上上昇率最高賞を受賞
32. 3. 26	阿左美水園競艇組合設立認可	50. 2. 27	第20回関東地区モーターボート選手権競走
32. 4. 19	執行本部棟焼失(32. 7. 4新築完成)	50. 4. 1	場内テレビモニターカラー化
32. 5. 21	阿左美水園競艇組合、初開催	50. 8. 28	正門、庭園、婦人子供休憩所完成
36. 7. 8	第7回関東地区モーターボート選手権競走	51. 6. 4	全国初の遠隔自動発艇装置使用開始
37. 9. 7	第1回ファンサービス謝恩芸能大会を開催	51. 8. 3	ファンモニター懇談会開催
38. 3. 24	突風により競走場全施設に大きな被害	51. 8. 12	第22回モーターボート記念特別競走開催
38. 5. 31	第9回関東地区モーターボート選手権競走	51. 11. 17	競走会物故者慰霊法要、創立20周年記念
38. 7. 14	第1回青少年モーターボート競技大会	51. 11. 18	桐生競艇開設20周年記念式典
38. 8. 5	ときわ丸海難事故遭難死亡選手2名合同葬	51. 12. 18	緩衝機つき消波装置増設競走水面プール化
39. 2. 21	特観席、主審判塔を新増築し冷暖房設置	54. 5. 24	桐生競艇総合警備訓練実施(毎年実施)
40. 5. 31	第3回ファンサービス謝恩芸能大会を開催	56. 2. 6	第26回関東地区モーターボート選手権競走
40. 6. 17	第11回関東地区モーターボート選手権競走	56. 8. 17	笹川了平会長退任、上田専務理事長代行
40. 8. 19	第3回青少年モーターボート競技大会	56. 10. 24	選手宿舎、三山寮新館完成
40. 10. 16	前橋まつりカーニバルに参加知事賞を受賞	56. 12. 14	新スタンド増築落成、開設25周年式典
41. 6. 2	ケーニヒモーターレース全レース実施する	56. 12. 22	県内公営競技プロ選手カラオケ大会に参加
41. 10. 25	選手宿舎、三山寮完成	57. 1. 21	選手宿舎、三山寮増改築竣工
42. 4. 20	KB1型モーター「ふじ」でレース実施	57. 5. 13	施設改善記念特別競走
43. 5. 13	本命艇の出遅れ気味のスタートに不満をもつファンにより大きな騒擾事件となる	57. 5. 14	第55回通常総会開催、笹川堯氏会長就任

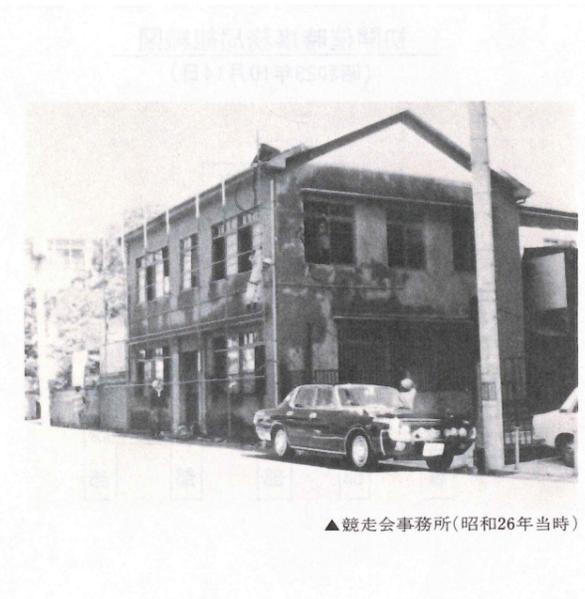
埼玉県競走会

一本化に総力を挙げ円満解決

昭和25年春、笹川良一氏の呼びかけに応じて各地でモーターボート競走会の設立気運が高まりつつあった頃、埼玉県でも初代会長となった石川一衛氏が、荒廃した地方自治体の財政を建て直すには公営競技による以外方法はないと終始主張、県内外の有志100余名の賛同を得て、競走会設立の認可申請を運輸大臣に対し行っていたのである。

ところが、この認可申請書には県知事の副申請書が必要であったため埼玉県当局に対しその申請を行ったところ、これと前後して元埼玉県内務部長広橋真光氏が日本漕艇協会理事等と図り、戸田町の有志達に呼びかけて同じく競走会の設立を計画しており、埼玉県に対しては競願のかたちとなってしまった。県当局はその処置に窮しいずれも適任で

あるとの副申請書を添えて運輸大臣に申請をした。競願を受けた運輸省では両者話し合いの上で一本化に向うよう指導し、また当事者間でもその線に沿って石川氏と戸田町側とが数次にわたって懇談を重ね、県内外の有力者のほとんどが石川氏側の発起人に名を連ねているところから戸田町側発起人の大部分が石川氏側へ合流したこともあって、競願は自然に解決しすっきり一本化された。そこで競走会は、昭和26年6月25日浦和市の日本赤十字社内の精養軒で創立総会を開催、福永健司代議士を議長に挙げ初代会長に石川一衛氏を選任、埼玉県競走会の第一歩を踏み出したのである。そして昭和26年10月4日、運輸大臣から競走会設立登記を行う。会員数103名、入会金145万円であった。こうして競走会は設立されたが、競走場建設という時になって大きな困難に遭遇する。当初会員になるはずであった漕艇協会代表が「合流、に反対の意を表明するのである。



▲競走会事務所(昭和26年当時)



▲競走会事務所(昭和57年)

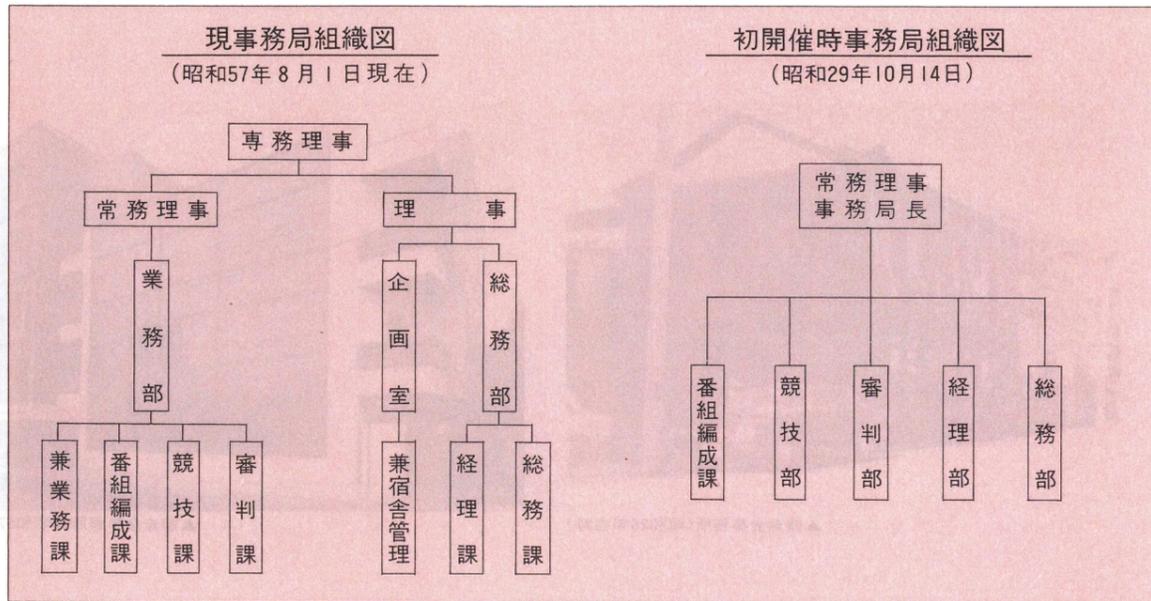
「モノコにする気か」の反対を押し

発起人に名を連ねながら会員になることを拒否した漕艇協会は、競艇場として戸田ボートコースを使用することにも反対しはじめた。その主張は、「戸田ボートコースは欧米諸国から世界一と折紙をつけられた土木技術日本の優秀性を物語る場所。名門ケンブリッジ大、オックスフォード大等のボートクルー招待レースも計画中である。日漕としてはあくまで全国的視野に立ち、一県一町の問題ではなく広く世界的見地から反対しているのである。」というものであった。また時の知事は、ボートコース西端で開催したとしても国道17号線から2mも奥に入った場所では採算もとれないだろうし、道路を作る予算もないという現実論からコース東側を借りようと日漕と話し合いをしていた。さらに埼玉県議会では県内にはすでに競馬、競輪、オートレースがあるのに何故にボートレースを開催する必要があるのか、

埼玉県をモノコの如きものにする気かとの反対論が出たが当時県議会で活躍されていた染谷清四郎県会議長（2代会長）、関口佐源太県議（初代副会長）らの説得によりようやく本会議でボートレース実施案議決となり、日漕側もコース西端ならやむなしとの態度になった。

また同じ頃、地元戸田町の一部住民と労組が反対運動を起し、町内や川口駅前で反対署名運動を展開していたが、それも金子庄五郎戸田町長（3代会長）らの努力により、あまり拡大しないうちに収拾された。

一方、競走場の施設者である戸田組合では資金の調達見通しが立たぬ等さまざまな問題が山積していたが、石川初代会長をはじめとする役員諸氏らの血の出るような努力の連続によってこれも次々と解決され、競走会設立から満3ヵ年の長い歳月を費やしてようやく昭和29年10月14日に初開催の運びとなったのである。



●歴代会長

代	会長名	任 期
初	石川一衛	26. 6 ~ 35. 5
	 [略歴] ●東都土木、日本踏鉄、石川工務店、日米建設の各社長就任。参議院議員に当選。競走会名誉会長。	
2	染谷清四郎	35. 5 ~ 50. 9
	 [略歴] ●川越市会議員、埼玉県議員歴任中県会議長、県自民党幹事長。榑角大商店社長就任。	
3	金子庄五郎	50. 10 ~ 55. 5
	 [略歴] ●(有)金庄、協栄倉庫(有)、大和冶金工業(株)の各代表取締役。戸田町長、遺族会長、競走会名誉会長	
4	西田貞雄	55. 5 ~ 現在
	 [略歴] ●埼玉及群馬慈恵会、熊谷脳病院の各病院長。羽生園理事長、熊谷市会議員、埼玉県議員	

●歴代役員

代	副会長	任 期
初	関口 佐源太	26. 6 ~ 27. 5
//	金子 庄五郎	26. 6 ~ 30. 7
2	染谷 清四郎	27. 5 ~ 29. 8
3	中島 半平	31. 5 ~ 41. 3
//	池上 尚久	31. 5 ~ 32. 3
4	西田 貞雄	47. 5 ~ 55. 5
5	熊木 輝雄	55. 5 ~ 現在
代	専務理事名	任 期
初	関 柢二	26. 6 ~ 27. 5
2	関口 佐源太	27. 5 ~ 29. 11
3	寺山 源助	29. 11 ~ 31. 5
4	阿久津 喜三	41. 5 ~ 45. 5
5	広田 馬次郎	45. 5 ~ 47. 5
6	武井 靖昌	55. 5 ~ 現在

●競走会構成員数の推移

項目	年度							
	初開催時	30	35	40	45	50	55	57
会 員	103	103	102	98	99	101	98	100
役 員	17	17	15	15	15	15	15	15
職 員	22	16	17	20	29	29	24	26
臨時従業員	24	24	25	24	25	25	33	31
登録審判員	6	4	6	6	16	17	18	17
公認登録検査員	5	4	6	6	17	17	19	17

(注)各年度とも4月1日現在の集計、但し57年度は当表作成時(57年8月現在)

年 表		年 表	
年月日	事 柄	年月日	事 柄
26. 6. 18	モーターボート競走法制定	41. 8. 7	1日売上金額1億円突破
26. 6. 25	埼玉県モーターボート競走会創立総会	41. 10. 26	創立15周年記念式典挙行
26. 6. 25	初代会長石川一衛氏選任	43. 9. 5	第4回鳳凰賞競走開催
26. 10. 4	埼玉県モーターボート競走会設立許可	44. 7. 1	戸田競走場独立警備隊発足
27. 3. 29	埼玉県議会モーターボート競走の実施議決	45. 1. 28	競走場西側に新大宮バイパス全線開通
29. 6. 17	戸田競艇組合設立	45. 11. 14	競走場地下連絡結道完成(全長300m)
29. 10. 14	戸田競走場初開催	46. 10. 8	創立20周年記念式典挙行
29. 10. 14	開催初年度1日平均売上3,113,600円	49. 5. 1	競走会沿革史発刊
30. 4. 16	売上向上対策の実施	50. 7. 26	浦和事務所新築落成
30. 4. 16	隅田川で編隊航走、模擬レース等でPR	50. 10. 8	染谷会長辞任、3代会長金子庄五郎氏選任
30. 12. 12	池袋、レース場間に片道無料バス新設	50. 11. 1	戸田競走場ファンモニター制度発足。後に戸田ボート友の会と名称変更
32. 11. 1	埼玉県十市競艇組合設立	51. 2. 21	染谷清四郎前会長逝去
32. 11. 1	後に七市を加え埼玉県都市競艇組合となる	51. 10. 1	社団法人関東海事広報協会埼玉支部設立
32. 12. 1	1日売上金額1,000万円突破	52. 6. 30	戸田競走場増改築工事完成
33. 5. 16	浦和市仲町の現住所に事務所購入	52. 10. 27	競走場西側の新笹目橋全面開通
34. 11. 30	東京オリンピック組織委員会はボート会場を戸田コースに決定	52. 11. 23	1日売上金額10億円突破
35. 5. 16	石川会長辞任、2代会長染谷清四郎氏選任	53. 8. 18	競走場東側の新戸田橋全面開通
35. 9. 1	石川名誉会長逝去	55. 5. 19	金子会長辞任、4代会長西田貞雄氏選任
36. 3. 20	戸田選手宿舎新築落成	55. 11. 14	財団法人埼玉海事育英財団設立
37. 10. 24	戸田ボートコース東京オリンピックボート会場のため戸田競走場レース一時中止	56. 10. 8	創立30周年記念式典挙行
37. 12. 23	事務局解散、一部職員を残し連合会、東京都、群馬県各競走会等に転職	57. 2. 25	戸田競走場発売窓口機械化完成
38. 4. 1	競走会課税団体となる	57. 5. 1	56年度1日平均売上715,758,200円
40. 10. 28	戸田競走場レース再開		戸田競走場総合表示盤(オッズ盤)使用開始
41. 3. 30	競走再開謝恩会を連合会、東京、群馬の役員を招待して長瀬にて開催		
41. 8. 4	第12回全国地区対抗競走開催		

東京都競走会

候補地求めて二転三転の場面も

モーターボート競走法の公布施行を機に、全国各地では急速に競走会の設立、施行者の決定、競走場の選定などが進められてゆくと、東京都においても準備は着々と進んでいた。そして、競走法施行より4ヵ月後の昭和26年10月20日、元衆議院議員中島守利氏を発起人代表とする社団法人東京都モーターボート競走会設立認可申請を、東京都知事の副申請を添付の上運輸大臣に提出。同年11月14日付で設立認可となり、東京都モーターボート競走会は正式に発足したのである。

次いで11月27日には、衆議院第3議員会館において総会を開催、定款と役員(会長岡田忠彦氏)の選任、競走実施の準備へと踏み出した。

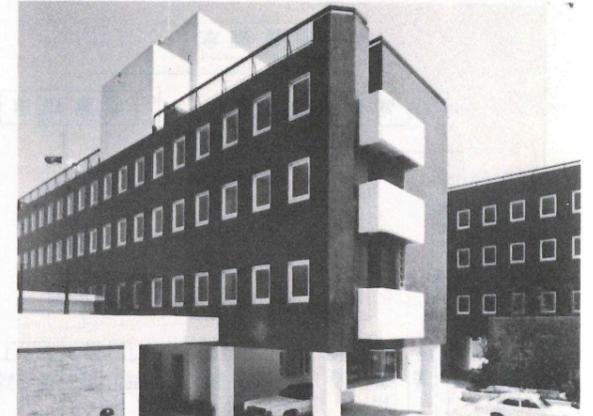
こうして競走実施への準備が進められるなかで昭和28年2月、大田区議会においても大森海岸の競走場建設が認められた。

一方、昭和27年5月20日、山名義高氏(2氏副会長)から杉並区大宮公園の地を候補地とする事前審査申請書が提出され、6月27日認可となった。しかし一部地元住民の反対が強く、懸命の折衝が続けられたものの和解には至らずついに当候補地を断念、改めて宮本求氏(会員)の手により調布町を候補地とする申請がなされる。しかしこれもまた土地の所有権をめぐる訴訟となり、早期解決の見通しがたたないとして再度候補地を変更、現多摩川競走場の府中市是政に落ち着いたのであった。

こうしてようやく、昭和29年2月19日大森海岸(大森競走場)、府中市是政(府中競走場)が、同じく29年11月29日中川放水路(江戸川競走場)が認可され直ちに工事にはいった。



▲多摩川選手宿舎(昭和33年当時)



▲競走会事務所・大森選手宿舎(昭和57年)

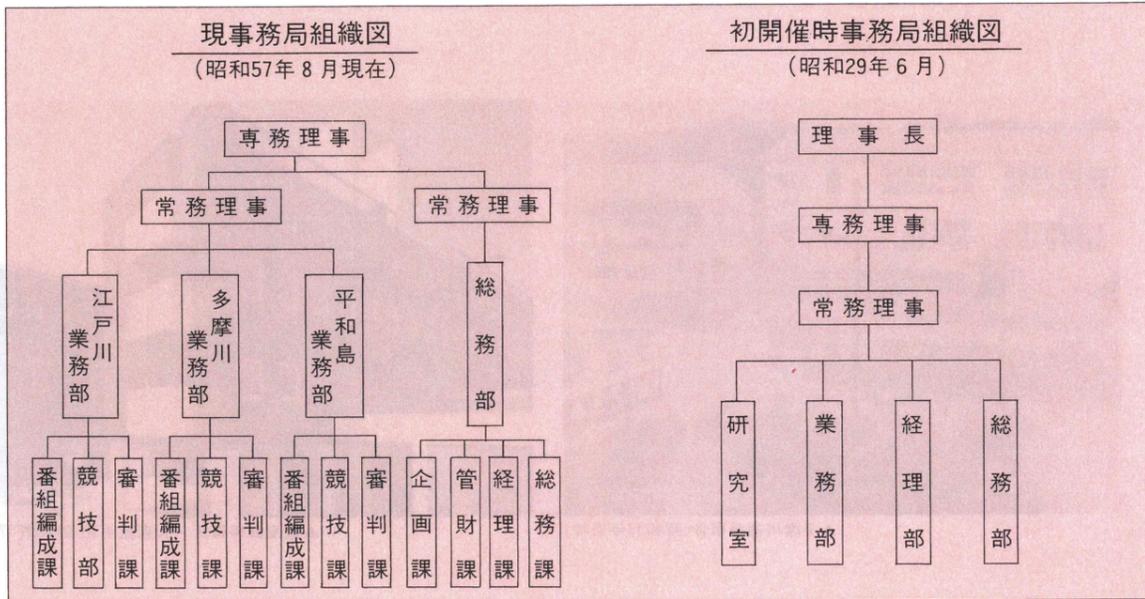
まず、当面の急務のひとつに競走場の選定があったが、これは競走会設立の前から中川放水路、荒川放水路、隅田川、大森海岸、調布市などでの設置希望が出されていた。しかし、運輸省から示されている審査基準及び指導方針からみて、これらの希望を満たすことはかなり難しいと思われた。そこで、東京都においては2、3ヵ所を目標に現地を厳密に調査。その結果、大森海岸、中川放水路を最適候補地とみなし、昭和27年1月、事前審査申請書を連合会及び運輸省に提出する。そして同年3月5日、条件付で内示を得たのである。

また東京都に対しては、「競走早急実施方依頼」の請願を提出、5月19日、20日の都議会財務委員会並びに本会議においてこれを採択される。併せて、東京都が施行者となる東京都モーターボート競走実施条例、大森海岸候補地の使用についても可決された。

予想外の売上不振に泣く

昭和29年6月の工事完成と共に大森、府中両競走場は初開催を迎えるが、これを前に競走会は、組織の充実を目指して職員の公募を始めた。審判、検査要員はもちろん放送関係や各部門の補助職員等も加えて、初開催の受任態勢に万全を期したのである。

しかし、いざふたを開けてみると予想に反して売上は伸びず、初開催から8ヵ月後の昭和30年2月には、人員の整理を行うなどしてその苦境を乗りきらざるを得ない状況に陥る。また、翌3月にはいと府中競艇場では、売上不振に加えて場内水面の水位低下が顕著となり、2節目よりついに中止のやむなきに至る。その後同競走場は多摩川競艇と呼称を変え再出発する。他方、大森競走場も思わしくない状況が続いたため、東京都はすでに完成していた江戸川競走場で主催することを決め、府中市が施行権を承継した。



●歴代会長

代	会長名	任期
初	岡田忠彦	26. 12~30. 4
	 [略歴] 厚生大臣、衆議院議長、埼玉、長野、熊本各県知事	
2	笹川良一	30. 4~41. 1
	 [略歴] 衆議院議員	
3	藤吉男	41. 1~55. 12
	 [略歴] 東京都議会議員、連合会副会長、船舶振興会理事	
4	笹川陽平	56. 1~現在
	 [略歴] 東洋開発代表取締役、日本トータル取締役	

●歴代役員

代	副会長名	任期
初	安井謙	26. 11~28. 5
//	四宮久吉	//
初・3	福島世根	26. 11~28. 5 32. 5~33. 1
2	山名義高	27. 5~32. 5
//	早川芳太郎	30. 4~32. 5
//	吉田直治	//
3	宇田国栄	32. 5~33. 1
4	田辺英之輔	41. 1~43. 1
5	吉松正勝	44. 10~54. 7
代	理事長名	任期
初	前田郁	26. 11~28. 5
2	早川芳太郎	28. 5~30. 4
3	藤吉男	30. 4~41. 1
代	専務理事名	任期
初	藤吉男	26. 11~30. 4
//	早川芳太郎	26. 11~28. 5
2	田辺英之輔	30. 4~41. 1
3	藤原常吉	41. 1~44. 10
4	西岡紘	45. 1~47. 1
5	吉松正勝	47. 1~50. 1
6	福石朝三郎	50. 1~現在

●競走会構成員数推移表

項目	年度	初開催時	30	35	40	45	50	55	57
会 員		164	162	140	124	123	107	89	83
役 員 (常勤、非常勤)		50	51	37	36	36	31	26	26
職 員 (含、嘱託)		90	38	71	82 ^(注)	100	102	95	92
臨時従業員 (アルバイト)		38	18	43	32	56	124	125	114
登録審判員		23	13	14	21	25	26	27	28
公認登録検査員		24	14	19	28	28	28	29	30

(注)各年度とも4月1日現在の集計、但し57年度は当表作成時(57年8月現在)

年 表

年月日	事 柄	年月日	事 柄
26. 6. 5	モーターボート競走法成立		を当てるファンサービス
26. 10. 20	東京都競走会設立認可申請	31. 11. 13	東京都競走会創立5周年記念式典(日本橋事務所)
26. 11. 14	東京都競走会設立認可		
26. 11. 27	東京都競走会総会(定款・役員決定)	32. 5. 15	大森競艇を平和島競艇と改称
27. 5. 30	東京都競走会第1回通常総会	32. 6. 1	事務所を江戸橋より日本橋に移転
28. 3. 30	競走早急実施方依頼の請願を都議会に提出	32. 8. 1	第1回江戸川区域の水上パトロールを実施
29. 3. 1	青梅市と委任契約締結	32. 12.	多摩川競走場でサイクロン(モーター)を使用
29. 5. 5	東京都と委任契約締結		
29. 6. 1	ミスモーターボートコンテストをヤマハホールで開催	33. 2. 26	平和島競走場で事故防止のため7隻・8隻立レースを廃止
29. 6. 5	大森競走場初開催	33. 3. 18	江戸川競走場整備室で火災、モーター60基焼損
29. 6. 9	府中競走場初開催		
29. 9. 4	大森競走場で13レースを12レースに変更	33. 3. 24	多摩川競走場で初のオール女子レース実施
29. 9. 13	大森競走場で優勝戦を「ヤマト」「キヌタ」の各々で実施。(8隻立)	33. 8. 1	第5回全日本モーターボート選手権競走を江戸川競走場で開催(優勝 三津川要)
30. 1. 3	大森競走場でヤマト、キヌタの混合レースを3月末まで実施	34. 4. 8	多摩川競艇第1節5日目11レースで185,620円(的中2票)の大穴がでる
30. 3.	府中競艇開催中止(3月第2節から)	34. 4. 30	平和島競走場第5回全国地区対抗競走開催
30. 4. 9	防水板、発明考案で秀逸を受賞	34. 11. 1	審議灯を統一実施(青灯、赤灯の点滅、赤灯)
30. 5. 9	府中競艇を多摩川競艇と改称し、再開		
30. 8. 11	府中市、自治省から施行者として指定さる	34. 12. 25	平和島競艇騒音防止対策研究会発足
30. 8. 12	江戸川競走場初開催	35. 3. 1	自粛通達により多摩川競走場無料バス廃止
30. 8. 15	府中市と委任契約締結	35. 4. 1	江戸川競走場全スタンド改修工事完了
30. 8. 25	逆光用日付板開発(江戸川)	36. 3. 28	江戸川競走場でボラロイドカメラによる選手指導を実施
30. 9. 2	東京都、大森競艇から撤退		
30. 9. 20	府中市営大森競艇初開催	36. 11. 1	ボートキャリアを三競走場で購入
31. 2. 14	多摩川競走場でファンサービスのため浪曲を始める	37. 1. 27	審判部で自動制御装置、競技部で展示タイム計測器を開発、発明考案に出品する
31. 2. 21	大森競走場でスピードクジを実施	37. 4. 24	多摩川競走場734レース無事故記録を樹立
31. 6. 15	大森競走場で2・3・4レースの1着選手	37. 10. 1	モーターボート競走法の一部改正により恒

年 表

年月日	事 柄	年月日	事 柄
	久立法となる	41. 8. 4	職員訓練を野尻湖において実施
37. 10. 15	平和島競走場従来のヤマト30型に代わり60型消音モーターとなる	42. 4. 3	江戸川競走場のボート揚降装置完成
		42. 4. 29	平和島競走場で全国初の500円券発売
38. 4. 1	本年度より課税団体となる	42. 6. 11	多摩川競走場で初めて1億円突破
38. 4. 1	回の呼称について4月を第1回とする制度に変わる	42. 8. 23	東京都競走会創立15周年記念式典(船舶ビル)
		42. 12. 26	多摩川選手宿舎竣工式
38. 5. 10	船洋荘完成	43. 2. 23	江戸川競艇関係7団体、都営江戸川競艇廃止反対陳情打合せ会を開く
38. 5. 15	多摩川競走場主審判塔(六角形)完成	43. 8. 11	多摩川競走場で騒擾事件発生、施設、ボート、器材など破壊される
38. 6. 10	第1回競技部内の美化運動始まる		
38. 9. 5	多摩川競走場で第9回全国地区対抗競走を開催	43. 10. 16	江戸川競走場の予想業者初めて本栖で訓練
38. 10. 25	平和島競走場特別観覧席(全国初の冷暖房付)完成	43. 11. 21	江戸川競走場定例運営連絡会議で44年度以降の特別競走の中止を決定
39. 7. 11	平和島競走場第1回ゴムボート大会開催	43. 12. 7	多摩川競走場返事故全国最低で表彰
39. 7. 15	平和島競艇1日売上1億円(106,691,300)を突破(全日本選手権競走初日)	43. 12. 20	平和島競走場南スタンド完成
39. 7. 15	江戸川競艇堤防護岸工事のため9月22日まで開催中止	44. 1. 24	東京都、都営江戸川競艇の廃止を声明
		44. 3. 4	第15回全日本選手権競走(平和島競走場)の最終日大雪でレース中止、紛争発生
39. 10. 7	オリンピックのため10月27日まで開催中止	44. 4. 2	万博協賛競走開催(平和島競走場)
40. 4. 1	江戸川競走場の競技部内全面改築及び堤防嵩上工事のためボート揚降装置工事開始	44. 4. 9	警備隊創設を理事会で決定
40. 4. 23	スタート事故1件につき即日帰郷を実施(平和島競走場)	44. 4. 11	東競武道館道場開き
40. 5. 26	第14回通常総会において定款に海事思想の普及を入れる	44. 5. 9	多摩川競走場入場券自動発売機を設置
40. 12. 17	江戸川競走場第1副審塔強風のため倒壊、以後のレースは中止、翌日は開催	44. 8. 20	第1回全国武道大会で、平和島チーム優勝
41. 3. 10	平和島競走場で第1回鳳凰賞競走を開催	44. 12. 12	平和島競艇オールハイドロとなる
41. 4. 28	平和島競走場事故多発のため、本番前のスタート練習を実施	45. 4. 1	江戸川競艇10レース制になる
		45. 8. 1	江戸川競艇東京都と東京都六市組合との間に2日間の肩代り開催を決定
		45. 9. 15	江戸川水域の水難防止活動で警視総監賞を受賞
		45. 10. 15	まつあき寮、改修工事着手

年 表

年 月 日	事 柄	年 月 日	事 柄
46. 6. 2	平和島競走場で初めて大時計昇降装置設置	51. 8. 12	江戸川競走場で波浪防止装置を海洋科学技術センターに研究を委託
46. 7. 13	多摩川競走場で白昼400万円強奪事件発生	52. 3. 13	平和島競艇ファンモニター懇談会を開催
46. 8. 26	多摩川競艇法制定20周年記念競走(民謡、盆踊りなどアトラクション実施)	52. 7. 1	江戸川競走場、消波装置を設置
46. 8. 30	平和島競走場の施設改善について府中市長に要望書を提出	52. 7. 20	平和島競艇B G協賛競走を実施
46. 11. 17	東京都競走会創立20周年記念感謝の集い	52. 10. 16	平和島競走場で東京三場対抗ヨット競技大会を開催
47. 7. 22	多摩川競走場第1回納涼花火大会	53. 3. 8	第24回発明考案で金賞を受賞(江戸川)
47. 11. 6	平和島競走場で石塚一雄選手レース中死亡	53. 5. 30	キャラバンを編成、宇宙博広報を実施
47. 11. 20	江戸川競走場周辺の主婦、本栖見学	53. 5. 31	平和島競走場の競走水面を正規に修正
48. 4. 7	江戸川競艇六市組合の施行始まる。4月26日から三市組合の施行も始まる	54. 3. 28	江戸川競走場周辺の子供会本栖体験入所
48. 7. 1	多摩川競走場で池田博選手負傷入院、10月7日死亡	54. 7. 17	多摩川競艇1日売上10億(新記録)を記録
48. 7. 22	多摩川19周年記念競走3月に延期(地元学童の交通事故による反対のため)	54. 12. 6	平和島競走場の投票窓口全面機械化する
48. 8. 28	多摩川競走場第1期工事(新特観席)完成	55. 10. 6	平和島競走場第4期工事完成
49. 1. 4	1日10レース制、4レースまで連複	55. 12. 4	藤前会長、成田空港で急逝
49. 3. 26	多摩川競艇交通ゼネストのため中止順延	55. 12. 8	多摩川競走場投票窓口全面機械化する
49. 5. 2	レースのタイミングを場内テレビで放映(江戸川)続いて平和島・多摩川も実施	56. 1. 14	第46回通常総会で笹川陽平新会長を選任
49. 9. 5	多摩川競走場特観席(1,025席)完成	56. 4. 9	防護具研究開発委員会発足
49. 12. 7	江戸川競艇第3レース成立をめぐる騒擾発生、翌1節自粛中止	56. 7. 13	ラジオ関東による広報放送を開始
50. 5. 13	多摩川競走場水上施設、歩道橋、競技部施設の工事に着手	56. 7. 31	第27回モーターボート記念競走を平和島競走場で開催
50. 6. 10	大森選手宿舎完成(6月17日使用開始)	56. 10.	「平和島競走の将来対策に関する提言書」を公表
50. 7. 10	事務所を大森選手宿舎内に設置	56. 11. 11	東京都競走会創立30周年記念感謝の夕
51. 6. 6	硬質ゴムによる吸水板を使用	57. 1. 23	江戸川競走場でレース中勝股勇選手死亡
51. 8. 3	多摩川競艇ファンモニター懇談会を開催	57. 2. 25	江戸川競走場で防護具の使用を始める
		57. 4. 29	第1回平和島グランプリ(アマチュア)

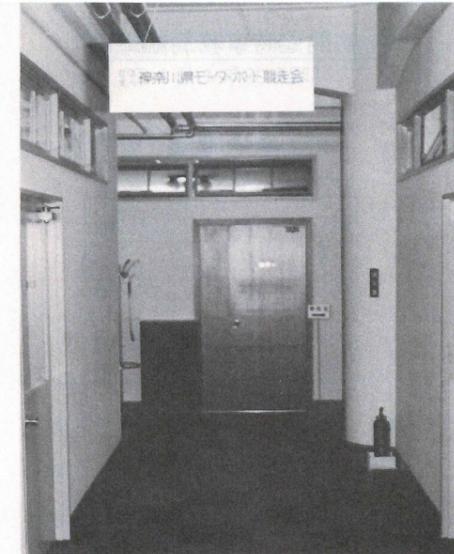
有識者の賛同も得て熱意の出発

モーターボート競走に関し神奈川県内では、早くよりアマチュア大会が開催されるなどの実績があったが、競走法の成立と共に競走会創立の準備が進められていった。渡辺儀重氏(元副会長、関東興業(株)社長)、並びに自民党県連幹事長山本正一前代議員、参議院議員大隅憲二氏を中心とするもので、まず、競走会設立の趣意書を作成し、これを県内の有志に配布した。その結果、県内衆参両院議員、県議会議員(現渡辺喜三郎会長も発起人)を始めとする多くの有識者の賛同を得ることができ、98名の会員をもって昭和26年6月28日、県議会議場において創立総会を開くに至る。総会では山本正一会長以下役員が選出され、直ちに神奈川県競走会設立認可申請書が運輸大臣宛提出された。

この申請は同年10月5日付で認可となったため、県競走会は早速横浜市中区に事務所を設け、2名の職員をもって業務を開始したのである。

一方、県内自治体も競走実施については活発な動きをみせ、特に津久井郡内では誘致委員会を結成するなどして、景勝の地相模湖での開催を計画していた。しかし、湖畔における競艇場の位置問題で意見がわかれ、やがて内紛が生じる。このため競走会は調停に立つが、間もなく和解が成立して昭和29年1月、競走場新設の認可を得ると共に、津久井郡各町村は同年2月16日をもって自治庁の指定を受けるところとなる。

こうして相模湖モーターボート競走組合が設立されるとその業務はいよいよ本格的、かつ具体的に開始されることとなった。ところがこれから先にも、思いもよらぬ問題が続き出てくるのである。



▲競走会事務所(57年)



▲借用競走場(平和島・57年)

他競走場借用、に進路転換

競走場新設にあたってはそのための施設会社が発足し、工事に着手したまではよかったがその先不運にも「資金難、によりたびたび工事が中止となるのである。

競走会では、施行者の要請に基いて笹川全モ連会長にも幹旋を懇願するなどあらゆる努力を払い、窮状打解のため奔走するが、所期の目的を達成することができず苦慮する。そうこうするうちに昭和30年1月29日の「競走場の新設は今後認めない」との閣議の申し合わせにより、32年9月末までの登録は無理という決断に至る。ついに競走場新設を断念するのである。

このため業務はまったくの停止状態となり、事務所は閉鎖、2名の職員も退職ということになる。施行者においても組合事務所を閉じ、競走会、施行者ともども休眠状態とならざるを得なかった。しかもこの間、当会の借入金はまだ

ますます増大し、施行者もまた赤字が累積していった。重大危機に陥った神奈川県競走会、相模湖オートボート競走組合は、両者連絡しあい密接な協力態勢のもとに、運輸省への陳情を重ねた。しかし運輸省当局も、その実情には同情されたものの省の方針は堅持したままである。ただこの間に、「競走場の新設は認められないが、他の競走場を借りて競走を実施することはできないか」とのご示唆をいただく。

施行者も当初は「相模湖競走場で……」の初一念が強く、決断できかねる状態であったが、検討を重ね競走会とも協議の結果、「他の競走場を借りる」方針を基本として新たな運動を展開することを決定する。

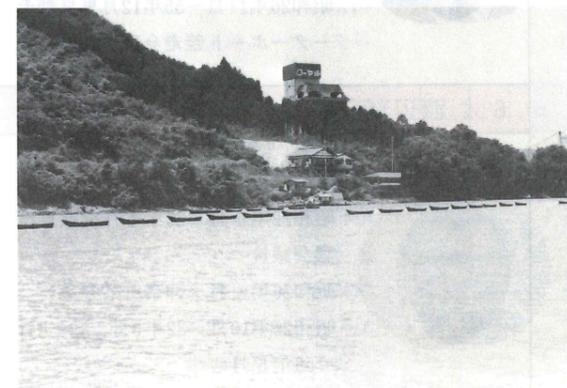
このため当神奈川県競走会は、昭和33年6月、施行者の協力依頼を受け大隅会長、渡辺副会長を中心として、東京都内の競走場を借りて開催することを決定、確認し、施行

者と緊密な連携を保ちつつ、その目的達成に向って一丸となり、改めて陳情を開始した。

昭和33年7月7日にまず江戸川競走場の借用申請を東京都知事に対し行うが、公営競技批判の世論が強いという時代背景も手伝って、その後の数度の陳情要請も効を奏しなかった。続いては対象を府中市営の平和島競走場に切り換え、大隅、渡辺正副会長、山野保三専務理事、施行者小磯組組長、山口組合議会議長ほか各町長とともに力を合せ、連日のように監督官庁、東京都、府中市、大田区東京都競走会、平和島等の関係方面へ陳情を重ねたのであった。

その結果、関係者のご理解とご協力のもとによりやく平和島競走場借用は実現し、運輸省当局の決裁が得られる運びに至った。

その後初開催は昭和34年10月との決定をみるが、これは運輸省より「しばらくの間延期するように、との申し渡しにより実現を見ずに終る。しかし、関係者の熱意と協力により翌35年3月31日、4月1日の両日、待望の初開催を一同喜びのうちに迎えることができたのである。



▲昭和30年当時の競走場建設予定地(相模湖畔)

歴代役員

代	副会長名	任 期
初	高橋長治	26. 10~32. 5
//	大隅憲二	26. 10~32. 5
//	石村幸作	26. 10~32. 5
2	渡辺儀重	32. 5~37. 5
3	山野保三	40. 5~45. 10
4	大谷夫左二	50. 5~57. 5
代	専務理事名	任 期
初	渡辺儀重	26. 10~32. 5
2・4	山野保三	32. 5~42. 5 44. 5~45. 10
3・5	大谷夫左二	42. 5~44. 5 45. 10~50. 5
6	山本智士	50. 5~現在

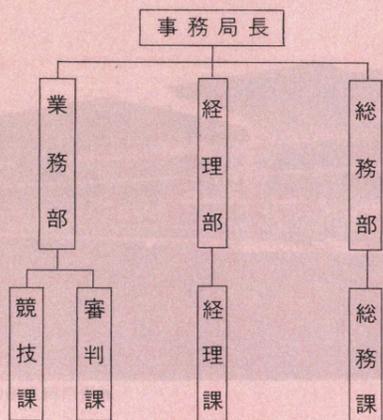
競走会構成員数推移表

項目	年度	30	初開催時	35	40	45	50	55	57
会 員		102	82	82	72	67	63	58	59
役員 (常勤、非常勤)		26	10	10	10	12	11	11	9
職 員 (含、嘱託)			2	2	9	13	6	8	8
臨時従業員 (アルバイト)							13	13	13
登録審判員 (東京都競走会嘱託職員)						1			
公認登録検査員 (東京都競走会嘱託職員)						3	1	1	0

(注)各年度とも4月1日現在の集計、但し57年度は当表作成時(57年8月現在)

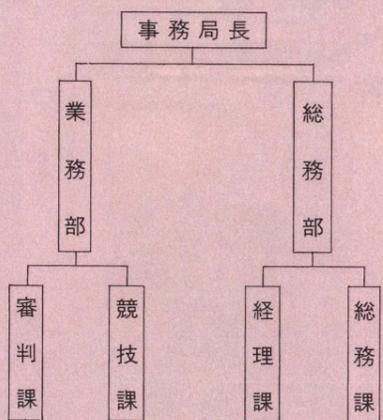
現事務局組織図

(昭和57年4月1日現在)



初開催時事務局組織図

(昭和35年4月1日)



●歴代会長

代	会長名	任期
初	山本正一	26. 10～32. 5
<p>〔略歴〕 昭和2年2月～弁護士 昭和21年4月～33年7月衆議院議員 昭和26年6月神奈川県モーターボート競走会設立発起人代表</p> 		
2	大隅憲二	32. 5～42. 5
<p>〔略歴〕 昭和18年6月～22年4月横須賀市会議員 昭和22年4月～25年5月参議院議員 昭和26年10月～32年5月副会長</p> 		
3	田辺英之輔	43. 1～45. 10
<p>〔略歴〕 昭和26年11月～43年3月東京都モーターボート競走会常務、専務理事、副会長歴任 昭和35年6月～40年10月全国モーターボート競走会連合会常任理事</p> 		

代	会長名	任期
4	山野保三	45. 10～46. 5
<p>〔略歴〕 昭和22年4月～28年6月鎌倉市会議員 昭和26年10月～45年10月常務理事、専務理事、副会長、会長代理歴任</p> 		
5	藤吉男	46. 5～55. 12
<p>〔略歴〕 昭和26年12月～55年12月全国モーターボート競走会連合会役員歴任、副会長 昭和26年11月～55年12月東京都モーターボート競走会理事長、会長</p> 		
6	渡辺喜三郎	56. 5～現在
<p>〔略歴〕 昭和22年4月～26年4月横須賀市議会議員 昭和26年4月～神奈川県議員 昭和26年10月～32年5月、52年5月～56年5月理事</p> 		

年 表		年 表	
年月日	事 柄	年月日	事 柄
26. 6. 28	神奈川県モーターボート競走会創立総会	43. 7. 19	旅行者との合同研修会実施
26. 6. 28	横浜市中区曙町2丁目29番地に事務所設置	44. 6. 21	万国博覧会協賛レース実施
26. 7. 19	神奈川県競走会設立認可申請	44. 7. 13	熱海オーシャンカップレース応援
26. 10. 5	神奈川県競走会設立許可	44. 12. 24	選手会と合同で福祉施設ボーズホーム慰問
26. 10. 5	会長山本正一氏、専務理事渡辺儀重氏就任	45. 8. 11	相模湖少年少女ゴムボート大会、翌年より中止
29. 3. 30	相模湖モーターボート競走組合設立さる	45. 10. 17	田辺英之輔会長病氣辞任、山野保三氏会長に就任
29. 3	競走場建設着工以後資金難続く	46. 5. 18	山野保三会長辞任、会長に藤吉男氏就任
32. 5. 31	山本正一会長辞任、大隅憲二氏会長に就任	46. 6. 24	二代目会長大隅憲二氏逝去
32. 10	自粛声明により競走場新設断念	46. 12. 1	三代目会長田辺英之輔氏逝去
33. 6	競走場を借りて競走実施の方針に転換	47. 10. 9	選手養成訓練見学を兼ね本栖で理事会開催
33. 7. 1	施行者と協力、都内競走場借入れ運動開始	49. 9. 25	日本生産性の船による職員の海外研修実施
34. 8. 28	海運局会議室に於て第1回開催打合せ	49. 12. 12	昭和48年度舟券売上等最高記録受賞
34. 10. 6	東京都大田区入新井町1丁目に事務所移転	50. 1. 22	競艇施行15周年記念式典
35. 3. 31	平和島競艇場に於て初開催	50. 4. 1	平和島運営協議会発足
37. 5. 9	副会長渡辺儀重氏逝去	50. 10. 4	四代目会長山野保三氏逝去
37. 7. 27	第1回会員研修会を実施	51. 9. 30	第1回相模湖杯レース開催
38. 8. 15	第1回箱根少年少女ゴムボート大会実施	51. 10. 14	会員研修会、笹川記念会館、船の科学館見学
39. 7. 27	職員厚生住宅の建設完成	52. 6. 13	横浜市中区尾上町4-47番地に事務所移転
39. 9. 1	横浜市中区松影町1-19番地に事務所移転	52. 6. 15	事務所開所式典
39. 9. 25	本会創立以来の物故会員慰霊祭を挙行	52. 8. 4	箱根少年少女ゴムボート大会15回をもって以後中止
40. 3. 29	競走開催5周年記念式典	53. 3. 22	第1回B&G協賛競走開催
40. 4. 21	社会福祉に貢献、神奈川県知事より感謝状	53. 6. 29	宇宙博キャンペーン開始
40. 9. 5	第1回相模湖少年少女ゴムボート大会実施	54. 9. 17	初代会長山本正一氏逝去
41. 3. 30	市民の社会福祉に貢献横浜市長より感謝状	54. 11. 4	関東地区洋上研修(県内児童)
41. 8. 30	第1回模型ボート競技大会実施	55. 1. 22	競艇施行20周年記念式典
41. 12. 18	創立15周年記念式典	55. 12. 4	五代目会長藤吉男氏逝去
42. 5. 24	大隅憲二会長辞任、山野副会長代理就任	56. 5. 18	渡辺喜三郎氏会長に就任
42. 7. 20	「海事図書」を、横浜市内各中学校に配布		
43. 1. 26	会長に田辺英之輔氏就任		
43. 2. 15	氷川丸にて選手会「家族ぐるみ」研修会実施		

静岡県競走会

3グループが開催に向けひた走り

モーターボート競走開催を目的とする動きとして、静岡県下では早くより3つのルートがあった。ひとつは、中央政界にあって競走法の成立にも甚大な業績を残された神田博衆議院議員、県政のトップにある山田弥一県議会議長らを擁する熱海市のグループ、2つめは参議院議員長島銀蔵氏、大石勇氏らを中心とする清水市のグループ、いまひとつは小池節郎氏を軸とする新居町、舞阪町の人々である。

なかでも動きの一番早かったのは熱海市の人々で、競走法施行より実に1年半も早い昭和24年12月にはすでに、同市出身島山鶴吉代議士を介して熱海市でモーターボート競走が実施できるよう国会へ請願書を提出採択されて同年同月の官報にも掲載されている。

さらに、中央の情報に関しキャッチが早いということもあって、昭和26年6月18日モーターボート競走法が施行されるや同月21日には静岡観光会館において出席者25名を集め、創立総会を開催。定款の承認、役員を選任等を行っている。一方、清水市グループは、三保海岸を競走開催地とする計画のもと競走会設立のための申請書作成や海運局への運動等を開始したが、神田氏らの動きをいち早く察知し機先を制して一足早く書類手続を済ませてしまう。

かくして県内には2つの競走会が、ほとんど同時に名乗りをあげたのであるが、「1県1競走会」という法律の精神に従い、大局的な立場から譲歩し合って、昭和26年10月5日の設立認可を機に神田氏と長島氏が運輸大臣室で会見。円満に手を握り合い、ここに静岡県競走会の誕生となる。

競走会事務所は熱海市熱海1992番地に設置され、諸々の業務がいよいよ本格的に推進される段取りとなった。



▲競走会事務所(昭和29年当時)



▲競走会事務所兼選手宿舎(昭和57年)

「百聞は一見に如かず」の視察から展開

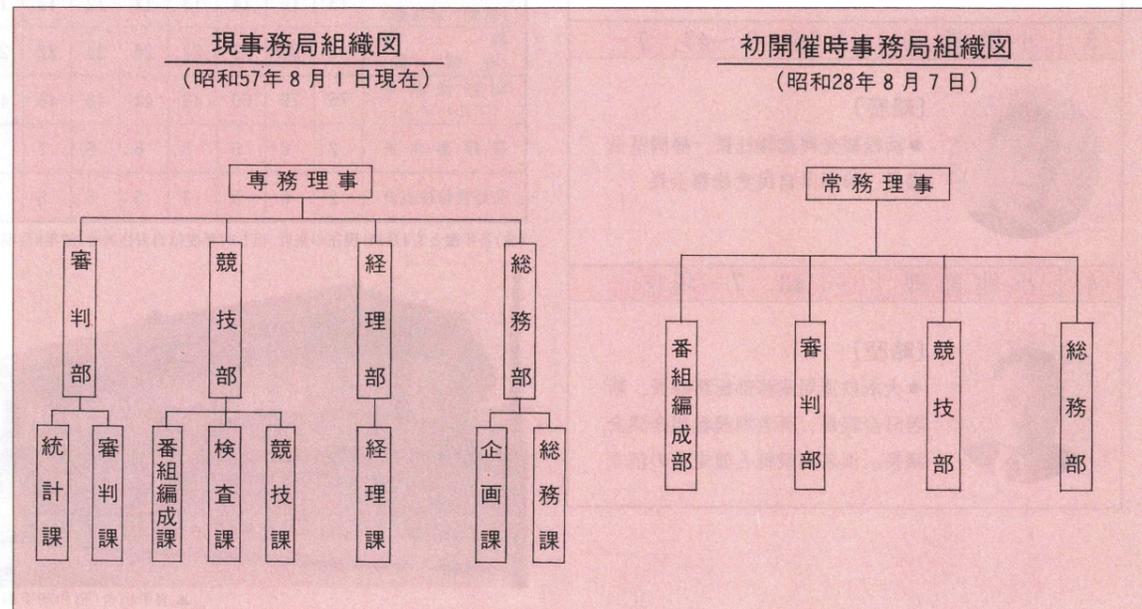
ところが、熱海市、清水市共に企業的危険を伴うこの種事業への不安感からか住民の協力が得られない、あるいは資金調達のメドが立たないなど、いろいろの面から競走実施の方向づけができず、昭和26年12月7日に大月ホテルで理事会を開いて以来、開店休業の状態となるのである。

他方、新居町、舞阪町の人々は、税外収入の方途を血まなこで求めていたところへモーターボート競走法施行のニュースが入り、当時既に開催されていた津競走場を視察するが、この視察によってはからずも隣町同志が別々に競走開催の計画を持っていたことを知る。その後紆余曲折はあったものの監督官庁、連合会の指導を得て新しく雄踏町の加入も決まり、昭和27年9月18日には新居町、舞阪町、雄踏町3町の共同事業として「浜名湖モーターボート競走会設立準備委員会」を発足させる。以後、小池節郎(新居町)、

服部茂(舞阪町)、中村初治郎(雄踏町)の三氏が主軸となり競走実施に向って邁進するのであるが、小池氏は準備に東奔西走の日々の中で競走会が既に設立されていることを知る。そこで昭和27年8月、運輸省、連合会を訪れた帰りに熱海市に立寄るが、事務所の清水市への移転や神田、山田、長島三氏の意見が未だ完全一致していない様子などを見て急ぎ局面打開を図るよう要望して帰るのである。

その結果昭和28年2月2日、神田会長らは相談し合って事務所を新居町に移し、その上で競走会の責任者を小池氏に決定する。

こうして、浜名湖競艇組合議長として浜名湖競艇実現に専念、粉骨砕身の努力を重ねてきた小池氏は、静岡県モーターボート競走会の活動についてもその運営を一任されることとなり、昭和28年8月7日の初開催へと続く一人二役の奮闘の幕は切って落とされたのである。



●歴代会長

代	会長名	任期
初	神田 博	26. 10～31. 12
 <p>〔略歴〕 ●理研電化工業(株)設立社長、衆議院議員、第2次吉田内閣経済安定本部政務次官</p>		
2	山田 弥一	32. 3～35. 9
 <p>〔略歴〕 ●温泉旅館大月館社長、熱海市会議長、静岡県会議長、衆議院議員、運輸政務次官</p>		
3	小野 近義	36. 3～43. 7
 <p>〔略歴〕 ●浜松観光興業(株)社長、静岡県会議長、静岡県自民党総務会長</p>		
4	小池 節郎	43. 7～現在
 <p>〔略歴〕 ●大阪鉄道局業務部総務課長、新居町会議長、浜名湖競艇組合議会議長、浜名湖競艇と競走会の創立</p>		

●歴代役員

代	副会長名	任期
初	山田 弥一	26. 10～32. 3
//	小野 近義	26. 10～36. 3
代	専務理事名	任期
初	小池 節郎	29. 6～43. 7
2	鈴木 傳	53. 6～57. 7
3	小池 明成	57. 7～現在

●競走会構成員数推移表

項目	年度 初開 催時	年度						
		30	35	40	45	50	55	57
会 員	27	30	30	24	19	30	27	27
役 員 (常勤、非常勤)	13	16	14	13	11	12	12	13
職 員 (含、嘱託)	8	23	25	22	26	24	22	23
臨時従業員 (アルバイト)	76	79	60	43	44	48	46	46
登録審判員	2	6	5	5	6	6	7	7
公認登録検査員	2	6	5	3	5	5	5	6

(注)各年度とも4月1日現在の集計、但し57年度は当表作成時(57年8月現在)



▲選手宿舎(昭和29年当時)

年 表

年月日	事 柄	年月日	事 柄
26. 10. 5	静岡県モーターボート競走会設立認可	43. 4. 4	レース場を舞阪町から新居町に移転
27. 8. 2	新居、舞阪で競走場設立準備委員会発足	43. 12. 15	静岡県モーターボート会館落成
27. 9. 18	雄踏町が参加して三町で競艇事業共同化	44. 10. 31	湖西町営競走が売上上昇率日本一で表彰
28. 4. 7	三町による浜名湖競艇組合誕生	44. 12. 30	早川選手の全日本選手権優勝祝賀会挙行
28. 8. 7	浜名湖競艇場登録認可、初開催	45. 6. 4	彦坂郁雄選手の37連勝祝賀会挙行
29. 7. 1	8月末まで2ヶ月間1日13レース実施	45. 7. 20	小池会長「海事功労者」で局長表彰を受く
29. 8. 18	第1回静岡県模型ボート大会実施	46. 7. 20	鈴木、石川両常務海運局長らが表彰される
31. 3. 15	新事務所を新居町栄町に移す	46. 12. 23	浜名湖競艇売上上昇率日本一で表彰される
31. 11. 1	全日本モーターボート選手権大会を開催	47. 4. 19	職員小型船舶操縦士実技講師の資格取得
32. 1. 5	神田博会長厚生大臣就任のため会長辞任	47. 12. 25	浜名湖競走場フラワールーム増築工事完成
32. 3. 15	スタート判定をめくり投石騒擾事件起る	48. 3. 1	第8回鳳凰賞競走を開催
33. 1. 1	会誌「しおか」創刊号発行	48. 7. 20	小池会長「海事功労者」で大臣表彰を受く
33. 12. 1	第4回東海地区選手権競走を開催	49. 2. 20	静岡県競走会従業員労働組合誕生
34. 6. 11	従業員のレントゲン検診をこの年より実施	49. 4. 1	浜名湖競艇売上対策委員会発足
34. 12. 1	競技部管理棟全焼の為6レース以後中止	50. 5. 10	特観席にトータリゼーターシステム採用
35. 9. 4	山田弥一会長運輸政務次官就任の為辞任	50. 10. 3	役職員沖繩海洋博見学
35. 11. 23	寺院可睡斎において県選手会訓練を実施	51. 3. 19	男子職員全員小型船舶操縦士免許取得
36. 1. 7	出場選手が宿舎近隣の火災を消火感謝さる	51. 5. 18	浜名湖競艇大橋開通交通渋滞緩和に一役
36. 8. 15	浜名湖の1日売上待望の2千万円を突破	52. 2. 16	年末年始スタート事故防止運動で全国一位
37. 6. 14	浜名湖水難救援奉仕隊結成初演習を行う	52. 8. 25	第23回モーターボート記念競走開催
38. 4. 1	競走会、課税対象法人となる	53. 4. 28	浜名湖環境整備促進委員会発足
38. 6. 30	第1回浜名湖少年少女ゴムボート大会実施	53. 7. 16	国際児童宇宙博を全従業員見学
39. 8. 24	湖西町単独施行権を許可されレース実施	54. 2. 16	新競技部竣工
39. 11. 13	小池専務連合会長に随行東南アジア視察	54. 3. 21	第14回鳳凰賞競走を開催
40. 4. 16	浜名湖競艇場内美化運動実施	55. 4. 1	投票所窓口全面自動化完了
40. 8. 1	1日売上5千万円突破	55. 9. 1	地震発生を想定した総合防災訓練を実施
41. 5. 20	善導運動「職場を愛する会」発足	56. 10. 8	競走会創立30周年記念感謝の集い開催
41. 8. 21	レース妨害のアクアラング事件起る	56. 10. 29	第28回全日本選手権競走開催
42. 4. 1	競艇組合が浜名湖競艇企業団と改組される	57. 3. 31	開催以来始めて売上前年比-6%となる
42. 6. 30	初代会長神田博氏逝去される	57. 5. 10	浜名湖競走場企画実行委員会結成さる

その道ははるかに遠く…

昭和26年6月28日、モーターボート競走法が制定公布されるや、愛知県下においてもモーターボート競走開催への熱意は急速に表面化していった。

各界有志は集参して、まず競走会設立についての会合を再三にわたって開き、会員の募集のこと、財政のこと、役員構成、ひいては設立後の運営のことなど、検討を重ねていった。しかし、種々の難問題もあって、その対策には各人各様に頭を悩ませることとなる。

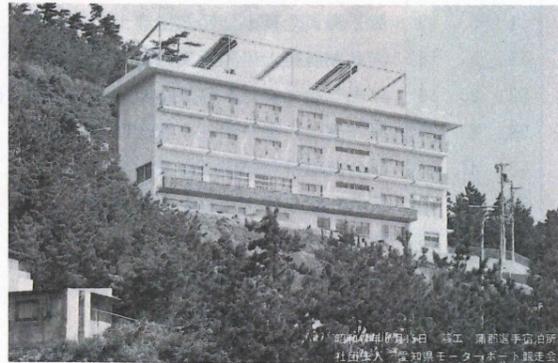
そんな折も折、本事業の生みの親である笹川良一氏に、設立についてのすべてのご指導を仰いではその案があり、これが決定されるのである。以後、関係者は数回にわたって上京し、笹川氏より競走会設立、開催及び運営について

の詳細なるご指導、お力添えをいただく。

そして昭和26年10月1日、愛知県競走会は設立認可となり、同月13日には名古屋市中区東陽町中部日本倶楽部において創立総会を開く。出席者は会員総数80名中71名という盛大さであった。

その後、開催候補地の選定については、各市町村に呼びかけ、また市町村関係議員代表者より陳情のあったものに対しては、その設置条件を厳密に検討するなどの作業が繰り返された。そして、難色のなかにもようやく半田市、常滑町を競走場設置の地として予定するに至り、その設置認可申請を関係省庁へ提出する運びとなった。

また競走会は、初開催実施に向ってその競技運営に伴う登録審判員及び検査員の養成にとりかかる。この頃、半田市、常滑町には共に競走場指定の認可があり、ここにモーターボート競走開催の夢は一步現実へと近づくのである。



▲蒲郡選手宿舎(昭和57年)



▲常滑選手宿舎(昭和57年)

地元選手の養成にも努力を傾けて

しかし、初開催への道はやはり想像を超えた険しさではあった。競走会は、少人数による開催準備ということから実務者の陣容を綿密に整え、施行者に対しては施設の設計及び開催に必要な欠くべからざるボート・モーターの編成、購入等に細やかなアドバイスをした。さらには、地元選手の養成に努め、ボート、モーターの試走会検査等も、施行者の要望に合わせて着々と準備を進めていったのである。

こうして競走運営全般にわたって、施行者と連絡を密にとりつつ、ついに昭和28年4月4日半田市の、同年7月10日には常滑モーターボート施行組合の、各初開催をみるに至る。しかも2年後には、前者の経験が大いに生かし、蒲郡競艇場の初開催(昭和30年8月13日)をも迎えるのである。

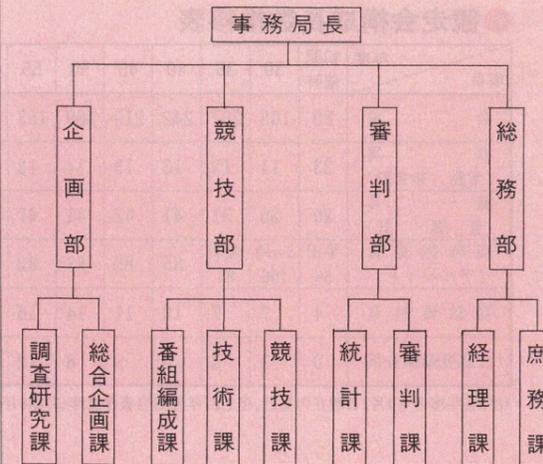
競走会設立より約2年、苦しみをなめつくしての開催は

ともかくにもこうして実現をみたのであった。

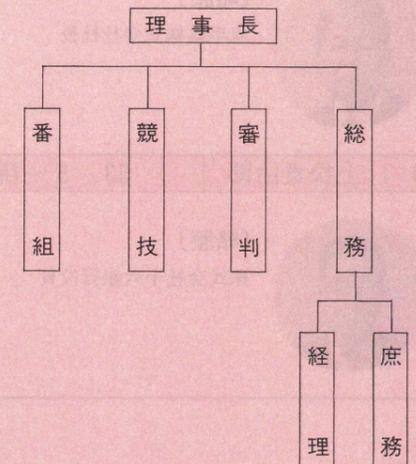
なお、この間競走会は、財政はもちろんその陣容構成等についても、筆舌には語り尽くせぬほどの辛酸をなめ、幾度となく難局に立たされている。

今日ここにある競走会が、これらを乗り越え真摯に目的へと歩んできたものであることは、関係者として決して忘れ得ぬ事実でもある。

現事務局組織図
(昭和57年現在)



初開催時事務局組織図
(昭和28年)



●歴代会長

代	会長名	任期
初	下條康麿	26. 7 ~ 29. 5
 <p>〔略歴〕 文部大臣</p>		
2	神戸真	29. 5 ~ 32. 4
 <p>〔略歴〕 衆議院議員</p>		
3	堀田英一郎	32. 4 ~ 53. 5
 <p>〔略歴〕 旭毛織株式会社社長</p>		
4	上松貞治郎	53. 5 ~ 現在
 <p>〔略歴〕 株式会社十六銀行役員</p>		

●歴代役員

代	副会長名	任期
初	神戸真	26. 7 ~ 29. 5
2	菱田義輝	32. 4 ~ 33. 1
3	舞田寿三郎	32. 4 ~ 39. 5
4	久田金蔵	45. 5 ~ 47. 5
5	現在空席	
代	理事長名	任期
初	菱田義輝	26. 7 ~ 32. 4
2	山内弘吉	32. 4 ~ 33. 1
3	現在空席	
代	専務理事名	任期
初・3	上松貞治郎	32. 4 ~ 33. 1 37. 5 ~ 53. 5
2	山内弘吉	33. 1 ~ 36. 3
4	岩塚静	53. 8 ~ 現在

●競走会構成員数推移表

項目	年度	初開催時	年度						
			30	35	40	45	50	55	57
会 員		80	108	257	242	219	189	163	159
役 員 (常勤、非常勤)		23	11	13	13	13	14	13	14
職 員 (含、嘱託)		20	26	31	41	42	41	47	45
臨時従業員 (アルバイト)	半田 3ヶ所 58 106 85				85	85	83	82	79
登録審判員		4	7	7	10	11	14	16	17
公認登録検査員		0	3	3	8	9	8	12	15

(注)各年度とも4月1日現在の集計、但し57年度は当表作成時(57年8月現在)

年 表

年月日	事 柄	年月日	事 柄
26. 7. 5	名古屋市で愛知県競走会発起人総会を開催	32. 10. 1	モーターボート競走法の一部改正
26. 10. 1	愛知県競走会設立認可	33. 8. 10	第2回模型モーターボート大会を中村公園にて実施
26. 10. 13	創立総会を開催し会長に下條康麿氏就任	33. 8. 12	水上スキー講習会を新舞子に於て開催
26. 11. 28	全国モーターボート競走会連合会に加入	34. 7. 9	県下各地で水上スキー講習会を開催
27. 1. 24	常滑競走場の設置認可	34. 7. 11	伊勢湾台風によりレース場各施設は壊滅的な被害を受け半田競艇場はレースを中止し常滑蒲郡共に1~2ヶ月の休催をし職員家族に犠牲者を出す
27. 7. 4	津競走場初開催に職員を応援派遣	34. 9. 26	蒲郡競走場の再開
27. 8. 30	常滑西浦鬼崎大野各市町村へ施行認可	34. 12. 17	常滑競走場の再開
27. 12. 1	半田競走場の設置認可	34. 12. 22	半田市の競艇事業中止決定
28. 1. 10	半田市へ施行認可	35. 9. 25	東海海運局常滑市津島市の協賛で遺族と台風罹災者の希望の集いを実施
28. 2. 10	半田競走場の起工式を挙行	35. 10. 24	海の記念日に協賛し名古屋中川運河に於てモーターボートパレードを実施
28. 4. 4	半田市営第1回モーターボートレース開催	35. 7. 20	山内専務理事逝去
28. 7. 10	常滑施行組合第1回モーターボートレース開催	36. 3. 26	中川運河に於て第2回モーターボートパレードを実施
28. 9. 25	13号台風による被害甚大のため半田常滑両競走場共一時休催	36. 7. 19	山間地の学童500名を招待しアルゼンチン丸乗船会を実施
29. 3. 18	蒲郡岡崎市施行認可	36. 7. 27	18号台風による被害で常滑競走場は1節間レースを中止
29. 4. 1	常滑施行組合は市制施行に基き常滑市営として発足し指定認可さる	36. 9. 16	競走会創立10周年記念式典を名古屋ホテルに於て実施
29. 5. 20	第3回通常総会に於て神戸真氏を第2代会長に選任	36. 11. 8	競走法が改正され恒久法となる
30. 3. 31	開催の自粛通達に依り売上に影響を受ける	37. 4. 20	大西昭選手常滑競走場に於て試運転中の事故により死亡
30. 8. 13	蒲郡市営第1回モーターボートレース開催	37. 7. 9	名古屋市に於てモーターボート操縦安全講
30. 9. 11	事務所を名古屋市中区広小路通り7丁目に移転する	37. 6. 5	
31. 8. 10	模型モーターボート大会を名古屋中村公園にて実施		
32. 4. 17	第6回通常総会に於て堀田英一郎氏を第3代会長に選任		
32. 7. 1	伊勢湾横断レースを常滑四日市間で挙行		
32. 7. 28	事務所を名古屋市中区桜町相互ビルに移転		

三重県競走会

熱意がすべてをしのいで

モーターボート競走法案が国会に提出される計画があるとの知らせが、東京の堤徳三、伊東弥六両氏より西山良一、西島好夫両三重県議員にもたらされたのは、昭和26年3月の上旬であった。

両氏は直ちに、三重県においても競走会設立の意志があることを伝え、堤、伊東両氏の尽力を要請。同時に安保正敏氏の出馬を乞い、中村清代議士の協力を得て、競走会設立のための準備を開始するのである。

やがて中央では競走法が国会を通過、同年6月18日の公布となる。この間三重県内では、西山、西島両氏の奔走とは別に、桑名市を中心とする別派ができ、一時的にも競願という最悪の事態を迎えるが、1日も早い競走会の設立を迫られている時でもあり、安保、西山、西島の三氏は連日

青木三重県知事と折衝を重ねる。その結果事態は収拾され再び設立へ向っての動きは活発化するのである。

昭和26年8月2日、競走会設立認可申請の様式が判明したため直ちに書類を作成、同月10日に創立総会を開き、23日には三重県知事の副申書を添えて運輸大臣に提出する。

幾多の曲折はあったものの、こうして昭和26年9月17日運輸省の審議会を通過し同月19日「官文第1075号」により、ついに認可となる。

早速事務所を三重県松阪市湊町116番地に置き、昭和26年10月3日設立登記を完了、社団法人三重県モーターボート競走会の誕生となる。

一方、施行者、競走場については、競走法が公布されるやその誘致運動は活発となり、各地から熱心な施行希望の申込みが競走会に出されていた。



▲選手宿舎(昭和27年当時)



▲競走会事務所兼選手宿舎(昭和57年)

年 表			
年 月 日	事 柄	年 月 日	事 柄
37. 7. 20	習会を実施 海の記念日に協賛し名古屋市内に於て音楽隊パレードを実施	47. 2. 25	ルにて挙行 事務所を名古屋市中村区花車ビル北館に移転
38. 4. 1	ギャンブルホリデーの実施水曜日休催	47. 5. 25	第18回全国地区対抗競走を蒲郡競走場で開催
38. 7. 14	常滑競走場に於てゴムボート大会開催	47. 8. 16	中日新聞社との共催で中日海洋エクスカーションを実施
39. 4. 30	蒲郡競走場に於て第10回全国地区対抗競走を開催	47. 12. 10	常務理事小林努氏逝去
39. 7. 5	毎日新聞社と共催で三河湾一周モーターボート水上スキーマラソン競技大会を開催	49. 3. 21	第9回鳳凰賞競走を常滑競走場で開催
39. 8. 28	事務所を名古屋市中区御園会館5階に移転	50. 5. 1	第2回笹川賞競走を常滑競走場で開催
40. 1. 28	常滑選手寮完成し竣工式を挙行政	51. 8. 8	毎日新聞社との共催で第1回模型ボートカーニバルを名古屋緑地公園に於て開催
41. 11. 7	職員教練研修会を三ヶ根山で実施	51. 10. 21	競走会創立25周年記念式典を競走会会議室に於て挙行政
42. 7. 6	第13回モーターボート記念競走を常滑競走場で開催	52. 2. 21	職員田島勇氏逝去
42. 7. 9	モーターボート記念競走第4日目に於て1日売上1億円を突破	52. 5. 2	常務理事酒井伝一氏逝去
43. 3. 8	名古屋御園会館に於て選手家族の善導運動を実施	53. 5. 23	第27回通常総会に於て上松貞治郎氏を第4代会長に選任
43. 6. 24	前名誉会長舞田寿三郎氏逝去	53. 6. 16	宇宙飛行士サーナン氏名古屋中小企業センターに於て講演
43. 7. 27	名古屋中日ビルに於て海国日本展を2日間開催	55. 3. 6	第15回鳳凰賞競走を蒲郡競走場で開催
43. 9. 9	役職員家族善導運動を谷汲山に於て実施	55. 3. 9	鳳凰賞競走第4日目に於て1日売上10億円を突破
43. 10. 15	物故会員追悼法要を日泰寺にて実施	56. 2. 10	職員神谷守氏逝去
44. 6. 15	蒲郡選手寮完成し竣工式を挙行政	56. 4. 19	全国アマチュアボートレースオールスター選手権大会を蒲郡競走場で開催
45. 5. 28	第16回全国地区対抗競走を常滑競走場で開催	56. 10. 31	競走会創立30周年記念式典を名古屋キャッスルプラザホテルに於て挙行政
45. 8. 8	職員神谷幸男氏逝去	57. 8. 5	第28回モーターボート記念競走を蒲郡競走場に於て開催
46. 3. 4	第6回鳳凰賞競走を蒲郡競走場で開催		
46. 10. 26	競走会創立20周年記念式典を名古屋都ホテルにて挙行政		

立地の良さ、そして競走会

施行希望の申込みは、まず鳥羽二見があり次いで8月6日の矢、翌7日には津市、10日には桑名市と続いた。競走会はその都度立地条件その他について詳細に説明したが、津市はそのなかでも最も熱心と思われた。

当時の津市長志田氏は、西山、西島氏からモーターボート競走についてよく知らされており、市の財源を得るための競艇開催をなんとしてでも確保したいと望んでいた。そこで、公営競技にも詳しい柏木市議員を中心に積極的な運動を展開、8月21日は全国モーターボート競走会連合会(当時準備会)の平野晃氏、全国舟艇協会常務理事道明義太郎氏に懇請して、予定地である岩田川河口の視察調査を依頼したのである。

その視察調査の結果は上々で、Aクラスの立地条件であるとの折紙がつけられる。そして、さらに詳しい科学的調

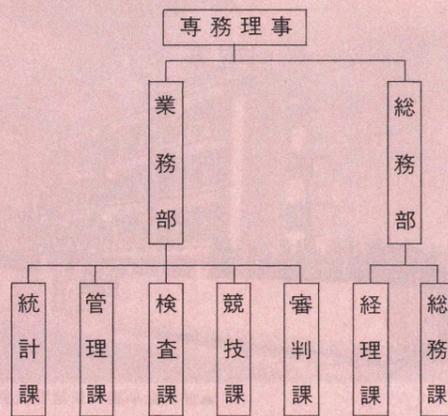
査が行われることとなる。

意を強くした津市では昭和26年9月26日、近藤市議会議長以下3名が上京、運輸省、地方財政委員会及び連合会にあいさつすると共に、連合会へは同年10月17日、津の秋祭に際し全国初のモーターボート試走会を行いたい旨申し入れるのである。さらに翌28日には野田副委員長も上京し、連合会に出頭して試走会実施の了承を得、協力の承諾も得て、ここに試走会の計画は実現の運びとなった。

実施決定となってからの津市の準備、宣伝には力が入ったが、それにしても秋祭とあいまってのこのモーターボート競走試走会は、津市が開催地として認可されることへの大きな布石、多大な効果をもたらしたと思われる。

昭和27年7月4日、津競艇は華々しい処女レースのしぶきを岩田河口にあげ、多くの人々の目耳を集中させたのである。

現事務局組織図
(昭和57年8月1日現在)



初開催時事務局組織図
(昭和27年7月4日)



●歴代会長

代	会長名	任 期
初	猪熊 信行	28. 10～52. 6
	 (略歴) 三重交通株式会社取締役	
2	西島 好夫	52. 6～53. 3
	 (略歴) 三重県議会議員	
3	水谷 昇	53. 3～57. 7
	 (略歴) 三重県桑名市市長	
4	森口 隆	57. 7～現在
	 (略歴) 澄懷堂文庫責任者	

●歴代役員

代	副会長名	任 期
初	西山 良一	28. 10～36. 10
初・2	西島 好夫	28. 10～33. 4 37. 1～52. 6
代	理事長名	任 期
初	安 保 正 敏	26. 9～28. 10
代	専務理事名	任 期
初	西山 良一	26. 9～28. 10
2	森口 隆	53. 8～57. 7
3	奥野 國 男	57. 7～現在

●競走会構成員数推移表

項目	年度							
	初開催時	30	35	40	45	50	55	57
会 員	19	19	15	19	21	24	25	22
役 員 (常勤、非常勤)	10	7	5	10	10	14	12	11
職 員 (含、嘱託)	15	20	25	19	30	23	26	26
臨時従業員 (アルバイト)	41	39	38	32	30	29	28	29
登録審判員	4	4	5	4	4	6	7	7
公認登録検査員	2	2	2	3	2	5	5	6

(注)各年度とも4月1日現在の集計、但し57年度は当表作成時(57年8月現在)

年 表			
年 月 日	事 柄	年 月 日	事 柄
26. 8. 10	創立総会を開催理事長に安保正敏選任、競走会事務所を松阪市湊町116に置く	44. 6. 29	新津競艇場竣工オープン初レースを行う
26. 9. 19	三重県モーターボート競走会設立認可	44. 12. 18	津市藤方字亀ノ越960番地の1に三重県モーターボート会館竣工事務所移転す
26. 10. 17	全国初のモーターボート試走会岩田川開催	45. 4. 1	非収益事業で会館選手宿舎営業を開始
27. 7. 4	全国公認第一号津競艇初開催	45. 8. 1	ボート会館で職員及び家族の善導運動実施
27. 11. 15	津市大字八丁346番地に事務所を移転	46. 8. 7	国体指定強化校海星高にヨット2艇を寄贈
28. 7. 22	津市大門町津1068番地に事務所を移転	46. 9. 27	ボート会館で創立20周年記念式典を挙げる
28. 9. 25	13号台風被災のため2ヶ月間休催	47. 9. 6	競走会東959番地の土地1613㎡購入
28. 10. 25	会長制に改められ初代会長に猪熊信行就任	47. 9. 14	椿大社で会長以下役職員の研修会を実施
29. 3. 12	建設省の護岸工事着手のため1ヶ月休催	47. 9. 17	津レース場でRCボート第1回競技会開催
30. 1. 20	鳩山内閣誕生自粛要望で開催日を制限	47. 9. 29	美化運動で会館東に花菖蒲6千株を植える
30. 3. 18	第一回東海地区選手権大会開催	48. 8. 3	鈴鹿青少年の森に手漕ぎボート5隻を寄贈
30. 7. 21	水難救援奉仕隊結成橋北中遭難救助に出勤	48. 8. 15	BGプラン県青少年健民課と合同活動開始
30. 11. 20	オール女子レース初開催市内パレード実施	49. 9. 30	津施行者従業員ストが原因し2ヶ月間休催す
31. 8. 25	津市一番町津2145番地に事務所を移転	50. 7. 21	海の記念日祝賀四日市市中パレードを主催
31. 10. 1	省令の施行で運輸省の監督による運営開始	50. 8. 6	BG寄贈の5艇でOPヨット教室を開始す
31. 10. 17	第2回全日本競艇記念レース開催	51. 5. 23	船の科学館友の会県本部発会式鳥羽で行う
34. 9. 26	伊勢湾台風で施設大被害10月中を休催	51. 8. 4	伊勢湾体験乗船会1900名しま丸で開催
34. 10. 2	県災害対策本部の要請で被災地救援に協力	52. 6. 7	会長に西島好夫選任
34. 11. 27	競艇場に近い町の総代競艇廃止運動を起す	52. 8. 1	第2回伊勢湾航海学校800名しま丸開催
35. 12. 15	防波堤が観覧席を兼ねる工事完了す	53. 2. 15	会長に水谷昇選任
36. 11. 8	副会長西山良一逝去松阪本覚寺で競走会葬	54. 2. 13	地元選手の年間優秀者祝賀激励会を開催
37. 3. 16	伊勢神宮で2日間役職員の研修会を実施	54. 2. 14	競走会施行者緊急警備対策協議会を行う
38. 2. 10	津市勢崎町津2260番地に事務所を移転	54. 7. 31	会館内に選手会事務所和室増築選手会入居
38. 4. 8	レースコース浚渫船に職員も応援徹夜作業	55. 8. 1	第3回松阪東京体験航海学校428名参加
38. 7. 7	第一回少年少女ゴムボート大会を開催	55. 11. 19	碧南及び蒲郡で会員、運営委員合同研修会
40. 3. 28	選手宿舎さちなみを競走会の直営で行う	56. 6. 17	津市体育館で東海地区関係者武道大会開催
40. 12. 40	レースコースに松風丸座礁レース中止する	56. 11. 30	創立30周年記念式典ボート会館で挙げる
42. 8. 26	久居町外6ヶ町村施行第1回レース開催	57. 2. 26	役職員従業員選手合同防火訓練映画会開催
42. 9. 30	創立15周年記念式典市町村会館で挙げる	57. 5. 28	会長に森口隆選任

福井県競走会

この事業こそ発展の原動力

昭和26年7月、福井県高浜町商工会初代会長一瀬伊太郎氏は、かねてより親交のあった当時の大阪産経新聞社々長全徳信治氏より、モーターボート競走法の制定及び競走会設立に関する話を聞かされる。さらに、同社事業部長徳永正氏より詳細な説明と他府県の動向等を聞いた一瀬氏は、この事業こそ高浜町発展の原動力となるものとの考えを固め、同町における競走の実施と競走会の設立を決意、すぐさまその準備と諸々の折衝に取りかかったのである。

しかしながら、一瀬氏とともによりモーターボート競走の帰趨など知る由もなく、不安と期待の交錯する中、同志諸賢と連日協議を繰り返しつつ競走法の研究を進め、定款の原案や趣意書(案)を作成していった。そして同年7月21日には、高浜町妙長寺において発起人会を開き競走会設立等

についての協議を行ったのである。

さらに同年8月21日、設立発起人総会を開催し、社団法人モーターボート競走会定款並びに設立趣意を満場一致で可決。設立者代表に一瀬氏を選任、役員就任予定者20名を決定して、その後の会員募集、設立準備を推進する手筈を整えた。かくして一瀬氏は、8月下旬に県知事小幡治和氏を訪問、競走会設立の趣旨目的を説明し、協賛並びに副申書を下附を懇請する。また、県内財界、有力者、海運関係者を歴訪して協力を要請すると共に、運輸省船舶局、近畿海運局敦賀支局等へも奔走するなど、設立準備に努力を集中していったのである。

その甲斐あってか、昭和26年10月19日、社団法人福井県モーターボート競走会の設立は認可され、同年10月30日に創立総会を開催。初代会長には一瀬氏の就任を決定した。



▲競走会事務所(昭和28年当時)



▲競走会事務所(昭和57年)

河川敷、人口3万、で難行

競走場設置については三国町、福井市、敦賀市から強い要望があったが、最も熱意のあった三国町を候補地として準備折衝を進めた。しかしながらその予定地が河川敷地のため、建設省の認可は至難と思われた。

使用認可の申請のため京福電気鉄道(株)福井支社長西出志郎氏と共に、建設省福井地方震災復興事務所に向いた一瀬氏は、当事務所長がかつて親交のあった岸栄氏であることを知り驚く。以後、岸氏の絶大なるお力添えを得て競走場の建設は認可となった。

一方、施行組合の設立に当っては一瀬会長等が三国町を訪れ、町の協力方を要請したところ、井上町長より競走実施の強い懇請もあり、種々協議の結果三国町が実施するとの方向で諸計画が進められることとなった。しかし、競走施行者の要件に「人口3万人以上を要す」とあり、これに

満たぬ三国町は近隣各町村に共催の協力を求め奔走するが、なかなか同意が得られなかった。ところが幸いにも、武生市長尾崎稲穂氏の好意により同市議会で審議されることとなり、共催が決議される。

こうして昭和28年2月18日、福井県知事の許可により武生、三国モーターボート競走施行組合が誕生した。

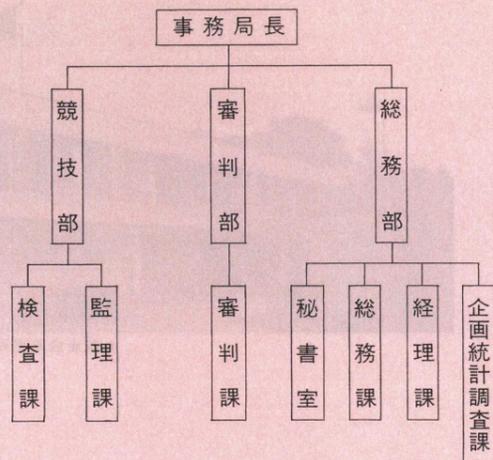
また施設諸準備については、三国町に競走場建設が承認された頃、当時の町財政事情では競走場建設のための莫大な資金など調達困難として、井上町長は施設会社の設立を希望。一瀬氏と共に京福電鉄西出氏を訪れ、協力を求めた。

西出氏の尽力により多数の賛同者も得て昭和27年10月30日、三国競艇施設(株)は設立をみる。

その後、競走場建設等についての種々の難問題を解決しながら、関係者の絶大なる協力によって昭和28年4月14日、待望の初開催となるのである。

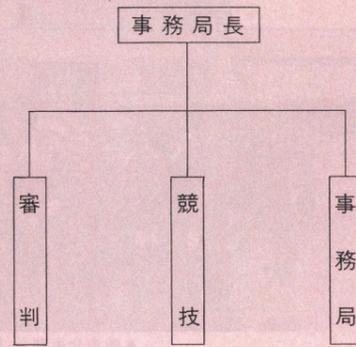
現事務局組織図

(昭和57年8月1日現在)



初開催時事務局組織図

(昭和28年4月)



●歴代会長

代	会長名	任期
初	一瀬伊太郎	26. 10～現在



〔略歴〕

郡連合青年団長、高浜町議会議員、高浜町長に就任、商工会創立会長、競走会創立会長、県議会議員2期、競走会協議会長

●歴代役員

代	副会長名	任期
初	秋田季三	26. 10～33. 3
//	佐久間静男	26. 10～29. 5
2	斎藤竜雲	29. 5～33. 3
3	吉田慶三	46. 6～58. 5
代	理事長名	任期
初	一瀬専吉	26. 10～31. 4
代	専務理事名	任期
初	小畑耕太郎	26. 10～29. 5
2	濱田倫三	29. 5～31. 4
3	室新太郎	31. 4～45. 3
4	堀口与一	51. 5～55. 5
5	一瀬茂雄	55. 5～現在

●競走会構成員数推移表

項目	年度	初開催時							
		30	35	40	45	50	55	57	
会員		207	207	204	196	194	183	181	176
役員(常勤、非常勤)		28	29	14	13	12	14	15	15
職員(含、嘱託)		7	9	12	14	23	22	22	24
臨時従業員(アルバイト)		47	46	46	31	23	23	23	25
登録審判員		3	3	6	8	13	12	17	15
公認登録検査員		2	2	2	4	7	9	13	12

(注)各年度とも4月1日現在の集計、但し57年度は当表作成時(57年8月現在)



▲競走会事務所(昭和36年当時)

年 表			
年 月 日	事 移	年 月 日	事 柄
26. 10. 30	福井県モーターボート競走会創立総会開催	42. 6. 18	第1回選手とその家族との懇談会開催
26. 11. 1	競走会事務所を高浜町に開設	42. 11. 3	第1回職員とその家族との懇談会開催
27. 11. 12	三国競艇施設株式会社設立	43. 11. 23	総合会館選手宿舎と事務所落成
27. 11. 13	武生市、三国町に施行者権を指定	43. 7. 18	新三国競走場竣工記念特別競走開催
28. 2. 18	武生三国モーターボート競走施行組合設立	44. 4. 28	三国競艇武道同好会錬心会結成
28. 4. 14	三国競走場初開催(1節売上8百68万円)	44. 10. 6	空手道谷派系東流の指導を受け練習開始
29. 9. 25	洞爺丸台風により競走場の洪水被害	45. 3. 21	競走会専務理事室新太郎氏病気で死亡
30. 6. 10	日本水上スキー連盟福井県支部結成	45. 5. 5	日本万国博覧会大阪で開催会員従事員見学
30. 7. 20	第15回海の記念日に水の祭典挙行	46. 3. 2	三国競艇武道同好会錬心会顧問団結成
31. 1. 23	最初の騒擾事件(田中佐平選手60m出遅れ)	46. 10. 4	競走会創立20周年記念式典挙行
31. 4. 23	芦原温泉大火のため競走開催2日間を中止	47. 10. 9	競走会みくにボート会館落成
32. 6. 20	三国競艇運営協議会結成	48. 12. 8	みくにボート会館で小、中、高生の武道教室開講170余名が参加
32. 10. 9	競走会選手専用宿舎の地鎮祭挙行	49. 1. 4	石油節約運動に協力、競走10レース制実施
33. 3. 6	6レース(6-3)で37万5千円の初高配当	50. 8. 25	三国、芦原両町教育関係者と三国海洋少年団71名による船の科学館見学研修会実施
33. 4. 10	競走会選手専用宿舎の落成	50. 10. 31	競走会役員沖繩海洋博覧会見学
34. 7. 1	敦賀水上スキー倶楽部の結成を指導	51. 8. 9	3日間に亘り船の科学館友の会広報車による県内巡回実施
34. 9. 27	台風15号の為競走場水没選手宿舎浸水	51. 11. 8	競走会創立25周年記念式典挙行
35. 7. 21	競走場に於て水上スキー教室開講	52. 8. 19	国内体験航海児童の船で沖繩海洋センターへ児童6名を参加
35. 7. 23	三国競走場で3泊4日の職員訓練実施	52. 10. 15	アマチュアモーターボート第1回大会開催
36. 7. 23	競走場で福祉児童90名を招き試乗会開催	53. 7. 25	海外体験航海少年の船グアム、サイパン島海洋教室に少年を参加
36. 12. 14	競走会事務所(高浜町)の落成式挙行	53. 10. 10	総合会館会議室等の増築落成
37. 7. 20	福井市あさぐも学園生徒70名を招待しボート試乗会と水上スキーの公開実施	54. 7. 1	発売中落雷により電気系統故障レース中止
38. 1. 23	豪雪で交通完全遮断競走開催12日間中止	54. 8. 12	県民体育大会に銃剣道競技種目に出場
38. 7. 28	競走場で少年少女のゴムボート大会開催	55. 8. 15	総合会館選手宿舎浴場の増築落成
39. 3. 29	整備庫より出火モーター庫全焼控室半焼	56. 10. 20	競走会創立30周年記念式典挙行
39. 5. 6	第1回競走会会員研修会を開催		
40. 7. 10	第1回水上スキー指導者講習会開催		
41. 5. 18	郷友連盟競艇支部韓国視察参加		
41. 8	競走場の移転先調査開始		

滋賀県競走会

観光、商工にも多大な配慮

中央においてモーターボート競走施行の議がおこるや、当時の滋賀県知事服部岩吉氏は、すでに競馬、競輪を開催という経験と、本県琵琶湖を中心とする観光開発、あるいは逼迫する県財政の確立を図るため、当初から非常に意欲的で事務局にその調査、検討を指示されていたが、後日笹川良一氏との会談によって施行の意を固められたという。

昭和26年6月、モーターボート競走法が制定されると、服部知事は直ちに当該競走事業の実施を決定し、競走会の設立方針を定めて同月15日、その準備を琵琶湖汽船社長黒川寛一氏に委託した。

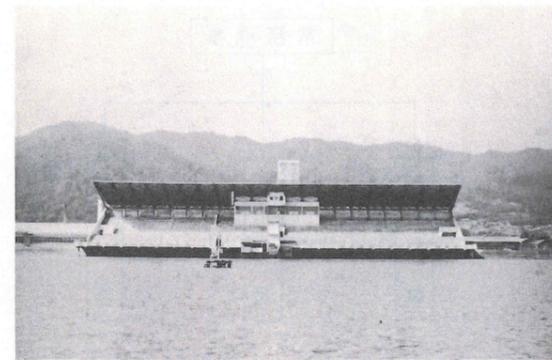
黒川氏は、競走会設立の仮事務所を浜大津の琵琶湖汽船本社内に設置し、直ちに設立準備に着手した。まず、設立発起人には県内の商工、観光業界に重要な役割を担ってい

る商工会議所の会頭をはじめ運輸、観光会社の代表者を選び、設立準備会を組織されたが、会員は県内の都市から代表的な有力者1ないし2名を選び、会員数を多くしない方針で進められた。

設立総会は同年8月18日、県庁会議室において開催され会員が初めて一堂に会して定款の制定が承認され、役員を選任が行われた結果、黒川寛一氏が満場一致をもって会長に推され就任することとなった。

昭和26年8月31日、滋賀県モーターボート競走会設立許可申請が、服部知事の副申書を添付して提出され、同年9月19日には認可を受ける。続く9月29日に設立の登記を完了して正式に競走会は発足した。

なお、事務所は大津市白玉町に土地建物を購入、仮事務所から移転して同年10月1日に新しく開設された。



▲スタンド(昭和27年当時)



▲競走会事務所(昭和57年)

琵琶湖々畔での初開催準備

競走場の建設については、県の観光、交通等の諸要件を考慮して現在地に建設を決定し、昭和27年4月末から昼夜兼行の突貫工事の末、初開催の前日によろしく完成をみた。

またボート、モーターの獲得ということでは、関係者が協議した結果モーターは日本モーター(株)の「マイクロ」モーター使用と決定。しかし生産能力や性能の点で一抔の不安もあったため、国際競艇興業を通じ米国製エビンルード20基と、マーキュリー20基を発注しエンジンを確保した。一方ボートについては、従来より県内で造船されるヨット、レース用ボートは国内でもその優秀さが認められており、県内小型船舶造船事業の振興にもなるとして、県内発注することを決定した。なお、不足隻数については国際競艇興業からこれを購入補充した。

一方オーナー確保の件では当初より多数オーナー制を原

則として実施する方針を固めており、その確保は何よりの先決問題でもあった。

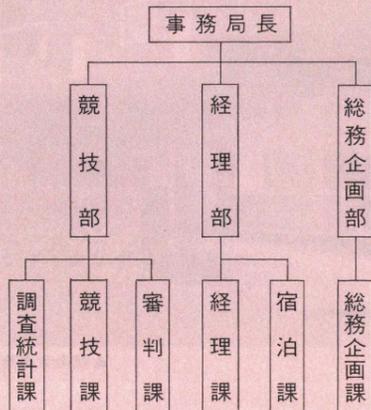
このため各役員は、会員はもちろん他の県内有力者を歴訪し、オーナーとして競艇事業に参加してもらうべく勧誘に努めたが、誰れもがこの未知の事業に対する不安からいまひとつ積極的になれず、話はなかなかまとまりそうになかった。

しかし、関係者の必死の努力によってついに、団体オーナー16の外に若干の個人オーナーをも確保することができたのである。

さらに競走会は、選手、審判員の養成についても、当時県自転車振興会理事長の佐藤与吉氏(のちの競走会会長)を中心とする「国際モーターボート選手審判員養成所」を、琵琶湖畔に開設し、草創期における選手及び審判員の養成訓練に大きく貢献した。

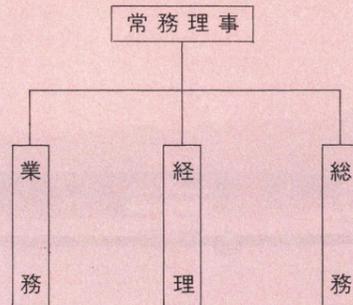
現事務局組織図

(昭和57年4月1日現在)



初開催時事務局組織図

(昭和27年7月)



●歴代会長

代	会長名	任期
初	黒川寛一	26. 8 ~ 28. 8
		〔略歴〕 ●昭和22年4月、琵琶湖汽船(株)社長 昭和24年3月より京阪電気鉄道(株)取締役兼任
2	前川鬼子男	28. 9 ~ 30. 8
		〔略歴〕 ●昭和18年滋賀県長浜市長に就任 昭和22年日本和紡製品(株)顧問、大阪窯業セメント(株)相談役、本会設立時に常務理事就任
3	佐藤与吉	30. 9 ~ 40. 12
		〔略歴〕 ●弥栄鉱業(株)代表取締役、滋賀県自転車振興会理事長、日本自転車興業(株)取締役、昭和29年5月本会入会、理事就任

代	会長名	任期
4	諏訪三郎	41. 1 ~ 42. 3
		〔略歴〕 ●滋賀県、厚生労働、経済、各部長を歴任、(財)滋賀県開発公社常務理事
5	和田純一	42. 4 ~ 50. 3
		〔略歴〕 ●滋賀県教育委員会、教育長、県出納長と歴任
6	石川善策	50. 4 ~ 現在
		〔略歴〕 ●陸軍幹部候補生、兵役を経て京都地方事務官に就き、昭和27年4月より本会審判長、事務局長を経て、常務理事、専務理事、副会長を歴任

●役員名

代	副会長名	任 期
初	佐藤 与吉	30. 4 ~ 30. 8
1	石川 善策	42. 4 ~ 50. 4
2	三浦 弥一	55. 4 ~ 57. 3
4	森地 善夫	57. 6 ~ 現在
代	専務理事名	任 期
初	前川 鬼子男	28. 9 ~ 29. 4
2	田中 耕次	29. 4 ~ 30. 2
3	石川 善策	41. 1 ~ 42. 3
4	小俣 政美	47. 4 ~ 51. 3
5	三浦 弥一	51. 3 ~ 55. 3
6	大西 茂	55. 4 ~ 現在

●競走会構成員数推移表

(単位:名)

項目	年度	初開 催時	年 度						
			30	35	40	45	50	55	57
会 員	29	30	25	27	28	28	33	34	
役 員 (常勤、非常勤)	13	13	7	9	10	11	12	12	
職 員 (含、嘱託)	23	14	12	14	22	21	18	20	
臨時従業員 (アルバイト)	45	42	42	36	34	33	29	27	
登録審判員	2	5	5	6	7	7	7	8	
公認登録検査員		1	1	3	6	4	6	6	

(注)各年度とも4月1日現在の集計、但し57年度は当表作成時(57年8月現在)

年 表

年 月 日	事 柄
26. 6. 20	琵琶湖汽船内仮事務所にて設立準備事務開始
26. 8. 18	滋賀県庁会議室にて創立総会開催
26. 8. 31	競走会設立許可申請を提出
26. 9. 19	文官第1075号にて運輸大臣より設立許可
26. 10. 1	大津市白玉町に事務所を開設、本格的な業務開始
27. 7. 10	大津、彦根、長浜の三市、モーターボート競走施行の指定を受ける
27. 7. 18	高松宮殿下ご来臨のもと県営第1回競走開催
28. 5. 30	3市は、2開催施行ののち、売上不振のため施行中止
28. 9. 25	台風により投票所等被害を受け、1ヶ月間開催休止
29. 4. 4	日米アマチュアモーターボート選手権大会開催
29. 8. 21	第1回全国模型モーターボート競技京滋大会開催
30. 7. 22	びわこ縦断モーターボートレース開催笹川会長出場
30. 9. 15	競走会事務所、競走場に移転
30. 9. 19	県水難救援奉仕隊結成
31. 10. 15	第1回東西対抗競走開催
32. 6. 18	結核予防会総裁秩父宮妃殿下賜杯下賜許可を受ける
32. 7. 3	遊覧船炎上乗員乗客救助、海運局長表彰受ける
32. 7. 26	第3回モーターボート記念並びに第1回秩父宮妃賜杯競走前夜祭京都にて開催

年 表

年 月 日	事 柄	年 月 日	事 柄
33. 1. 13	ファンサービス伊勢神宮初詣会実施(10数年つづく)	43. 8. 2	大津海洋少年団モーターボート操縦訓練実施
33. 7. 15	第2回秩父宮妃賜杯優勝競走に妃殿下臨席観戦	43. 10. 30	第1回びわこモーターボートスピード記録会実施
33. 8. 5	秩父宮妃殿下より結核予防事業に賛同表彰を受ける	44. 5. 23	日本赤十字社より金色有功章授与される
33. 12. 10	結核予防事業に賛同し内閣総理大臣褒賞	44. 6. 13~14	合同調査総合警備訓練実施
34. 7. 30	第1回ボーイスカウトモーターボート操縦講習会開催	45. 7. 14	選手管理センター竣工競技本部移転
34. 8	第2回日本ジャンボリーに協賛、競走艇によるパレード等を実施	46. 3. 11	第1回古豪戦競走開催
34. 10	第1回菊人形展及び菊花コンクールを開催	46. 11. 20	創立20周年記念式典挙行政
35. 6. 18	大学東西対抗レース開催	47. 8. 17	地元学区盆踊り及び競艇音頭開催
36. 7. 17	第5回秩父宮妃賜杯表彰式、妃殿下臨席賜わる	48. 10. 10	五者(施行者、競走会、オーナー、選手会、投票所従事員)合同運動会開催
36. 10. 22	第1回琵琶湖一周モーターボートマラソンレース開催	50. 3. 28	年末年始失格欠場事故防止第1位、スタート事故防止第3位授賞
37. 1. 6	中島常介選手試運転中殉職	50. 10. 11	第1回少年ヨット教室開催
37. 7. 25	県下老人ホーム巡回慰問実施	50. 11. 12	船の科学館友の会県本部発足
37. 8. 7	第1回びわこ長距離水上スキー大会開催	51. 9. 23	第1回八景賞競走開催
38. 6. 9	関西水上スキージャンプ大会開催	52. 3. 13	第1回近畿選抜戦競走開催
38. 7. 21	第1回少年少女ゴムボート大会開催	52. 3. 23	創立25周年記念式典挙行政
39. 1. 5	第1回関西水上スキー寒中大会開催	54. 11. 15	第1回さざなみ賞競走開催
40. 4. 2	滋賀ボート会館起工式挙行政	54. 10. 21	第1回滋賀県少年剣道大会開催
40. 10. 25	滋賀ボート会館落成式事務所移転	55. 7. 27	第1回小学生柔道大会開催
40. 12. 31	佐藤会長脳内出血にて死亡	56. 9. 19	創立30周年記念式典挙行政
41. 5. 10	創立15周年記念式典挙行政		
41. 8. 10	役職員物故者慰霊祭挙行政		
42. 1. 26	第1回新鋭戦競走開催		
43. 7. 26	4号台風のため記念競走を中止する		

大阪府競走会

競走実現に大阪財界人も全面協力

モーターボート競走の立案からその制定推進へと、終始主導的役割を果たしていた笹川良一氏(現大阪府競走会長)は、草創期において全国モーターボート競走会連合会の設立に邁進する一方、大阪地区においては(社)大阪府モーターボート競走会、及び施設会社である大阪競艇施設(現住之江興業)の設立を指導し、同時に施行者の組織化にも尽力していた。そして、笹川良一氏のこれら精力的な活動に呼応し、数多くの大阪財界人が、競走開催実現のため東奔西走したのである。

そして、昭和27年9月5日、大阪府におけるモーターボート競走がその呱呱の声をあげたのであるが、当時の各地競走会同様、当地においても、本会設立の経緯に触れずし

てこの地の競艇事業の誕生を語ることはできないのである。

すなわち、競走法公布の日を約1ヵ月さかのぼる昭和26年5月6日、のちに競走会設立発起人に名を連ねる南海電気鉄道の吉田卯之吉常務は、狭山池普通水利組合管理者の光田源太郎氏とともに、上京し運輸省の今井栄文監理課長に面談、そこでモーターボート競走法が近く成立すること、競走場に関する基準を作成中であることその他知事への請願書の提出の方法などについて貴重な助言を得た。さらにその足で銀座ストア2階へ笹川良一氏を訪ね、「競走実現のため連合会設立などに全力を投入している」「狭山池のある南河内は自分の10年前の選挙区であり、今度はその恩返しをするつもりである」との真意を聞き、大いに力を得、帰阪後早速、狭山池普通水利組合の光田管理者名で、大阪府知事に対し競走場設置の請願書を提出した。

禍転じて福となす

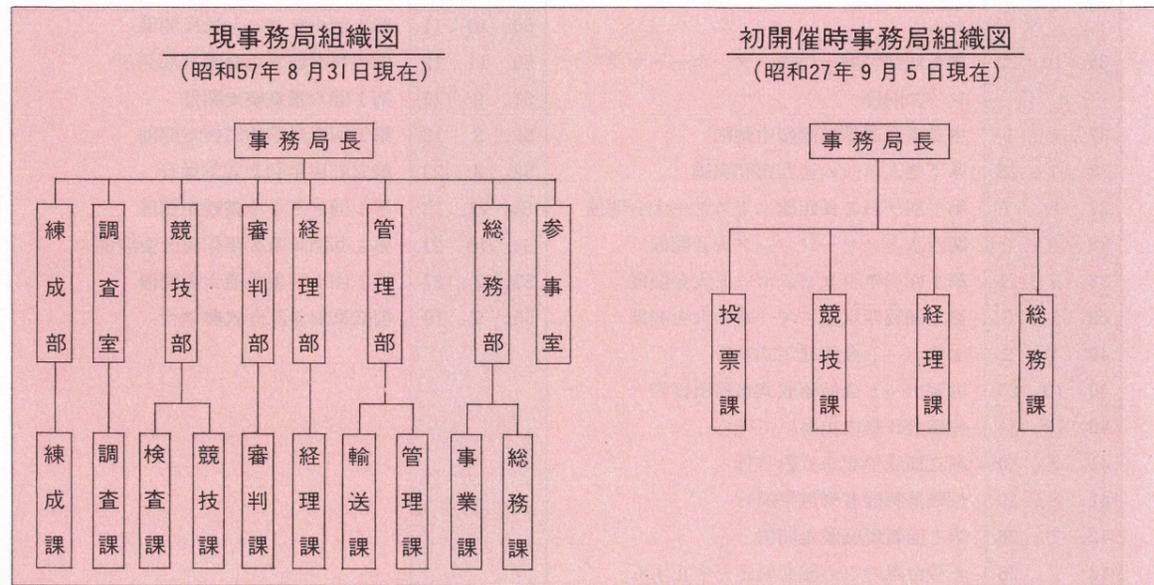
同年6月6日、大阪府モーターボート競走会の設立趣意書が、「昭和25年秋以来、競走開催実現に努めてきたが、このたびモーターボート競走の法制化を機会にこの競走事業を進展させ、地方財政への寄与、海事思想の普及等に役立つ」との趣旨のもと作成された。

続く同月19日、高島屋新館グリン花馬車において競走会設立発起人会が山村大阪府副知事をはじめ大阪府、大阪市、近畿海運局同席のもとに開かれた。発起人には伊藤武雄大阪商船社長、飯田直次郎高島屋社長、小原英一南海電気鉄道社長、小田原大造久保田鉄工所社長、松原與三松日立造船社長ほか大阪財界の主脳21名が名を連ねていた。そして発起人代表には伊藤武雄氏が選出され、同時に設立趣意書、定款案、事業計画案、会員募集の件等について審議、また競走場の建設には別に施設会社をつくることも確認された。終了後直ちに競走会創立総会が開催され、役員等を選出。

同年7月10日、山崎猛運輸大臣に対し(社)大阪府モーターボート競走会設立許可を申請、9月21日設立が認可された。

競走会は直ちに事務諸般を進める一方、施行者として大阪府を候補にあげその実現に強く働きかけるとともに笹川春二氏(のちに理事長、会長に就任)の指導のもと、エンジン、ボートの調達、オーナーの勧誘、選手養成等、翌27年4月に初開催を行うべく準備を進めていった。

やがて狭山池使用に関する交渉も軌道にのり、昭和27年9月4日大阪競艇場が竣工、翌5日に待望の第1回競走の幕をあげた。しかし、その後、業績は低調の一途をたどり、さらに大旱魃による狭山池の涸渇などもあってこの池での開催は不能となり、閉場のやむなきに至った。だがこの禍こそが現在の住之江競艇場への移転をもたらす契機となり今日の業績の礎となったのである。まさに禍転じて福となったのである。



▲競走会事務所(南海ビル7F・昭和27年当時)



▲競走会事務所(昭和57年)

●歴代会長

代	会長名	任期
初	伊藤武雄	26. 9 ~ 28. 2
<p>(略歴) 大阪商船社長</p> 		
2・4	笹川良一	28.2 ~ 33.3 48.8 ~ 現在
		
3	笹川春二	42. 1 ~ 48. 6
		

●歴代役員

代	副会長名	任期
初	小田原 大造	26. 9 ~ 31. 1
2	松原 与三松	26. 9 ~ 42. 5
3	和田 完二	33. 2 ~ 41. 5
4	笹川 春二	41. 8 ~ 41. 12
5	吉松 正勝	42. 9 ~ 44. 10
6	松岡 賛城	42. 9 ~
7	藤原 常吉	44. 10 ~ 48. 5
代	理事長名	任期
初	吉田 卯之吉	26. 9 ~ 30. 4
2	笹川 春二	31. 8 ~ 41. 7
代	専務理事名	任期
初	蔭山 幸夫	50. 5 ~ 現在

●競走会構成員数推移表

項目	年度 初開催時	年度							
		30	35	40	45	50	55	57	
会 員	57	86	82	72	67	55	57	50	
役 員 (常勤、非常勤)	16	17	13	12	13	13	13	13	
職 員 (含、嘱託)	16	19	27	32	31	44	37	43	
臨時従業員 (アルバイト)	不明	不明	不明	46	47	63	53	50	
登録審判員	不明	4	7	7	10	11	14	15	
公認登録検査員	不明	2	7	9	12	14	13	13	

(注)各年度とも4月1日現在の集計、但し57年度は当表作成時(57年8月現在)

年 表

年月日	事 柄	年月日	事 柄
26. 9. 21	競走会設立認可、伊藤武雄初代会長就任	43. 3. 29	結核予防会大阪府支部にレントゲン車寄贈
27. 9. 5	大阪競艇(狭山)初開催、主催都市組合	44. 12. 29	競艇場正門前に歩道橋を寄贈(当競走会)
28. 2. 3	笹川良一会長、伊藤武雄名誉会長就任	46. 1. 2	1日売上額の公営競技最高記録達成(84584万円)
29. 9. 9	高松宮殿下大阪競艇場にご来場	46. 9. 22	創立20周年記念式典を実施
28. 11. 11	箕面・豊川競艇組合主催初開催	46. 9. 25	大阪競艇場を住之江競艇場と改称さる
30. 8. 13	狭山池早魃のため3点マークでレース実施	47. 7. 4	住之江トータリレーターシステム全面实施
31. 4. 10	大阪競艇場閉鎖(狭山)	47. 7. 6	第1回高松宮杯特別競走(両殿下ご台臨)
31. 6. 19	住之江競艇初開催	47. 12. 9	府下17市に救急車寄贈
31. 8. 30	笹川春二理事長就任	48. 5. 8	府下14市に救急車寄贈
31. 12.	大阪競艇振興委員会を設立	48. 6. 30	笹川春二会長逝去
33. 3. 31	F.L防止運動全国第1位	48. 8. 1	笹川良一会長就任
33. 4. 1	笹川良一名誉会長就任	48. 11. 18	トンガ王国国王王妃両殿下ご来場
33. 5. 23	業界初の試み選手体重平均レースを実施	48. 11. 22	最終全国地区対抗競走高松宮殿下ご台臨
34. 7. 19	第1回海の子の集い開催(養護施設生徒招待)	49. 1. 24	府下8町村に山林火災用消防ホース寄贈
34. 7. 20	海の記念日協賛中之島水上パレードを実施	49. 5. 7	第1回笹川賞競走を実施
35. 4. 17	今東光氏1日審判長に就任	49. 5. 29	府下8町村に救急車寄贈
35. 9. 21	第1回鶴亀の集い開催(養護施設老人招待)	49. 12. 29	1日売上額公営競技の記録を更新(19億9858万円)
35. 10. 10	第1回少年模型モーターボート大会を開催	50. 2. 15	ドレーパー世界人口基金に1億円寄附
36.	住之江競艇場売上額第1位となる	50. 11. 5	大阪府警にミニバトロールカー47台寄贈
36. 7. 7	東京-大阪1,000キロマラソンレース協賛	51. 6. 4	大阪掖済会病院に人工腎透析装置一式寄贈
36. 8. 1	第8回全日本選手権大会を実施	51. 12. 27	日本学術振興会に寄附
36. 12. 31	1日売上額の全国最高記録達成(49,036,600)	52. 3. 30	(財)日本極地研究振興会に寄附
37. 6. 2	大和川幼少年水難犠牲者慰霊祭を協賛	52.	第1回住之江少年少女海洋教室を開催
37. 8. 1	第8回モーターボート記念競走を実施	53. 1	52年度年末年始事故防止運動全国1位
38.	新事務所(船舶ビル)購入移転	55.	大阪府下20自治体に救急車30台寄贈
38. 5. 5	第1回大阪府少年少女ゴムボート大会開催	56. 9. 21	創立30周年記念式典を実施
39. 11. 26	府下8市に救急車寄贈	56. 12. 30	1日売上公営競技記録更新(294,472万円)
40. 3. 30	選手宿舎(住之江寮)竣工	57. 6. 19	大阪府下12市町村に救急車寄贈
42. 1. 13	笹川春二会長就任	57. 8. 8	住之江競艇場でロックコンサート
42. 3. 2	第2回鳳凰賞競走を実施	57. 9. 25	TV番組びっくり日本新記録住之江で録画

エネルギーギッシュな設立運動が花開く

昭和26年1月頃、神戸商工会議所会頭宮崎彦一郎氏、神戸港湾食糧株式会社社長小林勝利氏は、「兵庫県にモーターボート競走会を設立しよう」との考えを持ち、以来、東京あるいは神戸海運局、兵庫県庁をはじめ県会議長、神戸、尼崎、西宮各市の市長らを歴訪して、競走会設立に関する意見を交換。また、神戸商工会議所の議員を中心に海運交通運輸事業・観光事業関係者、造船造機製造・貿易関係者その他学識を有する知名の士らの参集を求めて打合せを行うなど、相当エネルギーギッシュに設立運動を進めていた。

この間、同年6月18日にはモーターボート競走法が公布され、即日施行となる。これにより設立の気運はいよいよ高まり、同年8月17日、神戸商工会議所会頭宮崎氏を中心

に、神戸商工会議所において発起人総会を開催。発起人33名出席のもとに満場一致で兵庫県モーターボート競走会設立を可決、さらに宮崎氏を発起人代表及び設立申請人に決定した。続いて同年8月24日、宮崎氏は運輸大臣宛設立許可申請書を兵庫県知事に提出、知事の至急に許可を願う副申の進達によって、昭和26年10月1日付官文第1108号をもって設立認可となる。

同年10月11日、社団法人兵庫県モーターボート競走会は創立総会を開催するが、この総会で初年度事業計画、収支予算の決定は理事会に一任することを満場一致で可決した。

さらに役員を選任では、宮崎氏を初代会長とした外、副会長以下13名の役員を選任している。

続いての問題は、モーターボート競走をどこで開催するか、その候補地選定についてであった。



▲競走会事務所(昭和26年設立当時)



▲競走会事務所(昭和57年)

線路ぎわの大湿地帯が変身

社団法人兵庫県モーターボート競走会にとって創立後最大の関心事は、競走場の設置場所であったと言ってもよく、県下数カ所の候補地について詮索を続けていたが、当初においては西宮市が競走場誘致候補、積極的にその運動を展開して、運輸省の認可寸前というところまでいった。

一方、当時の尼崎市長阪本勝氏は、市の中央に位置する10万坪の大湿地帯が阪神電車の線路沿にあって、10年来丈余の葦の密生するまま汚水の淀みにまかせ、蚊の温床となって放置されているのを想い、これを大規模に埋立てできぬものかと考えていた。同じ頃競走会もまた、この大湿地帯を放っておくのは惜しいとし、これを開発して池とすれば丁度格好の競艇場になるのではと考え、阪本尼崎市長に幾度となく交渉を重ねるのである。

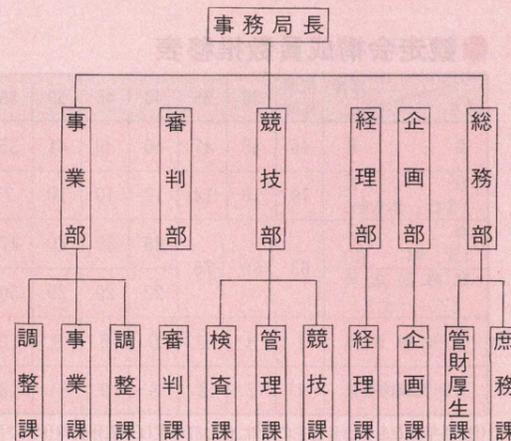
当初、話は非常に難行するが結局、市の戦災復興の財源

確保と発展を合せ考えて、競艇場を誘致しようと、昭和27年西宮、尼崎両市が立候補、競願となる。しかし、関係者の積極的な尼崎市への誘致運動と共に、人口密度も高く立地条件にも勝るとして尼崎市への競艇場設置が承認された。なお設置については、阪本尼崎市長と競走会宮崎会長との間で話がまとまり、同年5月には同所の開発に着工した。

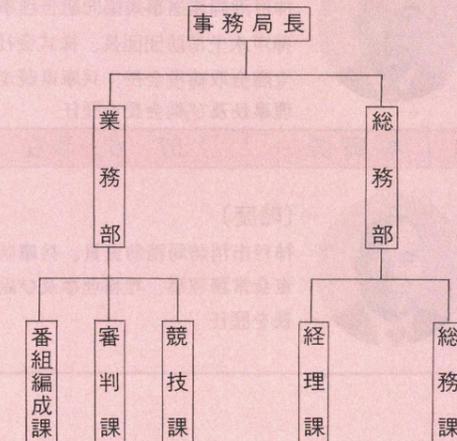
しかし尼崎市においては資材面等に乏しく、工事の進行にもこと欠く有様であった。そこで競走会では、同市に資金を立替え、最も重要な役割をもつサンドポンプ船(当時、日本で3隻しかなかった)の1隻を県に交渉して借り入れ、斡旋するなど開発工事に必要な資材面等で全面的に協力、尼崎センタープール完成へ中心的役割を果たした。

かくして昭和27年8月、工事は完了し、同年9月14日から6日間の尼崎市営第1回の開催をみたのである。

現事務局組織図
(昭和57年7月現在)



開催当初事務局組織図
(昭和27年9月現在)



●歴代会長

代	会長名	任期
初	宮崎彦一郎	26. 10～28. 5
 <p>〔略歴〕 神戸商工会議所会頭に就任、兵庫県商工会議所連合会会頭を兼任</p>		
2	村尾市松	28. 5～33. 7
 <p>〔略歴〕 上組合資会社代表社員頭取に就任、兵庫県競走会副会長に就任</p>		
3	向井繁人	34. 1～57. 3
 <p>〔略歴〕 神戸港解運送事業協同組合理事長、神戸水上消防団団長、株式会社永宝商会取締役会長、兵庫県競走会理事長及び副会長を歴任</p>		
4	本岡芳一	57. 6～現在
 <p>〔略歴〕 神戸市消防局消防吏員、兵庫県競走会常務理事、専務理事及び副会長を歴任</p>		

●歴代役員

代	副会長名	任期
初	岡村丹二	26. 10～28. 5
//	小田萬藏	26. 10～33. 1
2	村尾市松	27. 5～28. 5
3	向井繁人	33. 4～34. 1
4	小林勝利	43. 10～46. 12
5	本岡芳一	49. 6～57. 6
代	理事長名	任期
初	小林勝利	26. 10～27. 5
2	向井繁人	27. 5～33. 4
3	小林勝利	33. 4～43. 5
代	専務理事名	任期
初	小林勝利	27. 5～33. 4
2	本岡芳一	43. 10～49. 6
3	味噌野昌夫	49. 6～55. 8
4	青池和男	57. 6～現在

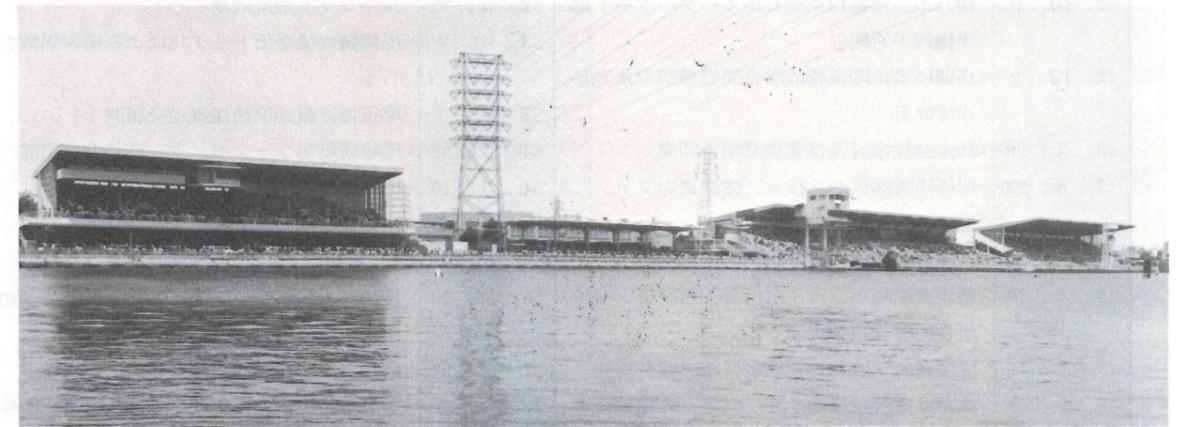
●競走会構成員数推移表

項目	年度 初開催時	年度							
		30	35	40	45	50	55	57	
会 員	46	45	47	46	39	41	35	36	
役 員 (常勤、非常勤)	16	18	14	13	10	10	7	13	
職 員 (含、嘱託)	63	86	78	38	39	40	47	43	
臨時従業員 (アルバイト)				22	29	29	30	35	
登録審査員	1	3	6	6	8	9	12	4	
公認登録検査員	(1)	2	2	3	9	11	13	15	

(注)各年度とも4月1日現在の集計、但し57年度は当表作成時(57年7月現在)

年 表

年月日	事 柄	年月日	事 柄
26. 10. 1	兵庫県モーターボート競走会設立認可(官文第1108号)	32. 4. 1	宣伝業務の一部を競走会が負担
26. 10. 11	創立総会で宮崎彦一郎氏が会長に就任	32. 5. 28	第3回全国地区対抗特別競走を開催
27. 8. 30	大庄地区の湿地帯に尼崎競艇場完成	33. 6. 28	第3回近畿地区モーターボート選手権競走を開催
27. 9. 14	尼崎市営初開催、初日売上3,860,100円	33. 9. 1	競艇場周辺の小・中学校8校に体育費を援助
28. 5. 20	役員改選で村尾市松氏が会長に就任	34. 1. 12	向井繁人氏が会長に就任(船監第9号認可)
28. 6. 18	伊丹市営初開催、初日売上6,004,400円	34. 10. 11	開設7周年記念特別競走(東西対抗)を開催
29. 10. 21	神戸みなと祭に協賛、神戸港内でパレードを行う	35. 2. 9	法改正問題に関し、競艇存続陳情のため向井会以下上京
29. 12. 12	新尼崎市長の薄井一哉氏が市政方針で競艇廃止を公表	35. 3. 12	薄井市長、35年限りで競艇廃止を言明後、1年延長に改める
30. 3. 6～10	第1回近畿地区モーターボート選手権競走を開催	36. 3. 9	薄井市長、競艇廃止の決意変わらず、同日文書で競走会宛通告
30. 7. 19	競走用モーターボートで明石海峡横断航走を行う	36. 11. 26	向井会長、競艇存続の援助要請のため上京
31. 9. 7～13	開設4周年記念特別競走を開催	37. 3. 26	尼崎市会本会議で競艇存続2ヵ年延長が決定
31. "	尼崎競艇場で栄える産業博覧会を開催		



▲スタンド全景(昭和57年)

年 表			
年月日	事 柄	年月日	事 柄
37. 8. 7	国際少年少女ゴムボート競技大会開催（以後名称を変え毎年実施）	46. 7. 10	競走会従業員総合訓練実施
38. 2. 26	ときわ丸遭難、乗船3選手の救助対策本部を競走会事務所に設置	46. 9. 30	大庄地区敬老会開催
38. 12. 29	尼崎市議会が競艇廃止条例の廃止を議決し存続に決定	47. 2. 2	競走会創立20周年記念式典を挙げる
39.7.1~8.31	武庫川岸に水奉隊員を常駐させ危険水域の監視に協力	47. 2. 21	競走法制定20周年記念特別競走を開催
39. 8. 8	尼崎市市内施設児童500名を観光バスで琵琶湖、比叡山に招待	48. 6. 7	神戸港内で海の美化運動実施（以降毎月1回実施）
40. 6. 10	尼崎競艇場諸施設改善（メインスタンド、正門及び入場券売場、コーナー審判塔、ピット上屋、消防詰所及び手荷物預り所）	48. 12. 10	善意の傘（置傘）13000本を尼崎市内、小・中・高74校に寄贈
41. 4. 1	尼崎市に競走会事務所、選手宿舎併設水光ビル竣工	49. 1. 10	尼崎市営第10回1節から石油節約運動に協力して、従来1日のレース数12レースが10レースになった。
41. 7. 2	集中豪雨のため開催中止、競艇場周辺地区の水害罹災者を救済	50. 5. 1	競走会広報紙（水光）創刊号発行
42. 10. 5	伊丹市主催第14回全日本モーターボート選手権競走を開催	50. 9. 29	尼崎子ども会絵画展を開催（毎年実施）
42. 12. 2	当競艇事業関係物故者合同慰霊祭を水光ビルで執行	51. 7. 23	駐日英国大使館付武官、尼崎競艇場を見学
43. 1. 28	競走会従業員及び家族懇談会開催	51. 12. 22	B&G特別協賛競走初開催（尼崎市営第10回1節2日目）
43. 8. 22	尼崎市営開催から役員、従業員らファンに感謝の朝礼実施	52.3.14~15	養護及び心身障害者施設15ヵ所慰問
44.3.15~20	尼崎競艇場施設改善特別競走を開催	52. 6. 25	少年ヨット教室開講
44. 4. 19	競走会尼崎市、ガイド協会、西警察・消防署合同警備訓練実施	53. 4. 4	尼崎競艇場全面トータ化による総合訓練を行う
45. 7. 18	尼崎競艇ファンの本栖研修所参観を実施	53. 6. 7	宇宙博近畿地区後援推進会議開く
45. 8. 5	兵庫県支部所属選手及び家族との懇談会を開催	54. 3. 28	尼崎競艇場ファンモニター懇談会を開催
		54. 6. 10	尼崎市スポーツ少年団の集いを開催
		55. 3. 1	尼崎競艇場施設改善記念特別競走を開催
		56. 10. 1	競走会創立30周年記念式典を挙げる
		56. 12. 20	社団法人兵庫県モーターボート競走会`30年の歩み、発刊
		57. 3. 20	向井繁人会長、病のため死去
		57. 6. 9	本岡芳一氏が会長に就任（神船監第235号認可）

岡山県競走会

競輪かモーターボート競走か―財源求めて

モーターボート競走法の国会審議が続けられていた昭和26年6月頃、岡山市の佐々木多吉氏（初代専務理事）は、笹川良一氏の門下生である大阪の友人葛西嘉代一氏から、競艇の将来についての話を聞く。氏は早速岡山市に横山市長を訪ねその話をするが、競輪誘致に力を入れていた同市長は乗り気でなく、ために、これを児島市選出の岡村貞一県会議員に相談する。

岡村氏は佐々木氏と共に葛西氏と会って、法案通過の見通しや競走会の設立、競走場の選定などについての具体的な説明を聞き、のちに中塚児島市長、中村助役を訪ねて、競艇開催についての検討を依頼。さらに下津井電鉄永山一己社長（歴代相談役）に、競走会設立の協力方を依頼した。

競走法が公布されてのちの7月はじめ、永山氏は岡村、

佐々木氏と共に中塚市長、中村助役を大室海水浴場に招いて、市の財政危機打開のためモーターボート競走にその財源を求めてはとの話合いを行う。難しいとする市側の見解もあったが、結果的には指定都市への申請をする。方向で意見の一致をみたのであった。

次に競走会の設立については、佐々木氏宅に仮事務所を置き、その早期設立へ向って準備を開始した。

同じ頃、玉野市でも競走会の設立を考え競走場を誘致すべく陳情を重ねていたが、話合いの末佐々木、永山両氏のラインでいくとの了承を得ることができ、また、ギャブルを好まない三木知事の説得にもようやく成果をみる。

こうして昭和26年9月15日、知事の副申書を添えた設立申請書を提出。同年10月19日に運輸大臣より認可があり、11月2日には会員総数29名で第1回設立総会を開催した。



▲競走会事務所（昭和31年当時）



▲競走会事務所（昭和57年）

“決定”から“現地視察”へ逆戻り

児島市ではこの事業について、産業課長の井口勲氏(のち専務理事)を中心におき研究を進めていたが、昭和26年9月はじめ、施行権指定都市の申請を提出する。しかし、これに先立ちすでに玉野市から同申請がなされていたため、結局は競願というかたちとなり、事態は難航する。

このため永山氏、岡村県議、中村助役、朝明和吉市議、(初代専務理事)らは上京して運輸省、自治省、そして三木武吉老、星島二郎氏、岡田忠彦氏を訪問するなどして陳情を繰り返すのである。こうした努力が実を結んで、一応児島市へと見通しがついたかに見えた頃、またしても玉野市から猛然と巻き返しがあって、ついに運輸省の「現地を視察して決定」との方向にあと戻りを余儀なくされてしまう。

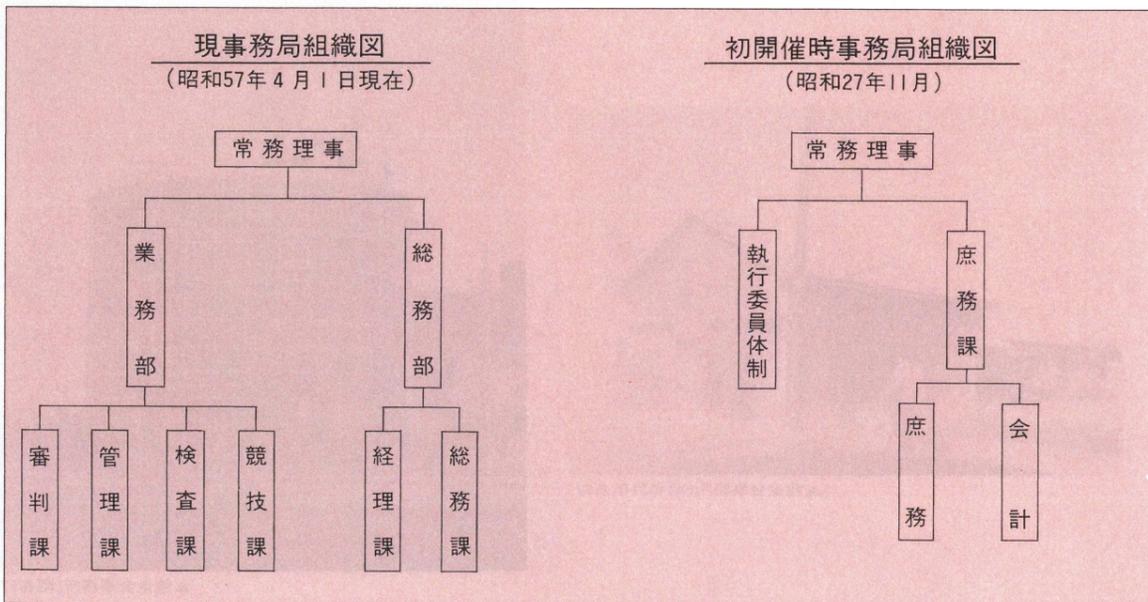
この調査団の視察に際しては、輸送関係の面で国鉄宇野線を有する玉野市のほうが優れているなど、児島市側は必

ずしも樂觀できない状況にあったが、競走会永山相談役の「輸送関係は、電車を5分間隔で運転しそれでおお足りないとすればバス輸送も計画する」との主張によって、これは両市同資格という段階にまで進む。

また、近畿海運局で公聴会が開かれ、関係者列席の中で両市が自市大願の必然性を強調するなどの一幕もあった。

しかし、直接の所管庁である中国海運局玉野支局長が、すでに相当の競輪収益を上げている玉野市ということからみて、どちらか一つを選ぶとすれば児島市を、との見解をもたれていたこと、さらには全国モーターボート競走会連合会の力添えがあったことにより、申請後8ヵ月を経た昭和27年4月26日、ついに児島市へ施行都市としての正式指名がもたらされるのである。

そして同年11月22日、児島競艇の最初のチェッカー旗が力強く振りおろされた。



●歴代会長

代	会長名	任期	代	会長名	任期
初	安藤 健一	26. 11～28. 12	4	前島 頼三	45. 5～49. 6
	 〔略歴〕 松葉合資会社代表者 岡山商工会議所常議員理事			 〔略歴〕 倉敷市監査委員 三冠酒造株式会社社長	
2	高原 碧山	28. 12～35. 5	5	黒瀬 左膳	49. 6～51. 11
	 〔略歴〕 味野綿業株式会社社長 味野タクシー株式会社社長			 〔略歴〕 岡山商工会議所副会頭 岡山日産プリンス株式会社社長	
3	橋本 末治	35. 5～45. 5	6	洲脇 勝太郎	51. 12～現在
	 〔略歴〕 児島商工会議所会頭 岡山県被服工業組合会長			 〔略歴〕 味野塩業組合理事長 児島商工会議所副会頭	

●歴代役員

代	副会長名	任 期
初	西山 安雄	26. 11~28. 12
//	岡村 貞一	26. 11~33. 5
2	洲 脇 勝太郎	28. 12~30. 12
3	橋本 末治	30. 12~35. 5
4	難波 繁夫	35. 5~43. 10
5	西山 保	45. 5~現在
代	専務理事名	任 期
初	佐々木 多吉	26. 11~35. 5
2	三宅 和光	42. 5~43. 10
3	井口 勲	45. 5~49. 6
4	白川 重志	49. 6~現在

●競走会構成員数推移表

項目	年度	初開 催時	30	35	40	45	50	55	57
会 員		29	34	32	29	29	35	39	44
役 員 (常勤、非常勤)		16	17	13	13	11	12	11	12
職 員 (含、嘱託)		11	18	16	13	16	18	19	18
臨時従業員 (アルバイト)		35	35	34	37	30	27	26	28
登録 審判員		20	20	20	20	5	0	0	0
公認登録検査員		1	5	4	7	10	14	14	12
		0	2	2	4	6	9	10	8

(注)各年度とも4月1日現在の集計、但し57年度は当表作成時(57年8月現在)



スタンド全景(昭和57年)

年 表

年月日	事 柄	年月日	事 柄
26. 9	岡山県モーターボート競走会設立申請	44. 1	防波堤完成
26. 10	岡山県モーターボート競走会設立認可	44. 5	武道同好会結成
26. 11	創立総会初代会長 安藤健一	44. 9	万国博覧会協賛レース開催
27. 4	児島市、福田町施行都市に指定	45. 5	前島頼三氏会長に就任
27. 10	競走会事務所を岡山から児島阿津に移転	46. 11	競走会創立20周年感謝の集い実施
27. 11	児島競艇初開催、執行委員長 中塚元太郎	47. 11	開設20周年記念競走開催
28. 1	登録302号西塔選手殉職	48. 2	小型船舶操縦士免許講習所開講
28. 12	高原碧山氏会長に就任	48. 4	1日10レースに削減
29. 8	第1回模型モーターボート大会開催	48. 9	沖繩海洋博覧会協賛レース開催
30. 5	第1回地区対抗競走開催、関東地区優勝	48. 12	備南競艇事業組合施行組合に指定
31. 4	競走会事務所児島味野3650へ移転	49. 6	黒瀬左膳氏会長に就任
31. 7	日本水上スキー連盟岡山県支部設立	49. 9	小豆島タイムラリー大会開催
32. 12	児島ボート会館3階建児島小川に建設着手	49. 10	岡山県水上スキー大会開催
33. 6	児島ボート会館落成(事務所及び選手宿舎)	50. 1	第1回岡山県選手権大会開催
34. 6	初代安藤会長逝去	50. 6	備南競艇事業組合12日の枠内で1日開催
35. 5	橋本末治氏会長に就任	50. 7	ミニヨット教室開講
35. 11	二重針大時計採用	50. 10	入場門及び競技棟改築完成
37. 7	第一回ゴムボート大会開催	51. 11	黒瀬左膳会長逝去
37. 11	開設10周年記念競走開催	51. 12	洲脇勝太郎氏会長に就任
38. 3	競走会課税対象となる	52. 4	岡山県モーターボート連盟結成
39. 4	競走場全面改築工事着手	53. 4	BG財団協賛特別競走開催
40. 3	登録910号和泉選手殉職	53. 7	第1回競走場開放子ども大会開催
40. 11	第一期スタンド工事完成	53. 11	発走用大時計12秒針採用
42. 2	倉敷市、児島市、玉島市合併、倉敷市となる。	54. 7	新スタンド完成、投票方式ユニット制採用
42. 9	第二期スタンド工事完成	54. 9	施設改善特別競走開催
42. 10	施設改善特別競走実施	55. 8	宇高連絡船、船上子ども研修会開催
43. 1	児島ボート会館7階建に増築工事着手	56. 3	第16回鳳凰賞競走開催
43. 8	児島ボート会館(現ボートビル)増築完成	56. 10	競走会創立30周年記念武道館落成
43. 9	児島競艇騒擾起こる	56. 11	競走会創立30周年記念式典実施
43. 11	16周年競走優勝日荒天中止騒擾起こる	57. 9	競走会創立30周年記念競走開催

広島県競走会

誕生までの長い日々

モーターボート競走法が公布されるや、笹川良一氏らと共にこれに努力してきた岩田幸雄氏(広島県競走会前会長)は、広島県下にも競走実現の推進母体である競走会を創立すべく行動を開始する。しかし、当時県下ではすでに、衆議院議員宮原幸三郎氏の指導のもと、山中県議会副議長を中心とした設立準備の動きがあった。

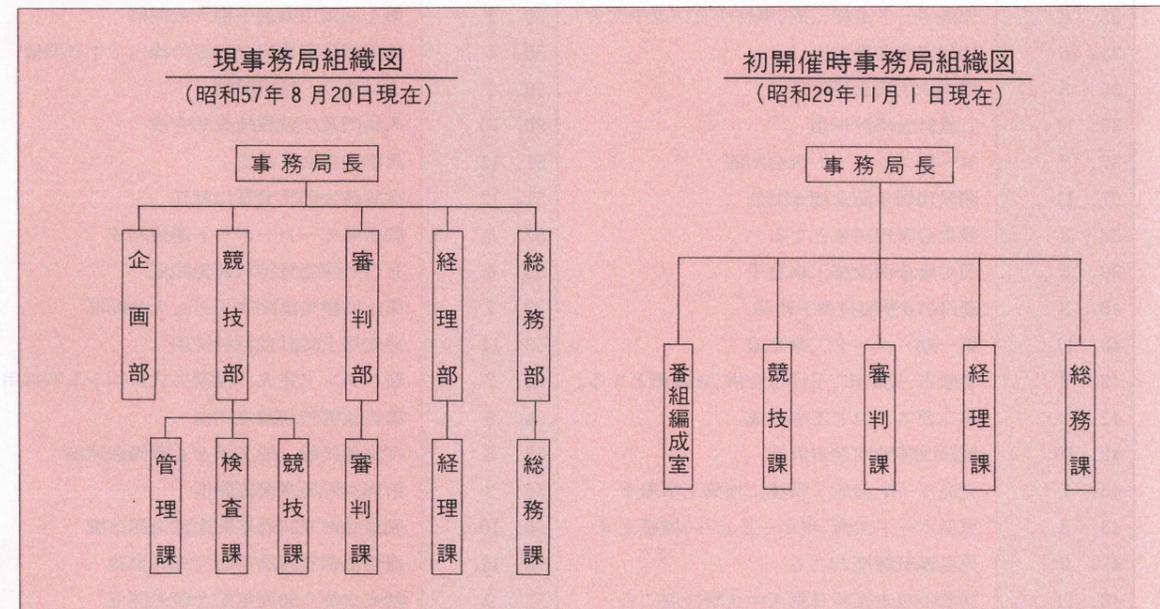
東京にあって岩田氏は、これらの成りゆきを見守る一方で、広島の自邸に寄寓中の旧友村松道司氏を督励して、その設立準備をたすけ、自らもまた施行手続等万般の準備を進めるのであった。

かくして昭和27年4月22日、当時の東洋パルプ副社長水野勝弥氏を会長、山中県会副議長を副会長とする広島県モ

ーターボート競走会の設立が認可された。しかし、その後施行自治体も決まらず、競走場設置の問題も手つかずの状況が続き、その上経済基盤も、また政治的動きも極めて弱いとあって、競走会は事実上開店休業となるのである。

岩田氏は、これらの報告を村松氏より受け、憂いを深めていたその折も折、当局並びに事務局幹部からの強い要請を再三にわたってうけ遂いに第一線出馬の決意をした。

ついに、これに応じた岩田氏は、昭和27年帰郷するやまずその会長に元中国電力社長鈴木貫一氏を迎え、自らも多額の資材を投じ副会長として陣頭指揮をとったので、ようやく競走会は軌道に乗り、実質的に誕生の日を迎えることとなった。



厳しい世論と候補地の選定

競走会が動きはじめるとその業務はまさに山積されていた。競走会本来の業務準備に加えて競走場候補地の探査、選定。施行自治体の指導調査、施設やオーナーの問題等々急を要する仕事ばかりである。

まず施行者の指定については、競走場の事前審査や競走会の副申が必要であったから、県下の各候補地を踏査し、その条件を整備していかなければならない。しかしこの作業は厳しい世論もあって容易ではなく、候補地自体も次々と脱落していった。

早くから誘致を始めた尾道市は、推進母体が説得力を欠き脱落。熾烈な運動を展開してきた安芸郡坂町は、競走会の熱心な趣旨説明や、監督官庁の手厚い指導にもかかわらず、町当局や議会の賛否が2転3転し、ついには「否決」の浮き目を見てしまう。残った広島市と宮島町が競合したが

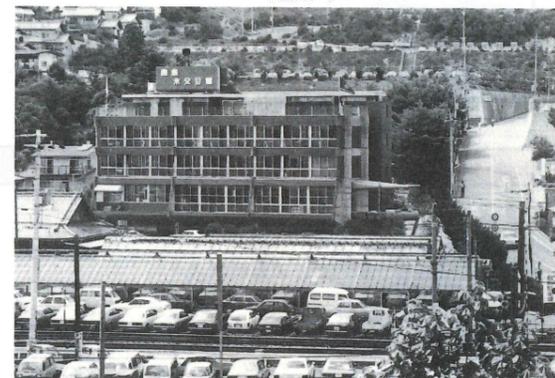
広島市には競輪防衛の腹案もあり、表面上は原爆復興という錦のみ旗をかざして、相当の熱意を示したものの世論の反対も強く、当時の市長が決断するにはなお時間を要すると見られた。

そこで岩田氏は、笹川氏の現地視察の結果ともあいまって、宮島口案に決断した。かくて競走場は宮島口(現在地)、施行者は宮島、大野の2町と、のちに合併して市制をしく大竹、小方、玖波の3町となり、議会議決までにはなお迂余曲折もあって、競走会の啓蒙活動はその後も続くのであ

さらに、財政窮乏の上競艇事業に危惧を抱く自治体には膨大な設備費を投ずる資力も気力もなかったから、この面でも競走会の苦闘が続いたが、競艇報国の堅い信念に燃える岩田幸雄前会長の活躍により漸くにして、昭和29年11月1日、宮島競艇は晴れの初開催を迎えることができ、関係者の胸を熱くさせたのであった。



▲選手宿舎(昭和43年まで使用)



▲選手宿舎(昭和57年)

●歴代会長

代	会長名	任期
初	水野勝弥	27. 5 ~ 29. 3
〔略歴〕 東洋パルプ(株)常務取締役		
2	鈴川貫一	29. 3 ~ 30. 5
〔略歴〕 中国電力(株)社長、広島商工会議所 会頭		
3	岩田幸雄	30. 5 ~ 51. 6
〔略歴〕 婦人毎日新聞社事業部長、岩田商 会創立社長、外務省、海軍省嘱託、 (株)永和社長		
4	岩田富士夫	51. 6 ~ 現在
〔略歴〕 (株)ピノカ取締役社長		

●歴代役員

代	副会長名	任期
初	山中直彦	27. 5 ~ 29. 3
//	御影池辰雄	27. 5 ~ 33. 1
2	岩田幸雄	29. 3 ~ 30. 5
3	角和雄	30. 5 ~ 41. 5
4	石田乙五郎	41. 5 ~ 46. 5
5	岩田富士夫	46. 5 ~ 51. 6
6	荒二井竹三郎	51. 6 ~ 54. 5
7	前田正之	57. 5 ~ 現在
代	理事長名	任期
初	角和雄	29. 3 ~ 30. 5
代	専務理事名	任期
初	岩田富士夫	34. 5 ~ 46. 5
2	荒二井竹三郎	46. 5 ~ 51. 6
3	岩田行史	51. 6 ~ 現在

●競走会構成員数推移表

項目	年度 初開 催時	30	35	40	45	50	55	57
		会 員	45	47	43	40	40	40
役 員 (常勤、非常勤)	16	18	15	14	13	14	14	12
職 員 (含、嘱託)	33	36	20	24	19	27	27	20
臨時従業員 (含アルバイト)	45	33	14	18	20	24	24	23
登録審判員	1	2	6	6	7	9	13	13
公認登録検査員	4	5	5	5	7	6	13	11

(注)各年度とも4月1日現在の集計、但し57年度は当表作成時(57年8月現在)

年 表

年月日	事 柄	年月日	事 柄
27. 4. 6	海運局担当官と共に沢田事務局長大村視察	43. 1. 6	家族ぐるみ懇談、善導運動
27. 4. 22	社団法人広島県モーターボート競走会設立	43. 5. 18	施設買取経営一元化と共にレース再開
28. 3. 25	太田博理事を技術研究のため徳山へ派遣	44. 6. 2	小型船舶講習会実施
28. 4. 21	瀬戸内海モーターボートセンター(株)設立	44. 9. 21	海洋少年団に指揮艇など寄贈
29. 5. 26	笹川連合会々長最終事前調査に来広	45. 5. 13	広島県選手の研修会を行なう
29. 11. 1	宮島競艇初開催を迎える	45. 6. 6	大里総務課長海外視察団に参加出発
30. 5. 31	第4回総会において岩田幸雄会長選任	46. 3. 15	大里総務課長連合会へ出向
30. 7. 18	広島～宮島間長距離レース実施	46. 5. 17	岩田富士夫副会長就任
31. 8. 23	事務所を国泰寺に移転	47. 4. 22	創立20周年記念式典と会史発行
31. 12. 30	養護施設児童招待映画会を開催恒例行事	47. 7. 21	台風並びに豪雨被災者に見舞金を贈る
32. 4. 10	義宮殿下来広観迎送行事	48. 7. 21	笹川杯争奪競走(笹川氏の前昇)企画実施
32. 10. 9	ネール印度首相、一茶苑で岩田会長と懇談	48. 11. 10	労使紛争無期限ストに入り休催
33. 5. 11	三滝山多宝塔奉納青少年剣道大会開催	49. 5. 23	紛争解決、レース再開10レース制実施
34. 6. 13	連合会第1回連絡会議を一茶苑にて開催	49. 6. 13	笹川杯をファン謝恩岩田杯レースとして実施
34. 6. 14	賀陽会長を迎え第3回東西大学対抗MB大会	50. 6. 29	第1回全日本アマMB選手権大会
35. 7. 17	第1回宮島一周ヨットレース大会開催	50. 9. 28	第1回広島県水上スキー大会開催
35. 9. 19	二重針大時計採用	51. 6. 17	岩田幸雄会長退任岩田富士夫会長就任
36. 8. 12	第7回全日本MB記念特別競走実施	51. 7	第1回潜水教室、船舶模型コンクール
36. 10. 24	中四国大学ヨット新人争覇戦	52. 3. 31	宮島口新事務所に移転
37. 4. 20	創立10周年記念式、会史発行	52. 4. 22	創立25周年記念式典挙行
37. 7. 3	水難救援奉仕隊結成活躍	53. 3. 20	発送用ビット改善(FRP)
38. 5. 15	広大MB部にボート、エンジンなど寄贈	53. 12. 1	選手待機室、観戦室竣工
38. 8. 1	笹川連合会々長少年少女ゴムボート大会臨席	54. 3. 31	防波堤築堤工事完成
39. 5. 26	連合会競技運営委員会を宮島に於て開く	54. 5. 22	荒二井副会長退任
39. 10. 28	宮島競艇開設10周年特別競走	55. 8. 3	松江だんだん祭協賛海上教室開催
40. 8. 11	松江市で少年少女ゴムボート大会実施	55. 11. 20	吉岡競技部長の競走会葬執行
40. 9. 16	岩田幸雄会長欧州類似競技視察に出発	56. 5. 27	第8回中四国競艇関係者武道大会を大野町
41. 1. 26	角副会長退任、石田乙五郎氏就任	56. 5. 29	荒二井相談役の競走会葬執行
42. 4. 22	創立15周年記念式典と記念史発行	57. 4. 22	創立30周年記念式典と30年史編さん
42. 9. 15	ボーイスカウトゴムボート大会	57. 4. 25	第20回三滝山多宝塔奉納剣道記念大会

山口県競走会

競願者一堂に会して話し合い

昭和26年春頃、モーターボート競走法案が国会に上程されるとの情報が、山口県下の一部の人々の耳に入った。その後この法案の審議は紆余曲折、難航していると伝えられるが、県下におけるモーターボート競走会設立への動きは日を経るにしたがって活発化していった。

これら競走会設立の動きの中心は商工会議所、あるいは観光連盟等に名を連ねる有志諸氏で、各派に別れての運動がそれぞれに展開されていた。ところが競走会設立認可申請には県知事の副申を必要としたため、各グループの代表はこれまた各々に、時の田中知事に対しその申請を行ったのである。中央ではすでに競走法が国会を通過していた。

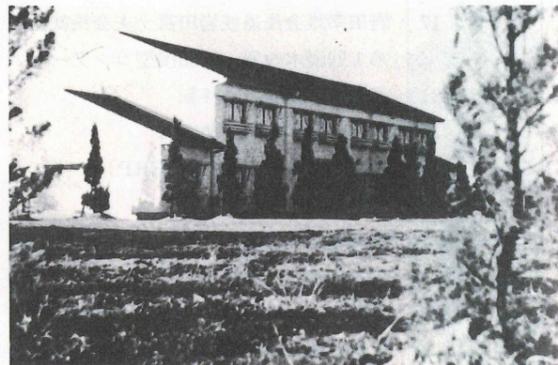
副申申請を各派より受けた県側は、「1県1競走会」という法の制約からこれらの扱いに困惑し、当時の県観光協会

会長、商工会議所連合会長、商工部長らに仲介を依頼する。

かくしてようやく、山口県モーターボート競走会設立統一協議会を開催する運びとなり、昭和26年10月11日、山口県商工会議所に競願者の参集を求め、前述3氏のあっせん及び関係者の努力の結果、一本のラインにまとめることができたのであった。

続いて統一協議会は、競走会会長を東長丸氏に、他の役員は認可後会長が決定する。などの決議をし、2日後の10月13日には東氏を設立委員長とする統一競走会設立準備会を発足させ、直ちに知事の副申を添えた設立認可申請書を九州海運局経由で運輸大臣へと提出した。

昭和26年11月14日、関係者待望の認可があり、ここに社団法人山口県モーターボート競走会は産声をあげる。事務所は宇部市大字中宇部39番地の1に設けられた。



▲選手宿舎(昭和31年当時)



▲競走会事務所(昭和57年)

連携協力が見事に実を結んで

競走場の選定に関しては、当時県下の主要都市は未だ戦災の痛ましい傷あとを随所に残し、財政的裏付けにも困却していたから、モーターボート競走開催については各地共にその実現を希望していた。また、東西に長く伸びる陸地と、南北に海岸線を有する地形から、候補地も数多くあがり、なかでも特に周防部では光市、徳山市が、長門部では宇部市、下関市が有力であった。

やがて周防部では、徳山市内にある元陸軍使用の港湾が水面及び周囲平地の状況からして最適地であるとの結論に達し、直ちに早期実現へ向って準備が開始された。市当局及び市議会でも、競走施行については昭和26年初秋に審議、これを可決して、競走場建設は着々と進められていき、昭和28年8月28日には喜びの初開催を迎えるのである。

一方長門部では下関市の動きがより活発で、法案審議の

前後から市内有志による競走場設置の画策があり、法制定の直後からは一段と激しくなっていた。折しもモーターボート競走法制定によるその説明会が、地元九州海運局で行われ、関係者はますますその意志を固めたのであった。

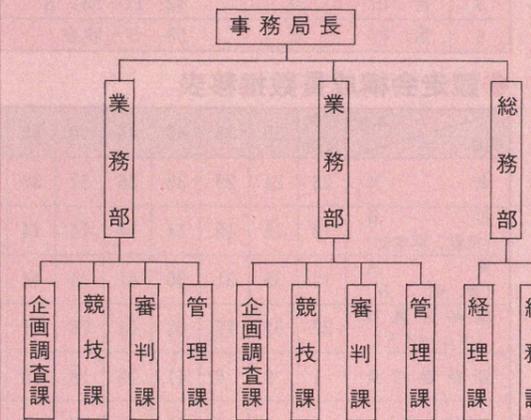
これらの動きと対応して競走会も関係者との懇談を重ね、他候補地を含めてその選定に拍車をかけた。また、監督官庁並びに連合会をはじめとする中央関係者の下見も数度にわたって行われた。

その結果、当時の運輸省第4港湾下関工事事務所長と下関市長の推薦もあって、現下関競艇場がその予定地として決定をみる。

こうした関係者の連携協力によって、モーターボート競走実現の夢は日一日と速度を早め、昭和29年10月22日ついに初開催の運びに至る。全国でも数少ない1競走会2競走場担当を果たすことができたのである。

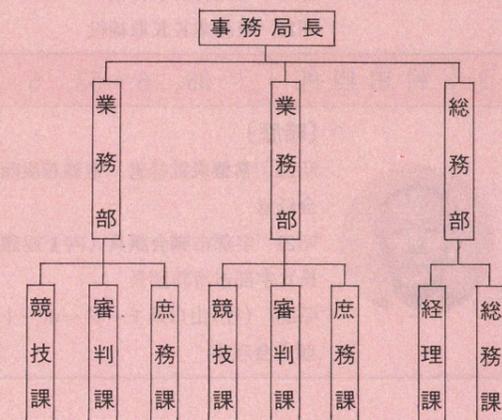
現事務局組織図

(昭和57年10月1日現在)



初開催時事務局組織図

(昭和35年10月1日)



●歴代会長

代	会長名	任期
初	東長丸	26. 11~33. 3
<p>〔略歴〕 土木建築、港湾浚渫、鉄工工業、陸海運送業創業 昭25 島根臨海工業KK取締役、東長海運KK取締役社長、東工業KK取締役社長</p>		
2	東健治	33. 3~35. 6
<p>〔略歴〕 昭25 島根臨海工業KK取締役社長、東長海運KK、東工業KK取締役 昭27 山口自動車販売KK、広島自動車販売KK取締役 昭29 東産業KK取締役</p>		
3	村田四郎	35. 6~53. 5
<p>〔略歴〕 昭22 常盤炭鉱経営、常盤石炭商会経営 昭23 宇部市議会議員(内1期議長)、宇部市消防団長 昭26 (社)山口県モーターボート競走会理事</p>		

代	会長名	任期
4	吉田進	53. 5~現在
<p>〔略歴〕 昭25 林兼造船所勤務 昭29 (社)山口県モーターボート競走会下関競艇場競技委員長 昭35 (社)山口県モーターボート競走会常務理事 昭42 (社)山口県モーターボート競走会専務理事 昭53 (社)山口県モーターボート競走会副会長</p>		

●歴代役員

代	副会長名	任期
初	林定治	35. 8~37. 4
2	吉田進	53. 1~53. 5
代	専務理事名	任期
初	林定治	33. 7~35. 6
2	河野良雄	35. 8~42. 11
3	吉田進	42. 11~53. 5
4	重村荘	53. 5~現在

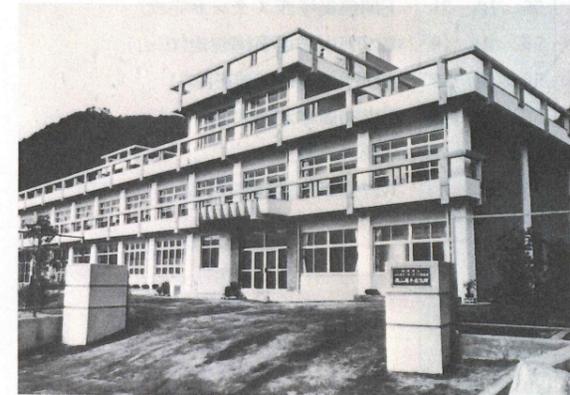
●競走会構成員数推移表

項目	年度	初開催時	年度						
			30	35	40	45	50	55	57
会 員		22	24	29	35	36	37	38	37
役 員 (常勤、非常勤)		12	15	15	14	14	14	14	14
職 員 (含、嘱託)		12	35	31	36	41	44	44	41
臨時従業員 (アルバイト)		37	62	72	53	64	75	71	71
登録審判員		1	5	6	11	16	18	18	15
公認登録検査員		0	2	4	11	18	17	17	16

(注)各年度とも4月1日現在の集計、但し57年度は当表作成時(57年8月現在)



▲下関選手宿舎(昭和57年)



▲徳山選手宿舎(昭和57年)

年 事 表

年月日	事 柄
26. 11. 14	社団法人山口県モーターボート競走会設立認可
26. 11. 14	事務所を宇部市大字中宇部39番地1に設ける
26. 11. 14	東長丸氏初代会長に就任
28. 8. 28	徳山競艇場開設
29. 8. 22	全国模型モーターボート競技会(徳山)
29. 10. 22	下関競艇場開設
29. 11. 26	第2回全国モーターボート選手権競走(徳山)
30. 9. 27	台風22号来襲、下関・徳山両競走場共に甚大な被害を受けたので両市にたいし、各々100万円を寄附する
31. 4. 10	下関選手宿舎完成
31. 6. 1	第2回全国地区対抗競走オール8隻立レースで開催(下関)
31. 6. 18	事務所を宇部市春日町1-1-3に移転
32. 2. 10	徳山選手宿舎完成
33. 3. 24	東健治氏2代目会長に就任
33. 9. 1	下関競艇場騒擾事故発生
33. 9. 29	事務所新築完工
35. 6. 15	村田四郎氏3代目会長に就任
36. 5. 24	日本郷友連盟競艇支部山口県分会創立
36. 11. 7	競走会創立10周年記念式典
37. 3. 20	下関労働会館でモーターボート安全講習会
37. 4. 25	山口県モーターボート競走会共済会発足
37. 5. 3	第1回国際少年モーターボート大会(下関)
37. 7. 20	山口県学生モーターボート連盟結成
38. 9. 15	第18回国民体育大会漕艇競技応援
38. 9. 15	模擬レース大分県(国東町)へ進出

年 表			
年 月 日	事 柄	年 月 日	事 柄
38. 9. 19	第9回モーターボート記念競走(下関)	49. 3. 19	職員社宅完成
39.	下関・光市・菊川町で少年少女ゴムボート大会	50. 3. 20	第10回鳳凰賞競走(下関)
39.	移動図書運搬車を宇部市に寄贈	50. 8. 28	第21回モーターボート記念競走(下関)
40. 4. 8	徳山競艇施設改善記念競走	50. 9. 14	B・G徳山競走場海洋クラブ発足
40. 11. 6	下関競艇場新スタンド工事完成	51. 6. 17	緩消器付消波装置新設(徳山)
41. 6. 16	下関競艇施設改善記念競走	51. 8. 26	施設改善記念競走(下関)
41. 8. 13	光市営競艇開催	52. 3. 3	第12回鳳凰賞競走(下関)
41.	徳山市・下関市・宇部市内の学校にプール建設資金を寄附	52. 6. 8	第4回中・四国地区競艇関係者武道大会(徳山)
42. 2. 17	美祢市ほか1市2町競艇組合開催	53. 2. 15	徳山競艇場が、施行者協議会より、昭和51年度返還金最少努力賞を受賞
42. 12. 1	内規改訂委員会発足	53. 5. 23	吉田進氏4代目会長に就任
43. 6. 28	水上スキー講習会(下関)	53. 11. 10	12秒針大時計による競走開始
44. 2. 22	徳山選手宿泊所竣工式	55. 6. 4	徳山競艇場東スタンド竣工式
44. 4. 11	万国博協賛レース(下関)	55. 7. 31	施設改善記念競走(徳山)
44. 8. 4	武道同好会発足	55. 12. 21	下関競艇場西スタンド完成
44. 9. 10	万国博協賛レース(徳山)	56. 2. 19	第24回中国選手権競走(徳山)
45. 6. 4	徳山競艇場防波堤竣工	56. 5. 29	施設改善記念競走(下関)
45. 6. 22	下関選手宿泊所竣工式	56. 11. 14	創立30周年記念式典
45. 7. 30	第16回モーターボート記念競走(下関)	57. 3. 3	孝養の像建立
46. 3. 13	吉田専務理事海外視察	57. 3. 4	第17回鳳凰賞競走(下関)
46. 5. 27	第17回全国地区対抗競走(下関)		
46. 11. 18	創立20周年記念式典		
47. 9. 3	第16回全日本学生モーターボート選手権大会(下関)		
47. 12. 20	1マーク側出端部を切取り、変則コースを是正(徳山)		
48. 2. 1	第16回中国地区選手権競走(徳山)		
48. 8. 30	第19回モーターボート記念競走(下関)		
49. 1. 10	1日10レース制に		
49. 2. 7	施設改善記念競走(徳山)		

徳島県競走会

鳴門観潮客の増加に伴う「健全娯楽」を期待して

モーターボート競走法が公布された昭和26年、8月に入る頃から徳島県でも競走会設立の議が起り、海運局のご指導を得てたびたび懇談会、準備会が開催されていた。

そして同年10月24日、四国海運局徳島支局において有志世話人諸氏による話し合いがもたれ、設立要領、資本の予定額、出資金額、設立発起人を徳島、鳴門、小松島の三市長、及び三市の商工会議所会頭、県並びに郡町村会長、沿岸町村長、郡市町村の議会関係、海事振興会役員等の総勢40名に依頼し発起人会を11月中旬に開催すること等を決定する。

昭和26年11月27日、徳島市昭和町の自治会館で開催された設立発起人会では、22名の出席者を集めて定款の審議、創

立委員長の決定(互選の結果満場一致で県海事振興連合会会長上崎龍次郎氏を推選)がされ、設立準備の体制が整えられた。なお、資本金の決定、引受口数の割当に際しては、市町村長が競走会の設立発起人または会員になることの可否に疑義があるとして、徳島県知事がこれを照会したが、同年10月2日付で運輸省船舶局長より回答があったため、会員募集の締切は翌27年1月31日まで、創立総会は同年2月中旬自治会館において開催と予定した。

そして、知事の副申を添えた設立認可申請書は昭和27年2月1日付をもって運輸大臣に提出される。続く2月20日には、市内自治会館で設立総会が開催され、定款審議、資本総額、会員数(108名)、借入金最高限度額の決定、創立費の承認、役員を選任等がされた。

かくして同年3月12日、徳島県モーターボート競走会は運輸大臣からの設立認可を得、正式に発足するのである。



▲競走会事務所(昭和57年)



▲選手宿舎(昭和57年)

開催するまでは給料も返上

事務所を徳島市中洲町2丁目4番地において競走会が発したが、一方で鳴門市における競走場の建設は、諸々の事情で一時立ち消えの状態になるなど、はかばかしくなかった。しかし、昭和27年10月に至り鳴門市議会、理事等の努力が実って、翌28年4月の開催が決定される。そこで競走会もこれに呼応し、まず審判員の養成が必要と数名を推選し講習会を受けさせ、受験させるも全員実技で失格。ついには笹川良一氏に相談し、審判員を派遣してもらう約束をとりつけるなどの一幕もあったという。

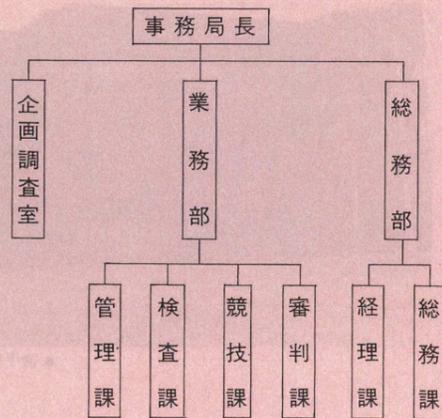
昭和28年1月15日、設立準備時より世話人代表としても活躍された細田文明常務理事が急逝され、4月に控えた初開催が憂慮される事態となる。急拠、後任に鳴門市議会議員で海事経験者でもある武久一氏が選任されたが、当時の競走会の情勢は、会員数108名のうち42名もの会費未納者

を抱えており、職員第1号の山本義一氏が連日その督促に会員宅を訪門するという有様であった。もちろん職員の給料についても、開催するまでは支払えないため、これを承知であれば採用という状況である。

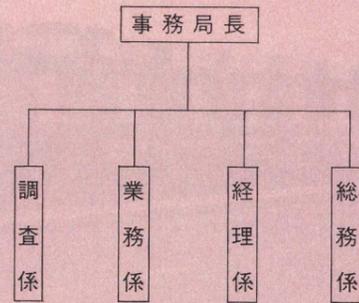
しかし、競走会では競走場建設と平行して競技、審判員を養成する必要にせまられており、新聞広告で募集し選んだ者を尾崎・児島競走場へ実務研修生として派遣。また同じく補助員の募集を行い面接試験をするも予定数に満たず苦勞するなど、必死の努力を重ねていた。

選手宿舍の準備を終え、燃料の確保、競技、審判のための器材購入など全部の体制がようやく整えられたのは初開催を目の前にした4月20日頃であった。そしてこの日は、連合会からの実務指導諸氏を迎えて実務者訓練を開始。22日には模擬レース、23日に登録検査を受けて、ついに24日から3日間の初開催へと漕ぎつけるのである。

現事務局組織図
(昭和57年9月1日現在)



初開催時事務局組織図
(昭和28年4月)



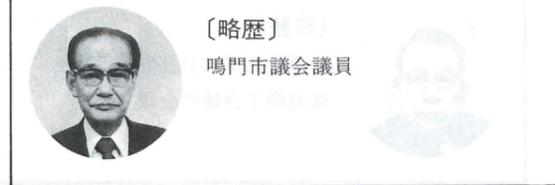
●歴代会長

代	会長名	任期
初	上崎龍次郎	27. 2 ~ 30. 12
	 [略歴] 阿波国共同汽船株式会社代表取締役、四国放送株式会社社長、徳島県地方労働委員会々長	
2	武田 諒一	31. 7 ~ 33. 3
	 [略歴] 橘町会議員 県議会議員	
3	尾崎豊太郎	33. 4 ~ 37. 9
	 [略歴] 小松島市議会議員 県議会議員	
4	中林幸吉	37. 12 ~ 39. 5
	 [略歴] 徳島造船産業株式会社代表取締役	

代	会長名	任期
5	柏原大五郎	39. 6 ~ 40. 1
	 [略歴] 柏原捻鋸株式会社取締役社長 徳島商工会議所会頭	
6・8	櫻木忠顕	40.6 ~ 41.6・43.7 ~ 47.6
	 [略歴] 鳴門塩業組合理事長 鳴門市議会議員	
7	酒井 頤	41. 7 ~ 43. 6
	 [略歴] 徳島県各課長 小松島市長	
9・11	岸 清光	47.7 ~ 49.6・57.4 ~ 現在
	 [略歴] 鳴門市議会議員	

●歴代会長

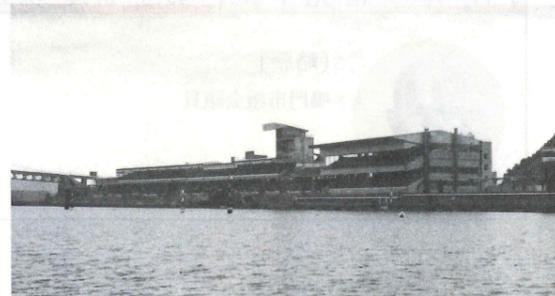
代	会長名	任期
10	田中 要	47. 7 ~ 57. 3



●競走会構成員数推移表

項目	年度 初開催時	年度						
		30	35	40	45	50	55	57
会 員	107	111	109	97	83	78	66	69
役 員 (常勤、非常勤)	25	24	15	13	15	15	15	14
職 員 (含、嘱託)	15	24	21	22	23	24	27	25
臨時従業員 (アルバイト)	47	66	40	35	33	29	28	27
登録審判員	0	4	4	9	9	9	11	11
公認登録検査員	0	3	2	8	9	8	12	12

(注)各年度とも4月1日現在の集計、但し57年度は当表作成時(57年9月現在)



▲スタンド全景(昭和57年)

●歴代役員

代	副会長名	任期
初	長 町 清	27. 2 ~ 28. 6
初・2	武 田 該 一	27. 2 ~ 30. 5
2	齊 藤 平三郎	28. 6 ~ 30. 5
3	尾 崎 豊太郎	30. 6 ~ 32. 5
//	田 淵 清一郎	30. 6 ~ 31. 7
//	田 口 傳 一	31. 7 ~ 32. 2
4	尾 崎 豊太郎	32. 5 ~ 33. 3
//	岩 朝 萬次郎	32. 5 ~ 33. 3
5	武 久 一	33. 4 ~ 35. 5
6・7	米 田 秀 吉	35. 6 ~ 37. 9
7	櫻 木 忠 顕	37. 12 ~ 39. 5
8・9	田 中 要	39. 6 ~ 43. 6
10・11	山 上 利 明	43. 6 ~ 47. 6
12~14	島 田 弥 平	47. 7 ~ 53. 6
15~17	勘 川 哲 明	53. 7 ~ 現在

代	理事長名	任期
初	篠 原弥治兵衛	27. 7 ~ 28. 6
2	長 町 清	28. 6 ~ 29. 8
3・4	武 久 一	30. 6 ~ 33. 3

代	専務理事名	任期
初	芝 野 員 茂	33. 4 ~ 35. 5
2	勘 川 哲 明	35. 6 ~ 41. 6 41. 6 ~ 43. 6
3・5	齊 田 重 雄	47. 6 ~ 現在
4	岸 清 光	43. 6 ~ 47. 6

年 表

年月日	事 柄	年月日	事 柄
26. 6. 18	モーターボート競走法制定	41. 5. 23	大麻、松茂町競艇事業組合第1回開催
26. 11. 27	設立発起人会を開催、事務所徳島市中洲町	41. 6. 22	酒井順会長に就任(7代)
27. 2. 20	設立総会を開催、初代会長上崎龍次郎氏就任	42. 1. 1	大麻町が鳴門市に合併松茂町が単独開催
27. 3. 12	徳島県モーターボート競走会の設立許可	43. 3. 15	波浪対策工事完成による施設改善記念競走
27. 3. 17	鳴門市はモーターボート競走の施行認可	43. 6. 24	櫻木忠顕氏会長に就任(8代)
28. 4. 18	鳴門競艇場工事完成	44. 4. 1	北島町板野町モーターボート競走開催指定
28. 4. 24	開催1日売上2,101,700円入場2881人	44. 8. 3	第1回山の子供招待(一字村片川小学校)
28. 12. 8	横溝選手のフィン脱落し騒擾事件となる	45. 5. 2	笹川良一会長の胸像鳴門公園綱干島に建立
29. 8. 18	台風15号来襲のためスタンド破損	45. 9. 23	鳴門競艇場電光掲示板を新設
30. 7. 31	鳴門海峡でのモーターボート実験	45. 10. 31	試運転中に掃海艇に激突山清選手死亡
30. 8. 17	第1回模型モーターボート競技大会を開催	46. 5. 11	藍住町モーターボート競走開催指定
31. 7. 12	武田該一氏会長に就任(2代)	46. 7. 21	事務所を鳴門市撫養町大桑島宇津岩浜7番地の6に移転する
31. 7. 22	鳴門~丸亀間長距離レースを実施	47. 5. 13	競走会創立20周年記念式典を開催
32. 5. 14	鳴門競艇開設以来の大穴216,520円	47. 6. 29	岸清光氏会長に就任(9代)
33. 3. 26	尾崎豊太郎氏会長に就任(3代)	48. 3. 26	第1回少年剣道錬成大会を開催する
33. 4. 1	事務所を鳴門市撫養町南浜宇東浜2番地の1に移転	48. 9. 15	敬老の日に金婚該当者に第1回記念品贈呈
33. 4. 18	第4回全国地区対抗競艇を開催	49. 6. 25	田中要氏会長に就任(10代)
33. 10. 15	第2回四国地区選手権競走を開催	50. 1. 12	石油危機に対応するため10レース制実施
35. 10. 31	二重針大時計の設置	51. 4. 1	鳴門競艇審判室にVTR設置
36. 4. 1	フライング返還の実施	52. 12. 20	ニチマク株式会社を買収し施設拡張をする
37. 7. 24	鳴門競艇場で小笠原政敏選手死亡	53. 11. 1	改良型大時計(12秒針)を使用
37. 11. 15	中林幸吉氏会長に就任(4代)	53. 12. 7	会員物故者慰霊祭を光徳寺で執行
38. 3. 21	鳴門ボート会館の竣工	54. 3. 2	舟券自動発売装置12台設置
38. 5. 10	鳴門競艇開設10周年記念競走の開催	55. 1. 6	一日売上新記録668,441,400円
38. 9. 19	整備室より出火し艇庫を半焼	55. 6. 11	海洋会館起工式
39. 6. 1	柏原大五郎氏会長に就任(5代)	56. 3. 9	海洋会館落成式
40. 1. 3	舟券1日売上新記録31,523,000円	56. 3. 31	事務所を鳴門市撫養町大桑島宇津岩浜8番地2に移転する
40. 6. 22	櫻木忠顕氏会長に就任(6代)	57. 6. 19	岸清光氏会長に就任(11代)
41. 3. 24	観覧席竣工による施設改善記念競走開催		

香川県競走会

法審議に一喜一憂、暗中模索の各派の動き

昭和25年12月、笹川良一氏より坂出市在住の龍田紅陽画伯宛に、「モーターボート競走の開設を計画しているので同志を募ってもらいたい」との書面が寄せられた。このため龍田氏は多田羅正義、西山弥太郎、坂本明、阿部茂市の諸氏と共に県下全域より同志(坂出派と称した)を募り、競走会設立のための陳情を香川県経済部長大野乾氏に対し続ける。

一方、香川県機帆船組合連合会長浜野正雄氏も、運輸委員長前田郁氏の筋から連絡を受け、米沢多平、佐長熊太郎、横田久(代理矢野淳四郎)氏をはじめ県下の船舶業者が中心(高松派と称した)となつての行動を開始、両派はお互の存在を知らぬまま独自の運動を展開した。しかし、当時は未だ法制化も実現されておらず、まったく暗中模索の状態であつた。

翌26年2月、龍田、多田羅両氏は上阪し笹川氏のご指導を受けるが、なお、会員勧誘に際しては法案通過の見通し、競走の将来性についての責任ある回答などできるはずもなく、会員募集は困難を極めていた。しかし、3月29日の衆議院での法案通過を見て、ようやく前途に一条の光明を見出したのであつた。

会員勧誘もどうやら本格化し、讃岐路にも春が訪れようとする頃、関係者は笹川氏の来県を迎えて新たな活力を与えられる。氏は船神様である金刀比羅宮へ法案通過のお礼とご祈願のため、ご母堂と夫人を伴われて参詣されたのであつた。この折、笹川氏は龍田氏宅に立寄り、改めてご指導、ご激励を賜つた。

意気大いに挙げた関係者らは、競走会設立運動と並行して、施行者となるべき自治体に対する勧誘と競走場探し

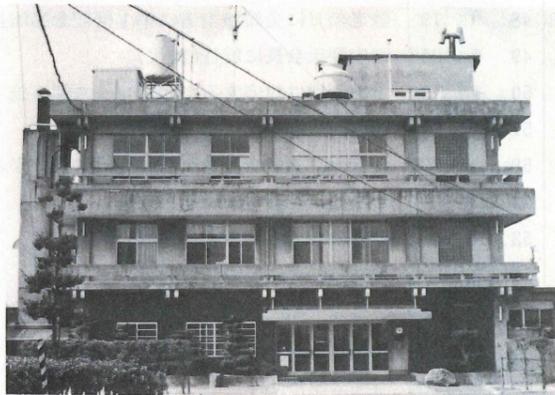
にも東奔西走。5月頃から高松市旭町埋立地、丸亀市港町、坂出市沖、長尾町亀鶴公園、引田町安戸池、満濃池等をその候補地として漸次これらへ働きかける。なかでも高松市は最も有望視されたが、議会内部の事情から断念。また、各候補地からは相次いで問合せが寄せられたが、その頃は競走場設立の法的規格がなく、加えて政治的な配慮もあり笹川氏に依頼して有力候補地である丸亀、満濃池、長尾、安戸池を、矢次運営委員長に視察していただく。

こうして誘致運動が比較的順調に進む一方で、会員勧誘のほうは参議院での審議が残されており、施行者となるべき自治体も未定のため、思うようには進展していなかった。そして、設立に着手してから半年を経過した6月2日、参議院での法案否決を聞き関係者一同落胆にくれる。しかし、希望をつないだ甲斐あつて同月5日、「衆議院で再可決成立」との劇的展開、朗報に接するのである。

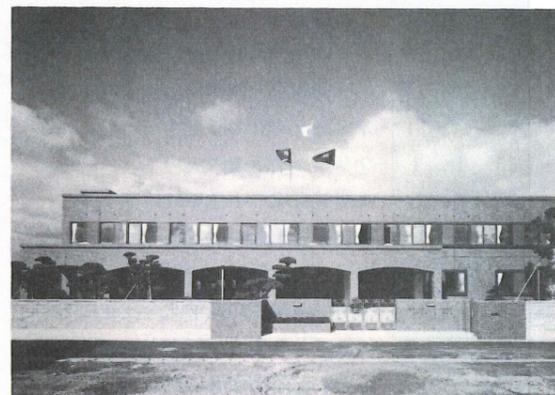
大同団結で一気に設立実現へ

丸亀市は、坂本、阿部両氏の出身地であるところから、かねてより坂出派を代表し、三原市長をはじめ山口、永田両市議に、モーターボート競走の施行方を要請していた。また、この報告を受けた鎮西議長は若山副議長とはかり、税外収入なく財政運営に苦慮している丸亀市を救う道はこの外にないと、市長に対し強くその決意を披瀝し督励したのである。

8月に入ると笹川氏は、一般大衆を啓蒙して機運醸成を図るため、塩飽、坂東両氏をご差遣。両氏は高松、坂出、丸亀及び多度津沖において大型ランナーバウトと、のちに琵琶湖レースで大活躍する飛龍号に乗艇して、観衆の見守る中をデモンストレーションした。飛沫をあげて滑走するモーターボートを初めて見た観衆は、戦後の沈滞した世相も忘れその魅力に興奮したという。

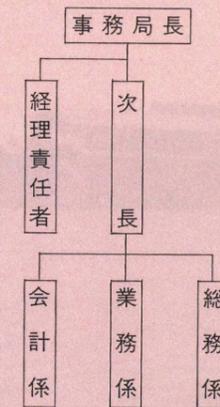


▲競走会事務所(昭和27年)

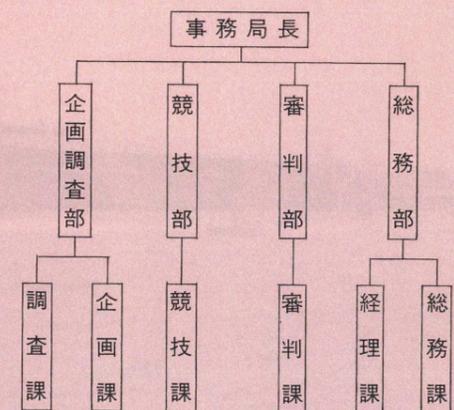


▲選手宿舎(昭和27年)

現事務局組織図 (昭和57年8月1日現在)



初開催時事務局組織図 (昭和27年10月30日)

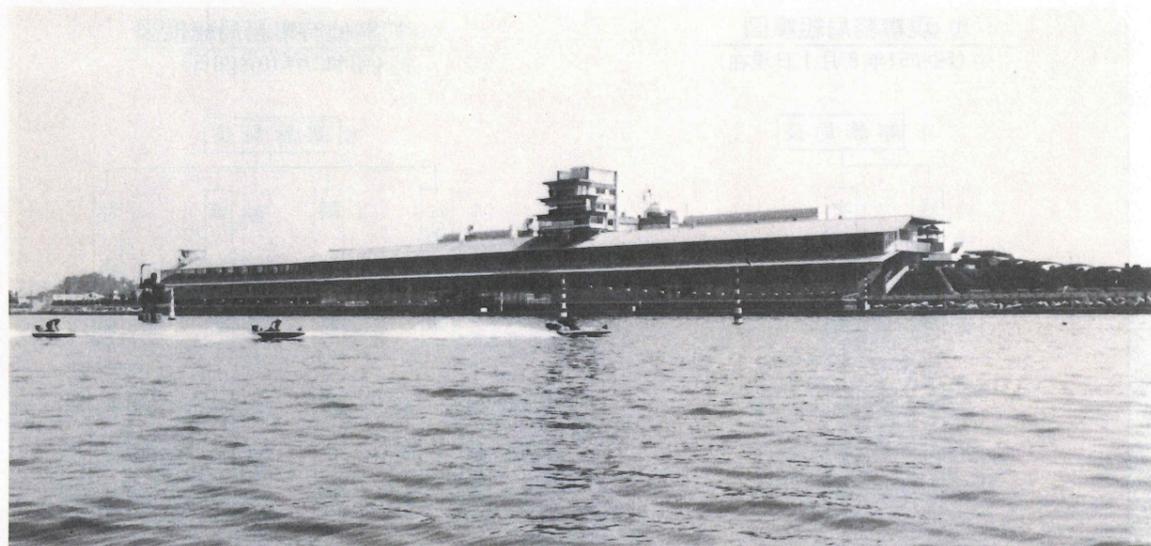


さて、競走法が成立し県下に競走開催の可能性が高まるや、坂出、高松両派はお互に相手方を意識して自派による競走会の設立を目指し、それぞれの県に対する陳情はますます熾烈化していった。同じ頃、長尾町は亀鶴公園での開催を目指し着々と準備を進めていた。

競走開催への関心が高まる中、丸亀市では臨時議会を開催(9月28日)し、緊急動議として「競走誘致」に関する件が上程された。運輸省及び四国海運局から得た調査報告のうち、鎮西議長は「調査特別委員」を指名し、いよいよ本格的な調査に乗り出す。一方、龍田氏を中心とする坂出派は、この丸亀市とはかり笹川氏に講師派遣を要請、矢次、板倉の両氏を迎える。両氏は丸亀城延寿閣に参集した関係者及び坂出派の準備委員に競走の概要と将来性等について抱負を述べられた。これを契機として議会側は調査特別委員会を誘致特別委員会に切り替え、理事者側は競走場の設計書を作成するための準備に着手するなど、誘致へ向って精力

的に動き出したのである。
11月28日、連合会の設立が成る。しかし、県競走会の設立は未だ実現していなかった。しかもこの頃、仲多度郡の各町村を主体とするいわゆる仲多度派は宮武英一、新名功、片山樹三郎の各氏が中心となり競走会設立の運動を開始した。

「三者合併へ」との笹川氏の指示により、各派による歩み寄りが見られはじめた師走上旬、県の副申書を作成するに当り大野経済部長より「本件に直接関係のない国東高松市長を発起人代表とする三派合併案」が示され、三者は異議なくこれを諒承した。そこで、12月26日、県庁において発起人総会を開き、翌27年1月14日、知事の副申書を添え運輸大臣に設立許可申請を提出。かくて同年1月30日、社団法人香川県モーターボート競走会が設立されたのである。創立総会が開かれた2月20日は、奇しくも丸亀市において施行申請が議決された日でもあった。



▲スタンド全景(昭和57年)

●歴代会長

代	会長名	任期
初	国東照太	27. 2 ~ 39. 12
 <p>〔略歴〕 高松商工会議所副会頭、常盤産業株式会社取締役社長、高松市議会議長、高松市長、成人保護司</p>		
2	鎮西麻吉	40. 1 ~ 53. 7
 <p>〔略歴〕 丸亀市議会議長、大洋造船工業(株)社長、四国化成工業(株)取締役、丸亀簡易裁判所調停委員、四国商興(株)取締役社長、香川県信用組理事</p>		
3	若山好雄	53. 7 ~ 現在
 <p>〔略歴〕 丸亀市議会副議長、丸亀市教育委員長、琴参興業(株)社長、香川県議会議員、四国交通安全協会会長、全日本交通安全協会副会長、琴平参宮電鉄(株)取締役</p>		

●歴代役員

代	副会長名	任期
初	龍田 菊次郎	27. 2 ~ 28. 5
//	浜野 正雄	27. 2 ~ 32. 11
2	鎮西 麻吉	33. 1 ~ 40. 1
//	中村 静雄	33. 1 ~ 34. 3
代	理事長名	任期
初	宮武 英一	27. 2 ~ 28. 5
2	伏見 豊次	32. 11 ~ 33. 1
代	専務理事名	任期
初	鎮西 麻吉	33. 1 ~ 39. 5
2	宮武 進	39. 5 ~ 41. 5
3	大西 光雄	53. 5 ~ 現在

●競走会構成員数推移表

項目	年度 初開催時	年度						
		30	35	40	45	50	55	57
会 員	157	182	151	139	124	104	98	90
役 員 (常勤、非常勤)	21	17	10	14	10	13	10	9
職 員 (含、嘱託)	21	19	16	22	24	22	23	23
臨時従業員 (アルバイト)	86	59	41	28	34	35	33	27
登録審判員	3	8	6	9	9	8	10	9
公認登録検査員	0	3	2	6	8	8	8	8

(注)各年度とも4月1日現在の集計、但し57年度は当表作成時(57年8月現在)

年 表			
年 月 日	事 柄	年 月 日	事 柄
26. 6. 18	モーターボート競走法制定	44. 6. 1	丸亀競艇開設17周年記念特別競走開催。 1日売上額初めて1億円をこえる。
26. 12. 26	創立準備発起人総会を開催	44. 6. 4	善通寺市外6町競艇事業組合に仁尾町加入
27. 1. 30	競走会設立許可さる	44. 7. 31	第15回全日本MB記念特別競走開催
27. 2. 20	創立総会開催、初代会長に国東照太、副会長に龍田菊次郎、浜野正雄就任。出資金、200万円、会員157名。 主たる事務所を高松市に置く。	46. 6. 18	法制定20周年を迎える
27. 2. 20	丸亀市議会モーターボート競走施行を議決	47. 3. 31	丸亀競艇場北側スタンド等増築工事竣工
27. 2. 22	競走会設立登記完了	47. 4. 1	善通寺市外7町競艇事業組合に仲南町加入
27. 4. 26	丸亀市モーターボート競走施行指定を受く	47. 6. 29	丸亀競艇開設20周年記念特別競走開催
27. 10. 31	丸亀競艇初開催、売上額1,554,400円 入場者 3,305名	47. 11. 5	競走会創立20周年記念式典を挙げる
28. 5. 19	従たる事務所を丸亀市に置く	48. 4. 1	善通寺市外8町競艇事業組合に綾歌町、琴南町加入10町となる
28. 5. 28	出資金増額、総額250万円、会員192名。 龍田菊次郎副会長を辞任	49. 1. 8	10レース制実施
32. 11. 24	浜野正雄副会長を辞任	49. 8. 8	第20回全日本MB記念特別競走開催 1日売上額初めて5億円をこす
33. 1. 11	副会長に鎮西麻吉、中村静雄就任	49. 12. 29	第1回鎮西杯争奪特選競走開催
33. 7. 11	主たる事務所を高松市から丸亀市に移す	50. 8. 18	第1回ヨット教室開講
34. 3. 31	中村静雄副会長を辞任	50. 12. 1	端末機運用開始
37. 4. 20	モーターボート競走法が恒久法となる	52. 4. 1	B&G協賛競走開催始まる
37. 10. 7	丸亀競艇開設10周年記念特別競走開催	53. 3. 16	第13回鳳凰賞競走開催 新記録、1日の入場者28,603名 1レース売上額 220,462,900円 1日売上額 1,033,968,700円
37. 4. 1	水曜ホリデー。連勝複式投票法始まる	53. 7. 12	鎮西麻吉会長死去
38. 8. 4	第1回少年少女ゴムボート大会開催	54. 7. 25	若山好雄会長に就任(3代)
39. 12. 23	国東照太会長を辞任、名誉会長に就任	54. 8. 3	第25回MB記念特別競走開催
40. 1. 22	鎮西麻吉会長に就任(2代)	54. 9. 9	第1回四国県下少年剣道錬成大会開催
40. 7. 20	ボート会館竣工	56. 6. 18	法制定30周年を迎える
43. 4. 11	善通寺市外6町競艇事業組合設立、競走施行の指定を受く	56. 11. 20	選手宿舎「富士見荘」竣工
44. 3. 31	丸亀競艇場改築工事竣工	57. 2. 22	競走会創立30周年記念式典挙げる
44. 4~6月	万国博覧会協賛レース5日間開催。	57. 7. 1	丸亀競艇開設30周年記念特別競走開催

相次ぐ「競願」に開催熱いよいよ高く

昭和26年6月のある日、当時の芦屋町長黒山高麿氏は、国会においてモーターボート競走法が可決成立したことを知り、町を貫通する遠賀川、北西側は響灘に面するという自然の利、地形に恵まれたこの芦屋町としては、これをもって町財政の窮迫を救うほかはないと考え、モーターボート競走施行を決意する。

ところが種々手続上の研究をする段階で、競走施行には競走会の設立がまず先決であることがわかり、福岡県モーターボート競走会を設立すべく町の有志吉田三郎氏に相談をもちかける。吉田氏は二つ返事で協力を約し、早速芦屋町出身の小田十壯氏と共に各方面への折衝を開始。まず競走会設立について、福岡財界の有力者山脇正次氏に懇請す

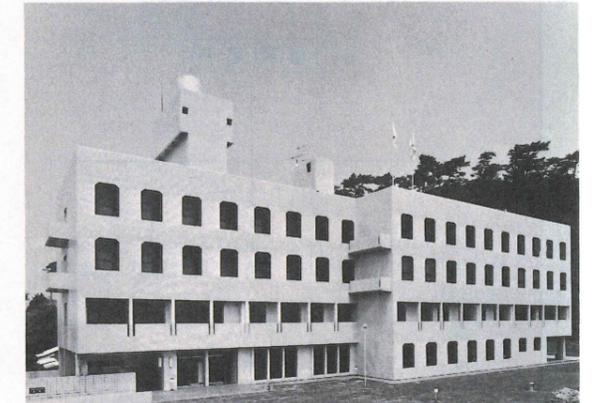
るが、「立場上受けられない。旨の意志表示があったため、引続き福岡証券取引所理事長吉次鹿蔵氏にこれを相談したところ、「木曾鉱業(株)社長木曾重義氏に依頼し、力を借りたら」との指示を受ける。

そこで、吉田、小田両氏は上京中の木曾氏を追って急拠面談し、会長就任を懇請した。当初辞退の方向にあった木曾氏も、たまたま上京した吉次氏の説得もあってついに承諾。「理事選任は他人に任せない」「自分は忙しいため、自分の推す人を専務として会務を任せたい」などの条件のもと、永島武雄氏を専務としてこれに専念してもらうことを決定した。ところがこの頃、若松市においても久保田瑞一市議を中心とする競艇施行の動きがあったのである。

さらに、これに呼応するかのように海運局OBの大坪良高氏グループによる競走会設立の動きもあり、ここにも2つの認可申請が運輸省に出される結果を見ることとなった。



▲競走会事務所兼選手宿舎(昭和57年)

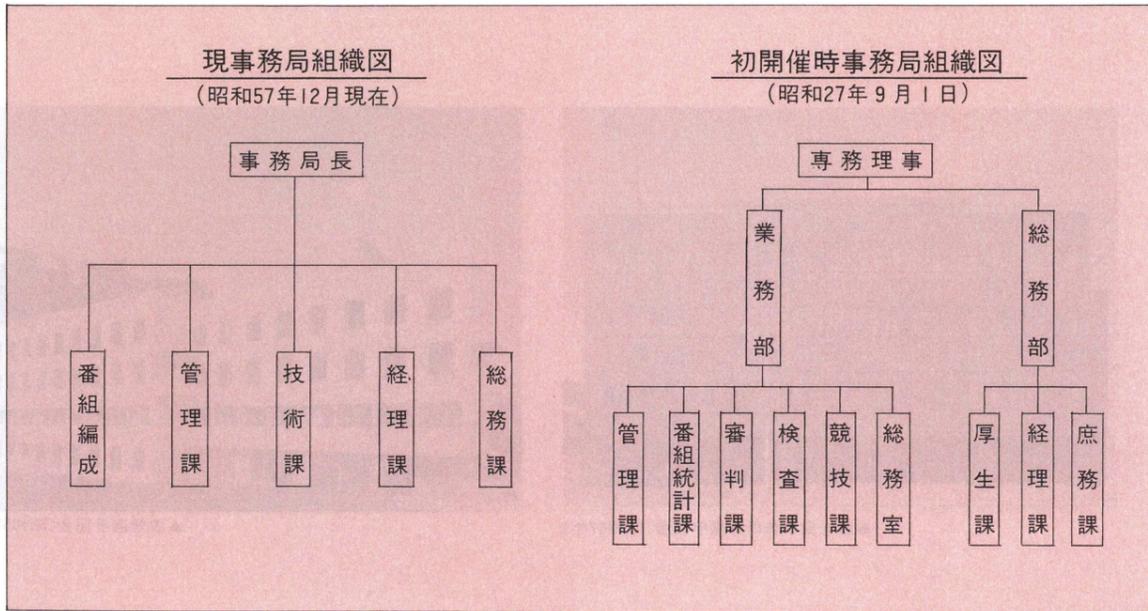


▲波懸選手宿舎(昭和57年)

運輸省提示の条件に双方の歩み寄り

芦屋開催をめざす吉田、小田両氏は、木曾グループ認可に向けて隣接の遠賀、岡垣両町の協力をも求めつつ、一層活発にその運動を展開していった。昭和27年に入り各グループの動きもより活発化した頃、木曾と京中の小田氏のもとに「若松有利」との情報が入る。しかも、運輸省の「若松・芦屋競願」についての決定も近い、という。小田氏は、在京実力者の三浦氏に秘書氏を通じてその斡旋方を依頼、あるいは運輸省船舶局長に「1県2カ所認可」の実現を懇請と努力を重ねるのであるが、そんな氏のもとへ、当時一緒に運動を進めていた井上義夫氏から「東京に藤吉男氏を訪ねたら、運輸省は若松、芦屋に1カ所月交替で開催を認める方針との情報が連合会のほうへ入っている」との連絡が入る。翌日、三浦氏の斡旋により運輸省へ、平井義一代議士立

会のもと佐々木秀世運輸政務次官を訪ねた小田氏は、「会議の結果、内規を改め若松、芦屋双方共許可することとした」旨を聞くが、その際はこれも競願の競走会設立を一本化することが条件として提示され、さらに大坪氏側の数名を入れるようにとの要請を受けるのである。帰郷した小田氏は、直ちに木曾氏にこれら運輸省の条件を話し、また大坪氏側と折衝を重ねた。その結果、曲折はあったものの最終的に大坪氏側より11名が入ることを決め昭和27年7月25日に福岡県モーターボート競走会設立の認可を受ける。さらに、同年8月12日頃、相前後して芦屋、若松に認可書が交付された。かくして福岡県内に2カ所の競走場が生まれ、それぞれの初開催へと向かってスタートを切ったのである。芦屋競走場初開催は昭和27年11月7日、若松競走場初開催は5日後の同月12日であった。



歴代会長

代	会長名	任期
初・3	木曾重義	27.9~37.7 40.3~53.5
 <p>〔略歴〕 ●木曾鉱業株式会社取締役社長、中興工業株式会社取締役社長、日本石炭鉱業連盟会長</p>		
2	永島武雄	37.9~40.3
 <p>〔略歴〕 新栄鉱業株式会社取締役社長、永島倉庫株式会社取締役社長、日本金属工業株式会社取締役社長</p>		
4	松岡八郎	53.6~54.9
 <p>〔略歴〕 ●上山田三反炭鉱経営、満州製鉄株式会社参事、福岡県モーターボート競走会理事</p>		
5	原口秀雄	54.10~現在
 <p>〔略歴〕 ●原口鉱業株式会社取締役社長、日本石炭鉱業連合会理事、(社)福岡県小型自動車競走会会長</p>		

歴代役員

代	副会長	任期
初	平井義一	27.9~32.9
2	永島武雄	33.1~37.9
3	松岡八郎	51.5~53.5
4	原口秀雄	54.1~54.10
5	峰敏彦	55.6~現在
代	専務理事	任期
初	永島武雄	27.9~37.9
2	松岡八郎	47.3~51.5
3	松隈徹	53.6~53.9
4	峰敏彦	54.11~55.6
5	篠崎保慶	55.6~現在

福岡県競走会構成員数の推移

項目	年度							
	初開催時	30	35	40	45	50	55	57
会員	43	41	41	40	35	31	21	19
役員(常勤、非常勤)	43	10	11	13	13	13	12	12
職員(含嘱託)	11	49	76	75	84	82	95	90
臨時従業員(アルバイト)	不明	不明	63	61	56	53	58	61
登録審判員	2	6	8	16	19	21	23	22
公認登録検査員	3	11	9	17	21	23	22	22

(注)各年度とも4月1日現在の集計、但し57年度は当表作成時(57年12月現在)

年 表			
年月日	事 柄	年月日	事 柄
27. 6. 27	発起人代表永島武雄氏競走会設立認可申請	30. 11. 19	福岡競走場、第3回全日本選手権大会開催
27. 7. 25	社団法人福岡県モーターボート競走会設立認可	31. 7. 7	福岡競走場第3回九州地区選手権大会開催
27. 8. 12	初代会長木曾重義氏就任	31. 7. 10	玄海、響灘長距離横断競走実施
27. 9. 2	福岡県出身選手養成訓練	32. 6. 16	九州水上スキー連盟発会式
27. 11. 7	芦屋競走場初開催	32. 6. 16	福岡競走場にて第1回大学東西対抗モーターボートレース開催
27. 11. 12	若松競走場初開催	32. 7. 27	芦屋町花火大会に於て水上パレード、水上スキーを披露
28. 1. 15	実務者養成訓練始む	32. 8. 14	福岡競走場、B35-B25新旧モーターによるハンディキャップ模擬レース開催
28. 4. 15	福岡、佐賀両県の選手養成開催	32. 9	大牟田博協賛水上行事
28. 7. 9	スポーツ紙記者懇談会を実施	32. 11. 4	福岡、フライング誤審による騒擾事故発生
28. 7. 16	競走会創立1周年記念として水害義捐競走実施(芦屋)	32. 12. 23	福岡競走場、新開発の飛沫防止具板取付航走テスト披露
28. 11. 7	若松競走場にて第1回全日本選手権開催	33. 5. 10	九州大学開学記念行事に模擬レース披露
29. 2. 26	芦屋選手宿舍落成	33. 5. 14	芦屋競走場、第4回モーターボート記念競走を開催
29. 3. 2	全国初のオール女子「水の女王決定戦」開催(芦屋)	34. 5	二重針大時計の立合実験(芦屋)
29. 4. 20	若松選手宿舍落成	34. 5. 19	若松競走場、第5回モーターボート記念競走開催
29. 4. 22	九州学生モーターボート連盟結成	34. 11. 20	福岡競走場、第6回全日本選手権大会開催
29. 5. 5	どんたく競艇祭水上パレード	35. 1	福岡競走場、二重針大時計を業界第1号として使用開始
29. 7. 10	福岡競走場夏祭り納涼大会	35. 3	芦屋競走場、二重針大時計使用開始
29. 7. 10	障害レース実施認可申請	35. 5	若松競走場、二重針大時計使用開始
29. 8. 8	第1回模型モーターボート競技大会(大濠)	35. 5. 17	芦屋競走場、第6回全国地区対抗競走開催
29. 10. 14	芦屋競走場第1回九州地区選手権競走開催	35. 10	水難救助隊を編成
29. 10. 20	福岡選手宿舍並びに競走会事務所落成	35. 11. 8	若松競走場、第7回全日本選手権競走開催
29. 10. 30	若松競走場、オール女子レース開催	36. 1	水難救助隊、掖済会出初式に参加
30. 4	福岡競走場、オープンレース開催	37. 5. 1	芦屋競走場第9回九州地区選手権競走開催
30. 5. 9	第1回学生訓練を実施		
30. 5. 12	情報協会員、訓練		
30. 8. 14	芦屋競走場にて岩下選手出遅れの為、開設以来最大の騒擾事件発生。		

年 表			
年月日	事 柄	年月日	事 柄
37. 7	水難救護演習を筑後川にて実施	42. 8. 5	筑後川にてゴムモーターボート試乗会実施
37. 7. 31	競走会創立10周年記念行事開催	42. 9. 10	第1回職員及び家族合同の善導運動
37. 8. 28	若松競走場、第8回全国地区対抗競走開催	42. 9. 20	第2回職員及び家族合同の善導運動
38. 2. 10	五市合併により若松市営は北九州市営へ	42. 11. 3	本栖訓練取材映画を作成、KBCで放映
38. 10	競走用モーターの騒音とその対策について研究	42. 11. 8	第2回選手家族の懇談会実施
38. 10	消音モーター実験開始(39年1月迄)	42. 11. 9	若松競走場第14回九州地区選手権競走開催
39. 5. 14	芦屋競走場、第10回モーターボート記念競走開催	42. 12. 11	第3回選手家族の懇談会開催
39. 9. 24	若松競走場、施設改善記念競走開催	43. 2. 18	選手家族との懇談会開催
39. 11. 13	光電式スピードメーター特許権受理	43. 3. 20	芦屋競走場第15回九州地区選手権競走開催
40. 3. 18	玄海島通電化レース開催(福岡)	43. 4. 6	北九州、芦屋地区小学校に教材用交通信号機寄贈
40. 6. 10	遠賀川総合訓練に水難救助隊として参加	43. 7. 1	選手募集の街頭PRを実施
40. 6. 21	県内3施行者の長議長と当会の懇談会実施	43. 7. 3	福岡地区情報協会員に対し講習会を実施
40. 7. 22	若松競走場、第11回モーターボート記念競走開催	43. 7. 14	少年少女ゴムモーターボート試乗会実施(生の松原)
40. 8. 9	福岡競走場、日モ協主催で海技試験実施	43. 8. 1	孤島小呂島小・中学生を福岡市に招待
41. 7. 20	福岡競走場、海の記念日協賛行事実施	44. 4. 1	芦屋競走場、移転新設
41. 7. 21	福岡競走場、第12回モーターボート記念競走開催	44. 4	福岡競走場、窓口増設工事
41. 8. 18	航空自衛隊芦屋基地に県内選手34名体験入隊	44. 5. 7	若松競走場、新スタンド竣工
41. 9. 4	大岳にて第1回西日本水上スキー大会開催	44. 5. 29	福岡競走場、第15回全国地区対抗競走開催
42. 2. 3	善導運動の一環として全国初の選手整備訓練を実施	44. 7. 3	福岡県モーターボート会館落成
42. 2. 21	新旧選手との意見交換会を実施	44. 7. 6	少年少女ゴムモーターボート大会実施(芦屋)
42. 5. 14	福岡選手宿舍にて第1回選手家族善導運動	44. 7. 15	若松競走場にて中間市行橋市競艇組合初開催
42. 7. 14	芦屋競走場、スタート進入航法に対して騒擾事故発生	44. 7. 20	福岡競走場にて海の記念日協賛花火大会を開催
42. 7. 25	若松競走場、航法に対して騒擾事故発生	44. 10. 9	第1回福岡県内公営競技関係者懇談会開催
		45. 12. 7	騒擾事故を想定して福岡県警約800名による抜き打ち警備訓練を実施

年 表

年月日	事 柄	年月日	事 柄
46. 2. 3	県内施行者幹部と運営懇談会議開催	50. 8. 7	芦屋競走場、全館機械化完成
46. 3. 19	福岡競走場で日本船舶振興会長杯争奪東西対抗競走開催	51. 3. 26	施設の子供(52名)荒尾市で開催の子供博に招待
46. 4. 10	若松競走場にスタート事故防止用ITV設置	51. 8	僻地中学生、船の科学館等に招待
46. 4. 22	福岡競走場にスタート事故防止用ITV設置	51. 9. 26	第1回「船舶模型工作コンクール」
46. 6. 3	若松競走場、モーターボート競走法制定20周年記念特別競走開催	51. 10. 24	第1回福岡県競走会会長杯争奪ヨット大会実施
46. 7. 16	福岡競走場、警備訓練を実施	52. 10. 6	福岡競走場、第24回全日本モーターボート選手権競走開催
46. 12. 9	芦屋競走場、法制定20周年記念競走開催	53. 3	日赤救急法講習会を職員及び周辺住民を対象に実施
47. 1. 13	福岡競走場、法制定20周年記念競走開催	53. 3. 2	若松競走場、ファンモニター懇談会
47. 2. 10	芦屋競走場、新スタンド完成	54. 6. 7	福岡県モーターボート会館別館落成式
47. 3. 16	福岡競走場、第7回鳳凰賞競走開催	54. 8. 8	第1回動力模型船競技大会
47. 7. 14	福岡競走場、第18回モーターボート記念競走開催	54. 10. 31	福岡競走場第26回全日本選手権競走開催
47. 7. 30	行橋市にて第1回里親ゴムモーターボート試乗会	55. 8. 10	第5回福岡県競走会会長杯争奪ヨット大会実施
47. 8. 8	選手宿舎(波懸)新築移転	55. 10. 9	第5回「船舶模型工作コンクール」大会
47. 9. 13	競走会創立20周年記念式典実施	57. 3. 6	UIM、D/L取得講習会実施
48. 9. 29	選手会支部研修会(西身延本仏寺に於て)	57. 7. 14	競走会創立30周年記念式典実施
49. 2.	芦屋競走場、VTR設置		
49. 5. 9	若松競走場、総合電光表示盤完成		
49. 8	山村僻地の母子家庭の子弟18名を船の科学館に招待		
50. 3	若松競走場、VTR設置		
50. 3	山間僻地の児童28名を2泊3日の日程で福岡市に招待		
50. 7. 31	山間僻地の中学生を海浜教室に120名招待(2泊3日)		
50. 8	僻地中学生20名を船の科学館に招待(5泊6日)		

佐賀県競走会

“海の街、にふさわしいこの事業こそ…”

唐津市は昭和7年の市制施行以来、年々多額の起債により地方都市としての事業をどうにか継続していたのであるが、市の財政状態は窮迫しており、その赤字対策に苦慮していた。その対策のひとつとして早くから有志間で行われていた競輪事業誘致の運動も、未だ見通しまったく立たずという状況でもあった。

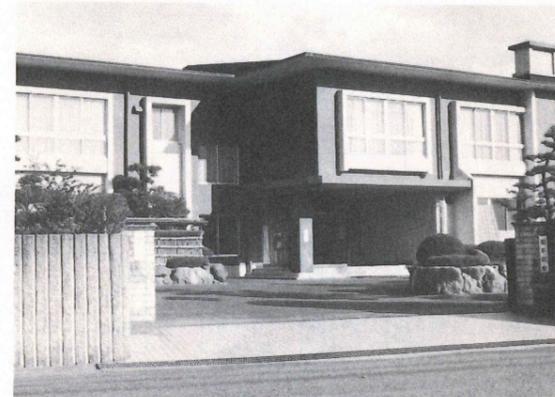
そのような折も折の昭和26年5月、モーターボート競走法案が国会を通過したとの報が入り、これを機に“海の唐津、にふさわしいこの競艇事業を、ぜひとも市財政再建のため誘致すべしとの意見が一部議員から出される。賛同した有志議員は相図って、これより競艇誘致の運動を開始した。

さらに、事業推進の母体として競走会の設立が最も急を

要するため、議員有志を代表した殿川勇氏が昭和自動車株式会社金子道雄氏に、競艇場誘致の促進と競走会設立についてその協力を懇願し了承を得る。

これら運動の進展に伴い、時の唐津市長清水庄次郎氏は昭和26年7月27日、競艇場指定の件につき上京、運輸省と折衝し、8月6日には市議会緊急協議会を開いて競艇場設置案を可決決定した。

これに先だち、金子氏のもとで進められていた佐賀県モーターボート競走会の設立計画が完了し、昭和26年8月7日に第1回競走会設立準備委員会を開催。金子氏が設立委員長となり20名の設立委員が選任され、基金、会員募集、設立準備事務所を市内木綿町唐津獵友会内に置くこと、などを決議した。つづく同月29日、第2回設立委員会が開かれ、競走会設立趣旨、定款の審議、そして金子氏を初代会長に推薦することを全員一致で決議する。



▲競走会事務所(昭和57年)



▲選手宿舎(昭和57年)

台風災害乗り越え念願の爆音ひびく

昭和26年9月20日付で、社団法人佐賀県モーターボート競走会設立許可申請書は佐賀県知事経由、山崎運輸大臣宛提出された。その後、競走会設立準備委員会は早急に会員を確保する必要からその募集を行った。

同年10月27日には第3回設立委員会が開催され、10月27日当競走会設立の件が運輸省審議会を通過した旨の報告があり、今後の運営についての協議がなされた。そして昭和26年11月14日、佐賀県モーターボート競走会は正式に運輸大臣よりその設立を認可されるのである。

創立総会は昭和26年12月15日、市内唐津神社彰敬館で開かれた。会員総数266名であった。

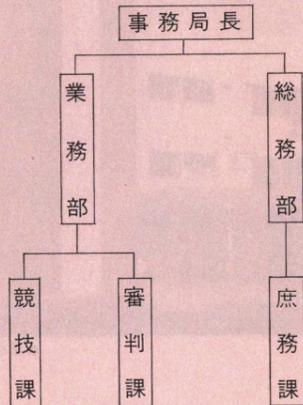
この頃、唐津市と共に伊万里市も競走場誘致を考えており、両者は互にそのための工作を独自に続けていた。そのような中で唐津市は、競走場を松浦川河口に内定し、昭和

26年12月25日にその指定申請を提出、唐津市代表が九州海運局に陳情を行った。その後、昭和27年1月24日に九州海運局春山監理課長一行が、また2月6日には全国モーターボート競走会連合会により、現地調査が行われている。

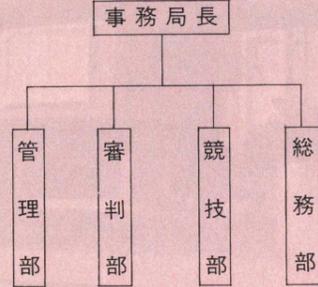
調査の結果もあって昭和27年3月29日、唐津市は施行者の指定を受け、翌28年4月には競走場の起工式を、同年6月には陸上施設工事に着手。7月20日完成を目指し、突貫工事を開始する。この間競走会は、地元選手の養成を考え連合会に「選手依託養成についての許可申請」を提出して、その判断に基づき選手を募集、40名の合格者を4月14日より75日間、養成訓練のため芦屋競走場へ。また、職員の実技訓練も6名を同競走場へ派遣し、技術習得を行わせた。

こうした急ピッチの諸準備も途中(6月25日)台風災害により工事が遅れたため、延期の止むなきには至るが、それでも8月7日、待望の初開催をついに迎えたのであった。

現事務局組織図
(昭和57年8月1日現在)



初開催時事務局組織図
(昭和28年8月)



●歴代会長

代	会長名	任期
初	金子道雄	26. 12~30. 5
<div style="display: flex; align-items: center;"> <div> <p>〔略歴〕</p> <p>●昭和自動車株式会社社長、佐賀県議会議員、唐津市長、唐津商工会議所会頭、福岡トヨタ株式会社社長</p> </div> </div>		
2	金子勝商	32. 12~現在
<div style="display: flex; align-items: center;"> <div> <p>〔略歴〕</p> <p>●昭和自動車株式会社社長、唐津商工会議所会頭、佐賀県経営者協会副会長、昭和タクシー株式会社社長</p> </div> </div>		



▲スタンド全景(昭和57年)

●歴代役員

代	副会長名	任期
初	永倉次郎	26. 12~30. 5
〃	諸田庄治郎	26. 12~32. 9
〃	永石八郎	26. 12~32. 12
2	井手熊太郎	30. 5~32. 12
3	田口義男	53. 5. 15~55. 8
4	瀬筒高雄	57. 5~現在
代	理事長名	任期
初	久保幸喜	26. 12~28. 5
2	江永近	28. 5~31. 10
3	古賀市次	31. 11~33. 6
代	専務理事名	任期
初	中島太	26. 12~34. 2
2	矢野栄	40. 5~47. 1
3	田口義男	47. 2~53. 5
4	谷口武彦	57. 5~現在

●競走会構成員数の推移

項目	年度	初開催時						
		30	35	40	45	50	55	57
会員	266	225	212	199	174	142	102	97
役員 (常勤非常勤)	26	24	12	11	11	10	10	11
職員 (含嘱託)	12	18	16	16	18	29	30	31
臨時従業員 (アルバイト)	70	61	50	39	32	23	22	20
登録審判員	4	6	5	8	7	10	11	12
公認登録検査員	2	3	4	6	8	8	7	7

(注)各年度とも4月1日現在の集計、但し57年度は当表作成時(57年8月現在)

年 表			
年 月 日	事 柄	年 月 日	事 柄
26. 11. 14	(社)佐賀県モーターボート競走会設立認可	44. 4	万国博覧会協賛レース実施
26. 12. 15	初代会長金子道雄氏就任	45. 5. 28	レース場新設移転促進要請決議(唐津市)
27. 1. 10	唐津競艇場指定促進協議会発足	46. 6. 18	一日売上1億円突破
27. 3. 29	唐津市施行者指定	46. 11. 24	創立20周年記念式典挙行
28. 4. 14	唐津競艇場建設着工(松浦川河口)	47. 3. 23	(財)松浦河畔建設公社発足
28. 8. 7	唐津競艇初開催	47. 7. 2	一日売上1億7,000万円突破
29. 8. 22	模型モーターボート大会実施	48. 8. 3	新唐津レース場起工式
29. 11. 26	創立3周年式典挙行	49. 4	B・G特別協賛競走開催
30. 8	海事思想普及のため水上スキーの指導公開	49. 6. 30	一日売上3億円突破
30. 8	県下一円水上ペーパーを実行	50. 1. 30	新唐津レース場完成(総工費107億円)
31. 2	選手精鋭化要領実施(選手技能訓練実施)	50. 3. 13	新レース場初開催
31. 8	海事思想普及のため長距離レースを実施	51. 2. 11	一日売上5億円突破
32. 12. 16	2代会長金子勝商氏就任	51. 6. 30	競走会々館完成(工費3億円)
33. 7. 20	海の記念日、施設児童の海上遊覧招待	52. 6. 11	青少年ヨット教室講習会実施
33. 8	水上パトロールによる海難防止に協力	52. 8. 26	東京船の科学館友の会研修会参加
34. 1. 28	予想業者の予想コンクール実施(4日間)	53. 8. 19	第24回モーターボート記念特別競走実施
34. 6. 11	男女対抗レースの実施(4日間)	53. 8. 24	一日売上6億9,000万円突破
35. 2. 5	ファンの実態調査の実施	54. 7. 24	B・G海外体験航海参加(青少年)
35. 7. 20	施設児童の海上遊覧招待	55. 10. 9	第27回全日本選手権特別競走実施
36. 8	模型ボート大会、児童の海上遊覧招待	56. 5. 16	創立30周年記念式典挙行
37. 11. 19	創立10周年記念式典挙行	56. 9. 2	第17回競艇関係者武道大会、剣道の部優勝
38. 7. 29	第1回少年少女ゴムボート大会実施	57. 2. 3	東松浦九ヶ町村組合開催認可
39. 4. 23	一日売上1,000万円突破	57. 4. 23	東松浦競艇組合初開催
39. 8	少年少女ゴムボート大会(唐津、佐賀)実施		
40. 6. 19	選手宿舍完工(唐津市北城内)		
41. 12. 18	一日売上3,000万円突破		
42. 3. 10	唐津・福岡オーナー対抗戦開催		
42. 12. 13	競走会事務所完工(唐津市千代田町)		
43. 3. 25	善導運動を実施(職員・選手)		
44. 12. 18	騒擾事件発生(1ヵ月間開催停止)		

いち早く設立初開催への気運を盛り上げる

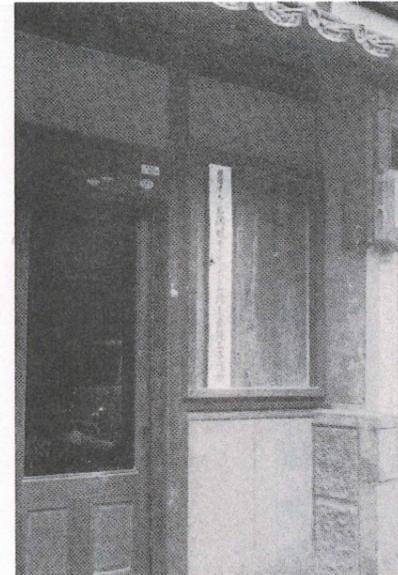
モーターボート競走法に関して長崎県では、昭和25年秋頃より、当時衆議院議員で運輸委員として活躍しておられた現名誉会長坪内八郎氏を通じ、その情報を刻々と得ていた。そのため坪内氏を中心とする長崎の同志は、この件について何度も会合を持ち、連絡をとりながら時のくるのを待っていた。そして翌26年6月18日、競走法が成立するや直ちに同志会を解散し同月27日には長崎県モーターボート競走会設立発起人会を開催した。また7月5日には創立総会を開き、初代会長に坪内氏を選任したのである。

一方、競走場については長崎の小ヶ倉のほか、大村市、時津町が当会に対し積極的に誘致運動を展開し、双方とも議会議員が毎日のように当会を訪れていた。中でもとくに

大村市は議会を挙げての運動を展開し、誘致委員長西謙太郎市議を先頭に長崎市にある競走会事務所まで日参される状態となった。そこで、当会の役員間にもいろいろ意見は出たが結局大村市の熱意にほだされ、大部分の役員がやがて大村側へと傾いていった。

そして昭和26年7月29日、真夏の照りつける太陽の下で大村競艇場建設の起工式が挙行され、工事も急ピッチで進んでスタンドはもちろんその他の施設もほとんどが9月上旬には完成を見た。

このように長崎県は競走会、施行者ともにその受入態勢を早々と整えたのであるが、競走に必要なボートは未だ無く、選手もいない、その上中央では全国モーターボート競走会連合会がまだ設立されていなかった。連合会がなければ施行者や競走場、また競技運営を担当する競走会はあっても法規上も実施面でもまったく動きがとれない状態だった。



▲競走会事務所(初開催時)



▲選手宿舍(昭和57年)

無から有へ、そして30年の歴史がここに

これを知った関係者は、何よりもまず全モ連の早期設立をとひたすら熱望するのみであった。そのため、大村市以外の開催希望地と全モ連設立の動向及びボート、モーターそれに選手養成等も含めた広範囲な知識を得るとして三浦理事長、川崎助役が上京、運輸省に日参し面談されるが長崎県ほど開催準備の進んだところはなく、八方塞がりですうすれば良いのか判談に苦しむ状況へと追い込まれる。

しかし、ほどなく他県における競走会も順次設立され、10月には待望の連合会も設立総会が開催されてようやく誕生といううれしい便りを聞くのである。

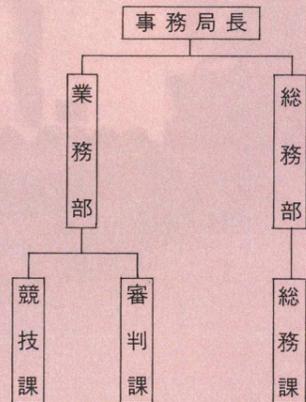
かくして連合会も設立され機構も軌道に乗ってくるが、レース開催のほうは何時になるのかまったく見当もつかぬまま月日は過ぎていき、大村市にも苦悩の色が見えはじめた。一方世論も日々悪化の傾向にあり、このため競走会は

10月に県内選手の募集養成を行い、11月25日には大村市主催による西日本アマチュアモーターボート選手権大会を開催する。内外への宣伝を兼ねた従業員への研修、大村市民に対する緩和剤ともなったこの大会はまた、初開催への導火線の役目をも果たして成功裡にその幕を閉じたのであった。

昭和27年1月30日、初開催促進のため森田副会長、西理事の両氏が上京し関係先に陳情。以後、2月6日運輸省海運局係官、全モ連運営委員長ほか係員多数の来大を得て競走場の事前審査を終了。3月27日は大村競走場で養成中の選手の登録試験を実施、31日には競走場の登録を完了と、めまぐるしく多忙な毎日が続くが、3月30日以降では競技運営、舟券の発売方法並びに放送等の全般にわたり全モ連関係者による指導が繰返され天下の視聴を集めたのであった。こうしてわが国競艇の初開催は、昭和27年4月6日からの3日間、大村競艇場において華々しく開催されたのである。

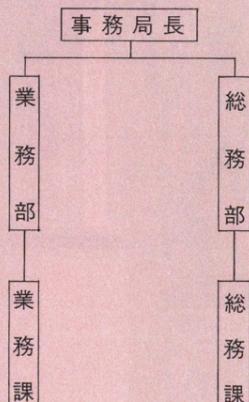
現事務局組織図

(昭和57年8月1日現在)



初開催時事務局組織図

(昭和27年4月1日)



●歴代会長

代	会長名	任期
初	坪内 八郎	26. 7 ~ 30. 5
	 [略歴] 衆議院議員・同運輸委・同委員会理事。競走法提案者代表として法成立に貢献、長崎県競走会発起人代表として全国第1号の競走会設立	
2	森田 三重	30. 6 ~ 32. 5
	 [略歴] 海運会社社長、長崎県議5期、同議長を最後に政界引退、長崎県競走会設立発起人の1人。52年6月死去	
3・5	平山 久之助	32.6 ~ 41.5 43.6 ~ 45.10
	 [略歴] ●土建会社社長、大村市商工会会頭、自民党大村支部長、第2次増資の際に会員となる。55年2月死去	
4	高松 玄治	41. 6 ~ 43. 5
	 [略歴] ●映画館経営、長崎自転車振興会審判員、大村市議1期、長崎県議3期、同県議副議長、第2次増資の際に会員となる。52年9月死去	

代	会長名	任期
6	馬場 政吉	46. 11 ~ 現在
	 [略歴] ●陸運、自動車販売、自動車学校等会社社長、競走会設立発起人の1人、設立来役員に就任、初開催から2年間検査員の実務に携さわる	

●歴代役員

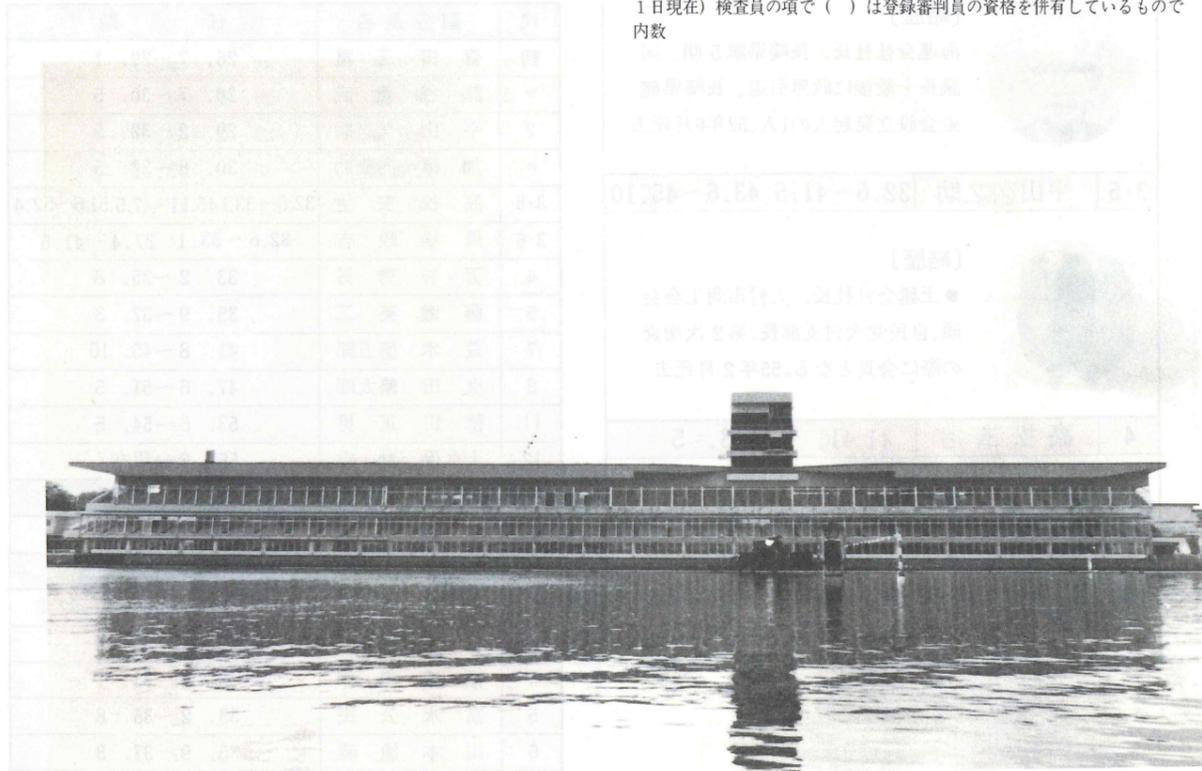
代	副会長名	任期
初	森田 三重	26. 7 ~ 29. 1
〃	諸谷 義武	26. 7 ~ 30. 5
2	平山 久之助	29. 2 ~ 32. 5
〃	加藤 内蔵助	30. 6 ~ 32. 5
3・8	高松 玄治	32.6 ~ 33.145.11 ~ 47.5 51.6 ~ 52.4
3・6	馬場 政吉	32.6 ~ 33.1 37.4 ~ 41.5
4	万谷 秀男	33. 2 ~ 35. 8
5	藤瀬 英二	35. 9 ~ 37. 3
7	荒木 徳五郎	41. 8 ~ 45. 10
9	久田 繁太郎	47. 6 ~ 51. 5
11	徳田 正男	53. 6 ~ 54. 5
12	大久保 勘吉	55. 6 ~ 現在
代	理事長名	任期
初	三浦 孝治	26. 7 ~ 29. 1
代	専務理事名	任期
初・3	幸尾 清治	26.7 ~ 28.12 30.6 ~ 32.5
2	荒木 徳五郎	29. 1 ~ 30. 5
4	福田 善作	32. 6 ~ 33. 1
5	富永 公民	33. 2 ~ 35. 8
6	川本 漁蔵	35. 9 ~ 37. 3

●競走会構成員数の推移

代	専務理事名	任 期
7	古賀 清作	37. 4～39. 5
8	加藤 内蔵助	39. 6～41. 4
9	木村 種三郎	41. 5～42. 6
10	山崎 吾八	42. 7～45. 10
11	大久保 勸吉	45. 11～55. 5
12	飯盛 丈太郎	55. 6～現在

項目	年度 初開催時	年 表							
		30	35	40	45	50	55	57	
会 員	180	180	177	162	149	133	108	101	
役 員 (常勤、非常勤)	20	23	15	15	15	15	15	14	
職 員 (含 嘱託)	6	8	7	8	16	22	25	23	
臨時従業員 (アルバイト)	50	53	46	46	40	43	37	37	
登録審判員	0	4	3	4	7	8	9	9	
公認登録検査員	0	2	2	3	8 (2)	8 (2)	8 (2)	8 (2)	

(注)各年度とも4月1日現在の集計、但し57年度は当表作成時(57年8月1日現在)検査員の項で()は登録審判員の資格を併有しているもので内数



▲競走会事務所のあるスタンド全景(昭和57年)

年 表

年月日	事 柄	年月日	事 柄
26. 7. 27	長崎県競走会設立発起人会	43. 2. 17	選手会長崎県支部選手、家族善導運動
26. 7. 5	長崎県競走会創立総会	43. 7. 10	観覧席スタンド改築第1期工事起工
26. 7. 29	大村競走場建設起工式	43. 7. 23	長崎県諫早市外/市/町競艇組合競走初開催
26. 8. 10	長崎県競走会設立認可(全国第1号)		
26. 8. 20	地方競走会初のMB選手養成機関設立	44. 10. 10	場内、駐車場舗装、冷暖房設備工事起工
26. 11. 25	西日本アマモーターボート選手権大会開催	44. 11. 9	競走会、選手会、情報協会合同運動会
27. 2. 6	運輸省・全モ連関係者大村競艇場事前調査	45. 11. 11	馬場政吉氏会長に就任
27. 3. 31	大村競走場登録	47. 10. 10	スタンド増築工事、給排水工事起工
27. 4. 1	大村市営MB競走第1回委任契約締結	48. 4. 1	長崎県競走会選手宿舎新築落成式
27. 4. 2	大村競艇初開催準備訓練の模擬レース開催	48. 8. 21	大村競走場にて少年少女ゴムボート大会
27. 4. 6	大村競艇全国における初開催(3日間)	49. 3. 10	場内床張替、防波堤改修、発電機設置工事
27. 4. 19	長崎市浜屋、佐世保市玉屋両デパートでボート・モーターの展示会開催	50. 12. 10	場内スタンド前面サッシ取付工事
27. 4. 23	長崎港・佐世保港にて宣伝のため試走会	50. 11. 29	競走会役員沖繩海洋博見学
27. 6. 29	審判員・検査員等津競艇初開催指導員で参画	51. 2. 12	レース不成立返還問題でファン騒ぐ
27. 9. 1	福岡県選手見習生50名大村養成所入所式	51. 3. 10	発売数表示電光掲示板設置工事起工
27. 11. 5	同上卒業見込見習生49名登録試験合格	52. 5. 9	故高松玄治副会長長崎県競走会葬
28. 8. 31	第2回大村競艇場情報協会々員講習会	52. 5. 12	大村競艇開設25周年記念競走初日
29. 7. 17	競走会役員・臨時従業員給与値下げ断行	52. 5. 15	同上最終日入場者14,765名の新記録
29. 7. 20	運輸省は大村競艇初開催日を競艇記念日に決定	52. 6. 26	2代日会長森田三重死去
29. 8. 21	第1回女子選手権大会海の女王決定戦開催	53. 8. 14	一瀬隆選手大村競艇場で競走中殉職
30. 6. 12	初代会長坪内八郎に替り森田三重会長就任	54. 4. 10	大村市長故高木隆虎の大村市葬
32. 1. 3	競走会臨時従業員2日間ストライキ決行	54. 5. 24	27周年記念競走で売上483,362.6百円新記録
32. 6. 10	会長森田三重辞任平山久之助が会長就任	55. 2. 13	54年度スタート事故防止運動1位賞受彰
32. 9. 2	台風のため競艇場施設被害甚大レース中止	55. 2. 26	前会長平山久之助死去
34. 7. 12	競走会事務所長崎市より競艇場内に移転	56. 2. 19	第27回九州地区選手権競走開催
41. 1. 20	会長平山久之助辞任高松玄治会長就任	56. 8. 18	長崎県競走会創立30周年記念式典
41. 3. 10	コンクリート板装着式防波堤設置工事起工	56. 8. 24	花田龍美選手大村競走場で競走中殉職
		57. 4. 8	第1回競艇祭特別競走開催
		57. 7. 23	長崎大水害発生大村競艇1節中止

茨城県競走会

“霞ヶ浦の自然を背景に”のせて

昭和29年当時、既開催地におけるモーターボート競走の成果並びにその影響の大なるを見て、競走実施の気運はなお全国的に高まりつつあった。わか茨城県においてもそれは例外でなく、競走開催を望む県民の声は日々大きく広がりを見せていたのであった。

とくに県南部地方の中心地である土浦市においては、西に関東の名山筑波山を仰ぎ、東に琵琶湖に次いで全国で2番めに大きい淡水湖霞ヶ浦をひかえるという大自然の背景を踏まえ、その要望はより強かったのである。さらに、この霞ヶ浦には戦前、戦中を通じてわが国海軍の訓練基地、“予科練”の地として全国的に知られていたとする歴史的背景もあった。

豊かな観光資源の中でモーターボート競走を実現したいとするこれらの声に、土浦市でも本腰を入れ、昭和29年5月30日、多田清一土浦市議会議長の手により全国モーター

ボート競走会連合会会長宛、霞ヶ浦モーターボート競走場設置に関する決議書を提出した。

そして、同年6月9日には天谷虎之助土浦市長より、石井光次郎運輸大臣宛、同競走場の事前審査申請書を提出。さらに同年6月15日、天谷市長より塚田十一郎自治庁長官宛、モーターボート競走施行者指定申請書を提出する。

続く同年6月16日には、友末洋治茨城県知事が同じく塚田自治庁長官宛、競走施行者の指定申請による副申請書を提出した。

競走開催の実現に向けた関係者の努力はこうして日夜続けられたが、その中で当競走会も県及び各地方自治体の協力のもとにその設立準備を着々と進めていった。

こうして昭和29年7月29日、社団法人茨城県モーターボート競走会として運輸大臣より認可を受ける。

初代会長には椎名正氏が就任し、同年10月4日、当競走会は社団法人全国モーターボート競走会連合会に入会したのである。

●競走会構成員の推移

項目	年年 設立時	年							
		30	35	40	45	50	55	57	
会 員	28	28	28	26	25	25	24	24	
役 員 (常勤、非常勤)	6	6	6	6	6	6	5	5	

(注)各年度とも4月1日現在の集計、但し57年度は当表作成時(57年10月現在)

●歴代会長

代	会 長 名	任 期
初	椎 名 正	15 期



〔略歴〕

●大正5年8月16日、茨城県阿見町に生まれ、昭和17年計理士登録、同26年公認会計士登録、同27年税理士登録後椎名会計事務所所長に就任

千葉県競走会

心をひとつにして初期活動は着々と

モーターボート競走法が公布され、全国各地において競走会が名乗りをあげ認可されていった昭和26年秋頃、千葉県においてもその準備は着々と進められていた。そして、翌27年1月22日、社団法人千葉県モーターボート競走会は認可を受ける。関係者は直ちに施行予定者の受入れ、競走場及び施設者の選定等の活動に入り、競技実施のための専門要員の準備をも開始した。

途中紆余曲折はあったが、やがて競走場として県下我孫子町に隣接する手賀沼湖畔を選定。また昭和28年夏には、手賀沼競艇施行組合(1町3村)も結成された。さらに施設会社として常盤競艇(主体は合資会社雅叙園)も発足。ここに、(社)千葉県モーターボート競走会と我孫子町(現在は市)

を中心とした手賀沼競艇施行組合(代表者は秋谷好治我孫子町長)、常盤競艇(主体は合資会社雅叙園)の三者は、手賀沼湖畔における県下モーターボート競走事業の施行実施計画に対し、完全に合意したのであった。

これに基づき常盤競艇(主体は合資会社雅叙園)は必要な土地の買収、その他水面等の確保にも着手し、それぞれ支障なく進めていった。そして昭和29年4月8日には待望の手賀沼競艇場(仮称)の起工式が行われ、その後直ちに基礎工事第1期として競走場敷地の一部埋立工事を着工。さらに、千葉県側より要望のあった遊歩道路の造成にも着工するに至った。

この間当競走会では、競技実施のため募集した選手等要員の養成を開始し、また昭和29年5月には関東海運局に手賀沼競艇場の事前審査を申請した。

ところが、こうした諸事進行中に我孫子町民の一部から批判の声が起りその進行にも支障をきたすところとなった。

●歴代会長

代	会 長 名	任 期
初	前 田 郁	27. 1 ~ 27. 12
〔略歴〕 元衆議院運輸委員長		
2	宮 崎 龍 介	27. 12 ~ 33. 3
〔略歴〕 弁護士		
3	鈴 木 錠 次 郎	33. 4 ~ 50. 12
〔略歴〕 徽章業自営		
4	鈴 木 彰	54. 4 ~ 現 在



〔略歴〕

自営業

●歴代役員

代	副 会 長 名	任 期
初	高 原 正 高	27. 6 ~ 30. 3
2	鈴 木 錠 次 郎	30. 4 ~ 33. 3
代	専 務 理 事 名	任 期
初	鈴 木 彰	39. 9 ~ 51. 3

●競走会構成員数の推移

項目	年度 設立時	年							
		30	35	40	45	50	55	57	
会 員	33	33	33	37	37	27	27	25	
役 員 (常勤、非常勤)	26	26	26	4	4	4	4	4	

(注)各年度とも4月1日現在の集計、但し57年度は当表作成時(57年10月現在)

住民投票に賛否をゆだねて

その後、これら批判者から競艇事業側にとっては絶好の譲歩案も出されたが、対応の不手際もあって結局はその反対運動をより強化させるところとなった。これらに対し自治省、運輸省はともに審査事項を一時留保し、静観の態度をもって今後の推移を見守る、とした。

この反対運動に抗しきれず秋谷町長は、住民投票をもつ

て賛否を決定せざるを得なくなったが、昭和30年2月6日その投票の結果によって手賀沼湖畔における競艇場設置は否決となったのである。

これをもって手賀沼競艇事業はまったくの白紙に戻されることとなり、各方面に提出されていた競艇場設立のための関係書類はすべて取り下げられた。以来、当競走会は未開催競走会となり現在に至っている。

年 表

年 月 日	事 柄	年 月 日	事 柄
27. 1. 22	(社)千葉県モーターボート競走会設立許可		2. 競走場敷地の一部埋め立て工事着工
27. 8. 6	関東海運局より事前審査申請書の提出について出頭通知を受ける。	29. 5	3. 千葉県の指示により遊歩道路造成工事開始手賀沼競艇場事前審査を申請
27. 8. 7	岩崎事務局長が関東海運局へ出頭し審査書類の提出を11月30日と報告する。	30. 1. 29	「閣議申し合わせ」による「競走場の新設禁止」が決定される。
27. 10	佐原市を第1号施行希望者とし、競走場候補地として谷津海岸、手賀沼、清水公園その他数ヶ所を調査対象とすることを決定。	30. 2. 6	我孫子競艇場設置についての住民投票が行われ、否決された。 当然のことながら手賀沼における競走場は白紙とされた。
27. 12	「関東地区運営委員会」(東京都、千葉県、神奈川県、埼玉県)が発足し、選手、審判員、整備員を各自養成することを決議する	30.	1. (社)千葉県モーターボート競走会事務局閉鎖を決定する。
28. 1. 13	連合会の指示により当競走会が募集した選手は滋賀県大津市の国際モーターボート選手養成所に入所させることを決定する。		2. 当競走会が養成した選手6名は東京都モーターボート競走会選手会に吸収され、審判員合格者2名(4名)、検査員合格者4名(8名)もそれぞれ他競走会へ分散していった。さらに競技運営のための管理委員、番組編成委員、放送員等も当競走会から立去って行った。
28.	1. 我孫子町に隣接する手賀沼湖畔を競走場予定地として正式に決定する。 2. 手賀沼競艇施行組合を結成(1町3村)		3. 江戸川競艇場の2日間を借用しての競技実施の運動を検討する。
28. 12. 13	連合会の役員と(社)日本海員掖済会の理事と		
12. 28	施設者側、及び当競走会役員達が谷津海岸を2度検分した。		
29. 4. 8	1. 手賀村における競走場建設の起工式実施 (施設会社は常盤競艇株松尾国三社長)		

モーターボート競走30年史/連合会・競走会篇

昭和58年6月末日発行

●発行 (社) 全国モーターボート競走会連合会

印刷 (株) ワコー印刷



社団法人 全国モーターボート競走会連合会
東京都港区三田3丁目12番12号 ☎03(454)5051